

# 新函館市観光基本計画

「きらめきとふれあいの国際観光都市・函館」

函 館 市

## はじめに

本市においては、昭和57年に函館市観光基本計画を策定するとともに、平成元年には国際観光都市を宣言し、恵まれた自然資源や歴史的資源を活かしながら、地域が一体となって観光振興に取り組んできたところであり、今日、本市観光は、年間500万人の観光客が訪れる我が国有数の都市型観光地として成長を続けております。

近年の国内観光動向は、国内経済の伸びが鈍化する中で、所得の増大や労働時間の短縮、週休2日制の進展など、生活の中で自由時間拡充のための余暇活動を重視するライフスタイルが強まっており、今後の観光需要の増大が期待されるところであります。

しかし、一方では、高齢化や国際化、情報化といった社会が一層進展する中で、観光に対するニーズもますます多様化しており、また、全国各地においては、観光関連の開発が活発に進められているなど、観光地を取り巻く地域間競争は、円高等による国際間競争を加え、ますます激化することが予想されております。

このような中、これからの観光振興には、観光を取り巻く環境の変化や今後の動向を適確に踏まえた対応が肝要であり、こうした観点に立ち、来るべき21世紀を展望しながら通年で魅力あふれる観光地づくりに努め、地域経済の活性化をはじめ、市民生活や文化の向上などを図るため、「きらめきとふれあいの国際観光都市・函館」を基本テーマに新函館市観光基本計画を策定いたしました。

市といたしましては、各種施策、事業を推進し観光振興に努めてまいり所存であります。関係皆様方におかれましても、本計画をご理解いただき、なお一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

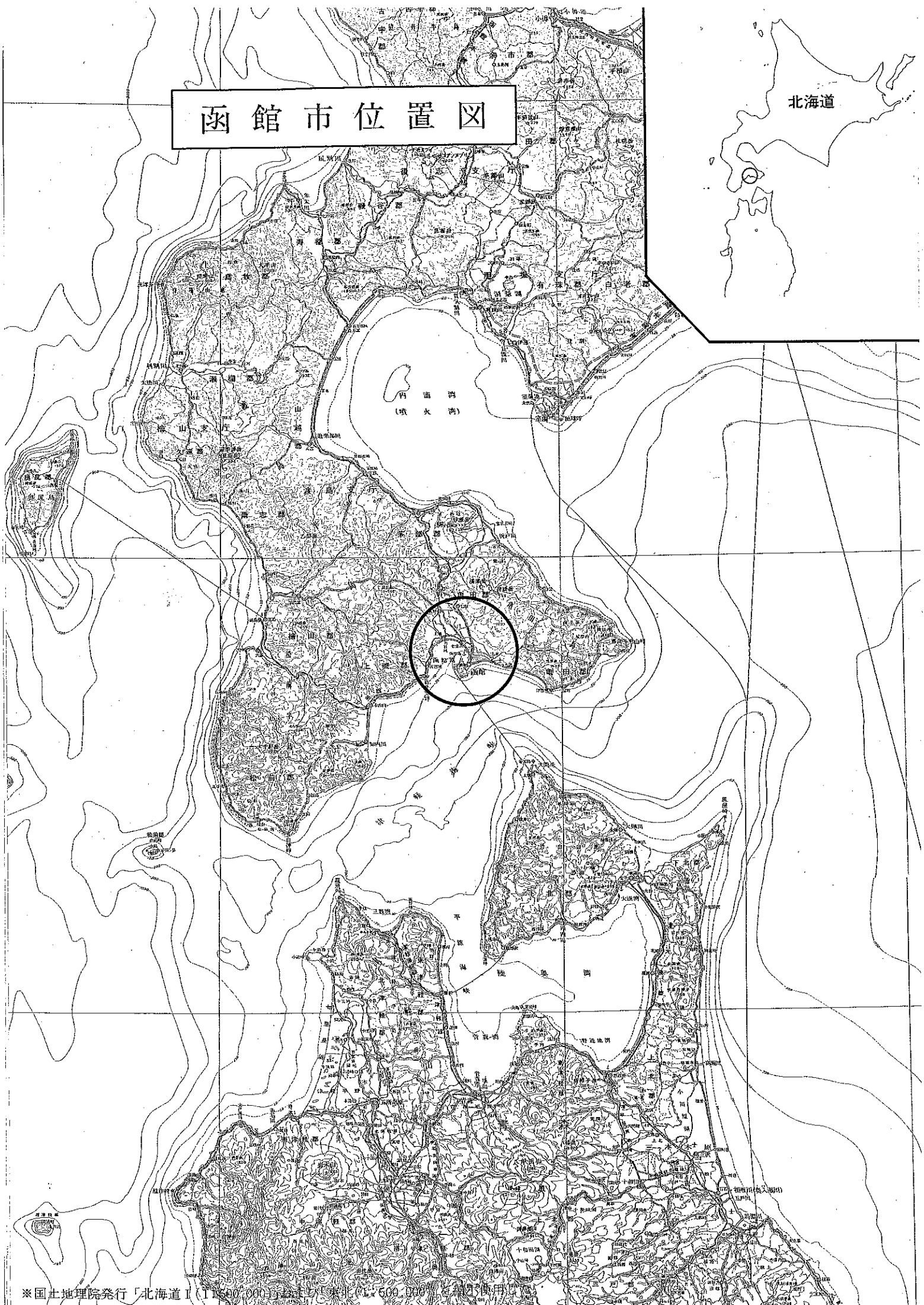
おわりに、本計画の策定にあたり、新函館市観光基本計画検討委員会の委員各位をはじめ関係機関・団体、市民の皆様から貴重なご意見やご協力をいただきましたことを、心から厚くお礼申し上げます。

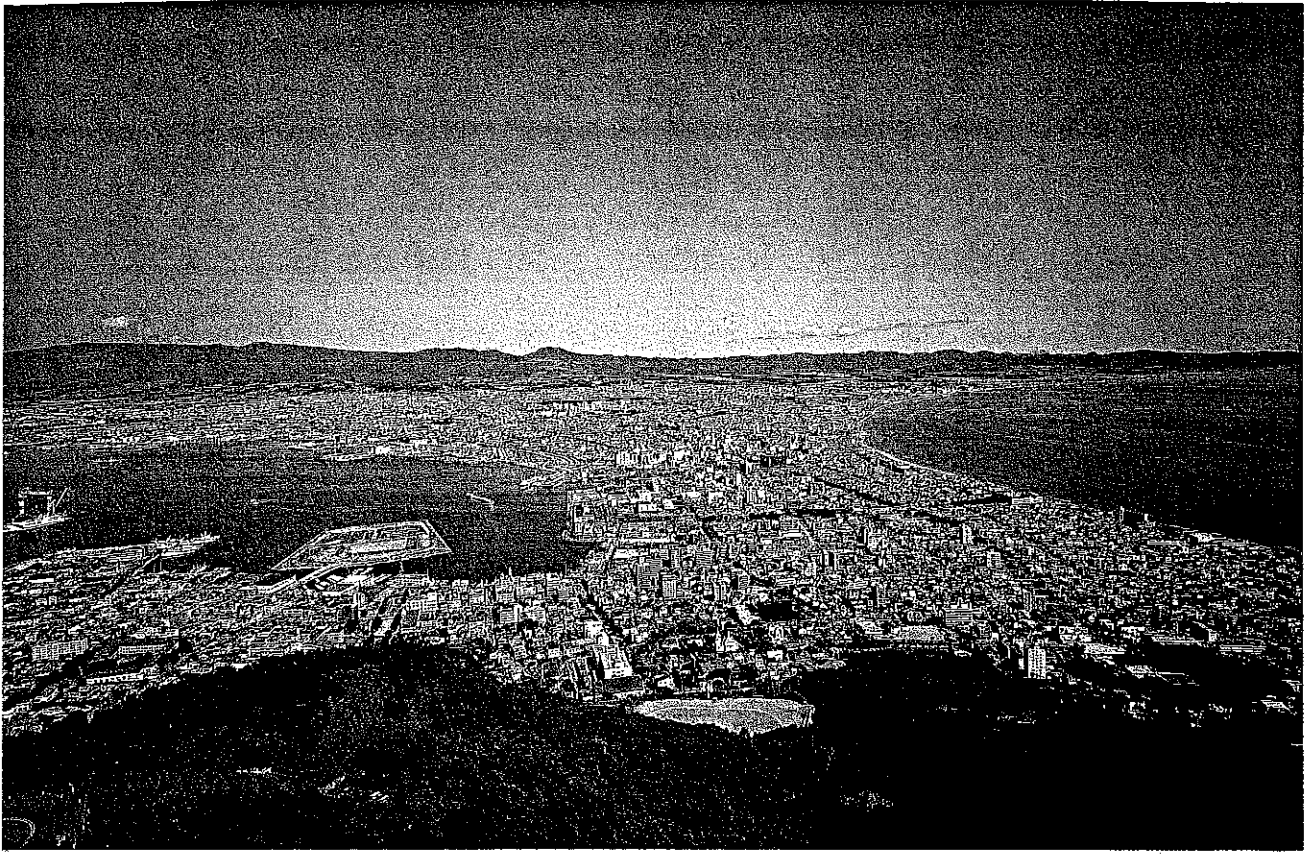
平成6年3月

函館市長 木戸浦 隆 一

# 函館市位置図

北海道





函館山山頂から市街地を望む



同 夜 景

# 目 次

第 I 章 序 .....	1
1 計画の目的 .....	2
2 計画の期間 .....	2
第 II 章 函館観光の現況分析 .....	3
II-1 函館市の概況 .....	4
II-2 函館観光の分析 .....	6
1 函館市の観光資源 .....	6
2 函館市の交通環境 .....	10
3 函館観光のポテンシャル .....	12
4 函館観光のイメージ .....	15
II-3 観光動向の分析 .....	18
1 全国の観光動向 .....	18
2 北海道および道南の観光動向 .....	24
3 函館市の観光動向 .....	26
第 III 章 函館観光の課題と将来方向 .....	33
III-1 全国的な観光の将来展望 .....	34
1 今後の観光動向 .....	34
2 観光地の将来展望 .....	36
III-2 函館観光の課題 .....	38
III-3 函館観光の将来方向 .....	41
1 将来方向 .....	41
2 展開のポイント .....	42

<b>第Ⅳ章 基本計画</b>	<b>45</b>
Ⅳ-1 基本理念と目標像	46
1 基本理念	46
2 基本的目標像と基本方策	47
3 基本テーマ	50
Ⅳ-2 振興計画	51
1 拠点整備	51
2 交通ネットワークの整備	58
3 冬季観光の振興	59
4 誘致宣伝活動の推進	60
5 ホスピタリティの充実	61
6 産業観光の振興	62
7 広域観光の推進	63
Ⅳ-3 計画実現のための施策	65
1 観光資源・施設等の整備	66
2 交通ネットワークおよび広域観光ルートの整備	69
3 コンベンション機能, イベントの充実	70
4 誘致宣伝の充実	71
5 ホスピタリティの充実	72
6 観光関連産業の振興	73
7 国際観光都市機能の充実	74
Ⅳ-4 計画推進のあり方	75
1 計画推進の基本的な考え方	75
2 推進体制のあり方	75
<b>第Ⅴ章 需要目標</b>	<b>77</b>

# 第 I 章 序

# I 序

## 1 計画の目的

本市の観光振興については、昭和57年に策定をした函館市観光基本計画に基づき、地域が一体となって、観光資源、施設の整備やまちの美化、ホスピタリティの向上等に取り組んできたところである。

現在、本市を訪れる観光客数は、計画策定時と比較するとほぼ倍増しており、このことから観光は、地域経済の基幹産業としてますます重要なものとなっている。

一方、昨今、全国的に観光を取り巻く環境は、所得や余暇時間の増大、核家族化と高齢化社会の一層の進展など、様々な要因により大きな変化を遂げてきている。

本市においては、これまでの観光資源、施設の整備等とともに、津軽海峡線の開通や航空網の充実など交通体系の拡充等により、来函観光客数も順調な推移をみてきたが、平成元年の「国際観光都市宣言」を一つの契機とする国際化、さらには通年化、広域化、ソフト化等への対応が強く期待されている。

こうした地域内外の情勢を踏まえつつ、函館観光のより一層の飛躍を目指し、21世紀を展望する「国際観光都市 函館」の形成を図っていくため、新函館市観光基本計画を策定し、もって地域の発展に資するものである。

## 2 計画の期間

本計画の期間は、来るべき21世紀への対応という長期的な展望を踏まえ、平成6年度～平成15年度までの10年間とする。



## 第II章

### 函館観光の現況分析

## II-1 函館市の概況

本市は、渡島半島南端部、函館平野に位置し、古くから港を中心に交易が盛んであり、安政6年(1859)横浜、長崎とともに我が国最初の貿易港・近代日本の先駆けとして海外に門戸を開いたまちである。

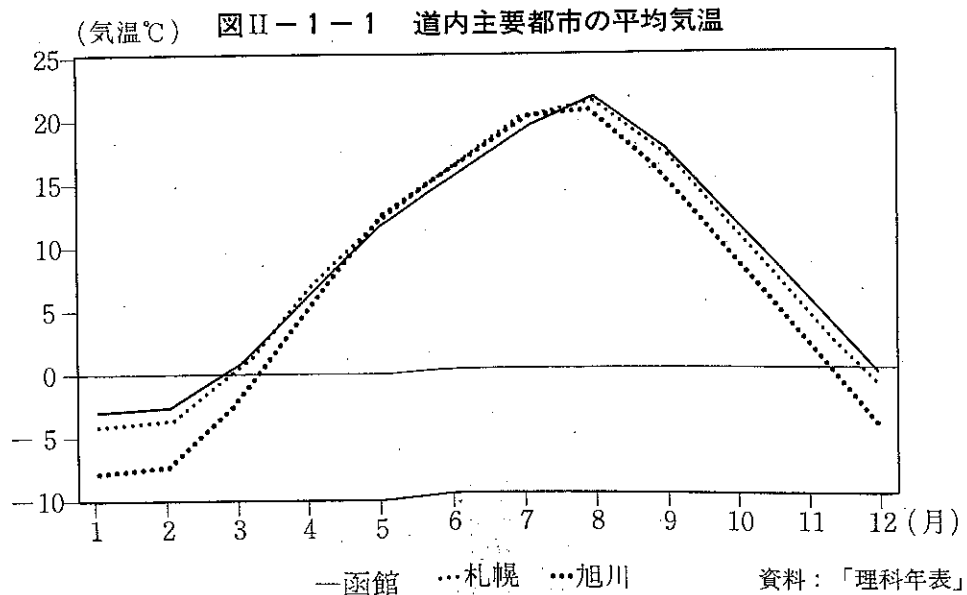
また、北海道の表玄関、北海道開拓の拠点としての歴史的な背景を持つまちでもあり、これらにちなんだ史跡や文化財等が数多く残っている。

気象条件は、対馬暖流の影響を受けた海洋性気候であり、道内にあつては降雪量が少なく、また寒暖の差が比較的少ないなど温暖で恵まれた環境にある。(図II-1-1)

人口は、平成2年国勢調査によると307,249人であり、昭和55年比4%減となっているが、この主な要因としては、男子就業者の減少、近隣町への流出、15~19歳の年齢層の転出、出生数の減少等が考えられる。(表II-1-1)

また、その就業構造をみると、卸売・小売・飲食業、サービス業など第3次産業の比率が極めて高くなっている。(表II-1-2)

一方、経済の発展経過をみると、明治以後、北洋漁業、造船、商業を中心に、概ね安定した成長を遂げてきたが、昭和48年のオイル・ショックや52年の200カイリ規制の影響を受け、基幹産業であった水産業、造船業が停滞傾向を示し、一時期厳しい経済環境のもとにおかれることとなったが、昭和63年の青函トンネル開通や平成元年の国際観光都市宣言などを経ながら各種観光資源等の整備が進められ、近年、観光も中心のひとつとなって、比較的順調な発展を遂げてきている。



表II-1-1 函館市の年齢階層別人口

(単位：人)

年齢別	昭和55年			昭和60年			平成2年		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
総数	320,154	151,468	168,686	319,194	149,253	169,941	307,249 △4.0 (5.6)	141,771	165,478
幼年人口 (0~14)	73,744	37,879	35,865	68,320	35,249	33,071	54,686 △25.8 (△18.3)	28,090	26,596
生産年齢人口 (15~64)	217,297	101,673	115,624	216,885	100,549	116,336	212,518 △2.2 (9.0)	98,081	114,437
高齢人口 (65~)	29,032	11,868	17,164	33,707	13,296	20,411	39,958 37.6 (40.0)	15,550	24,408
年齢不詳	81	48	33	282	159	123	87	50	37

下段：対55年比伸び率

( )：全国人口の対55年比伸び率

資料：平成2年国勢調査

表II-1-2 函館市の産業別就業人口

産業 (大分類)	平成2年		
	総数	男	女
総数	135,134 ( 100 )	79,046 ( 100 )	56,088 ( 100 )
第1次産業	3,710 ( 2.7 )	2,613 ( 3.3 )	1,097 ( 2.0 )
農業	1,582 ( 1.2 )	881 ( 1.1 )	701 ( 1.3 )
林業	366 ( 0.2 )	306 ( 0.4 )	60 ( 0.1 )
漁業	1,762 ( 1.3 )	1,426 ( 1.8 )	336 ( 0.6 )
第2次産業	28,990 ( 21.5 )	20,657 ( 26.1 )	8,333 ( 14.9 )
鉱業	67 ( 0.1 )	50 ( 0.1 )	17 ( 0.0 )
建設業	14,134 ( 10.5 )	12,147 ( 15.3 )	1,987 ( 3.6 )
製造業	14,789 ( 10.9 )	8,460 ( 10.7 )	6,329 ( 11.3 )
第3次産業	101,883 ( 75.4 )	55,469 ( 70.2 )	46,414 ( 82.7 )
電気・ガス・熱供給・水道業	893 ( 0.7 )	759 ( 1.0 )	134 ( 0.2 )
運輸・通信業	10,884 ( 8.1 )	9,719 ( 12.3 )	1,165 ( 2.1 )
卸売・小売業、飲食店	38,927 ( 28.8 )	19,032 ( 24.1 )	19,895 ( 35.5 )
金融・保険業	4,981 ( 3.7 )	2,126 ( 2.7 )	2,855 ( 5.1 )
不動産業	1,518 ( 1.1 )	870 ( 1.1 )	648 ( 1.1 )
サービス業	38,008 ( 28.1 )	17,547 ( 22.2 )	20,461 ( 36.5 )
公務	6,672 ( 4.9 )	5,416 ( 6.8 )	1,256 ( 2.2 )
分類不能の産業	551 ( 0.4 )	307 ( 0.4 )	244 ( 0.4 )

資料：平成2年国勢調査

## II - 2 函館観光の分析

### 1 函館市の観光資源

#### (1) 特 性

本市の観光資源の多くは、幕末、明治期の歴史的事跡や開港による欧米文化の影響を受けた建築物等であり、それらが醸し出す一種独特で、異国情緒豊かなまちなみが函館観光の大きな特徴となっている。(表II-2-1)

また、文化財指定の建造物、美術工芸品や文学・歴史的人物の足跡を伝える記念碑等も数多く残され、これらの観光資源は、特に函館山麓の西部地区に集中しており、雄大な自然に特色を持つ北海道観光の中では異彩をはなっており、観光客の人気は極めて高い。

また、史跡以外で観光客に最も人気が高い観光資源は、函館山からの眺望であり、特にその夜景のすばらしさは国際的な観光資源としても十分にその優位性を発揮する資質を備えている。

一方、国内の他の観光地と比較すると、市民も楽しめる娯楽性の高いレジャー・レクリエーション資源が少なく、また本市の立地特性を活かした海洋性の観光資源が比較的少ない状況にある。

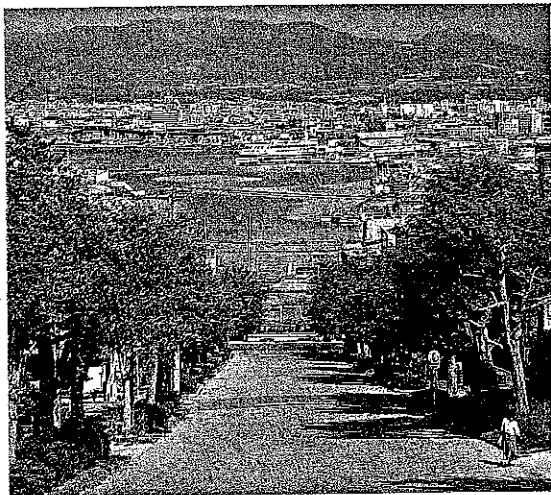
#### (2) 分 布

本市の主要な観光資源は、函館山と西部地区(函館駅前周辺を含む)、五稜郭地区、湯の川とトラピスチヌ修道院周辺地区の3地点に分布している。

特に、西部地区には、その多くが集中していることから、徒歩での名所・史跡めぐりなど面的に周遊性の高い観光エリアを形成しているが、観光資源として評価の高い特別史跡五稜郭跡やトラピスチヌ修道院などは、点的に散在している状況にある。

表Ⅱ-2-1 函館市の主要観光資源

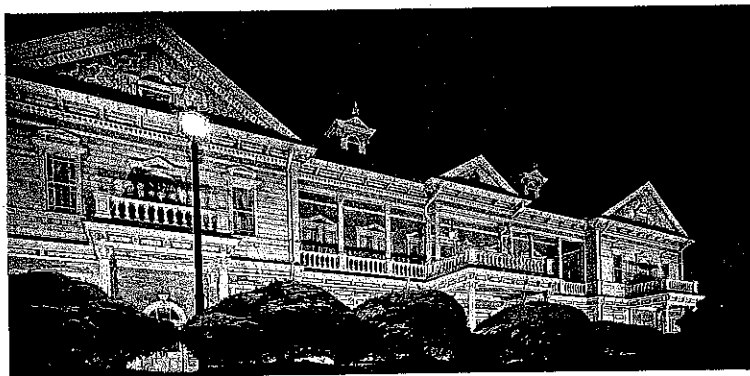
自 然 資 源		碑・像	
山	函館山、東山		
河川等	松倉川、矢別ダム、新中野ダム、笹流ダム		
海岸	立待岬、穴澗・寒川、大森浜		
温泉	湯の川、谷地頭		
人 文 資 源		行事	
社寺等	カトリック元町教会 聖ヨハネ教会 日本基督教団函館教会 トラピスチヌ修道院 護国神社 函館八幡宮 亀田八幡宮 船魂神社 高龍寺 称名寺 実行寺 東本願寺函館別院		
都市景観	西部地区歴史的景観地域 元町末広町重要伝統的建造物群保存地区 函館港 坂道 ファンタジー・フラッシュ・タウン	郷土芸能	巴太鼓、道南口説
歴史的建造物	[重要文化財・国指定] 太刀川家住宅店舗 函館ハリストス正教会復活聖堂 旧函館区公会堂 大日如来坐像(高野寺内) [有形文化財・道指定] 旧金森洋物店(郷土資料館) 旧北海道庁函館支庁庁舎(元町観光案内所) 旧開拓使函館支庁書籍庫 旧函館博物館1号 旧函館博物館2号 遺愛学院旧宣教師館 [有形文化財・市指定] 旧イギリス領事館(開港記念館) [その他] 中華会館 道南青年の家(旧ロシア領事館) 函館ヒストリープラザ(金森倉庫群) 相馬株式会社 函館市末広町分庁舎(旧丸井今井) 南北海道電子計算センター(旧第113銀行) 金森美術館バカラコレクション(旧金森船具店) 明治館(旧函館郵便局) BAYはこだて(旧日本郵船倉庫) (ほか、上記を含む 景観形成指定建築物等 47件 伝統的建造物 76件) 日本最古のコンクリート電柱 東浜栈橋(旧栈橋) 元町配水場	地域風俗	朝市、自由市場、中島販売
		味覚	いか(イカ刺し、イカソーメンなど)、その他魚介類、鮭、三平汁、馬鈴薯、赤かぶ、ハム・ソーセージ、バター、ワイン、牛乳 など
		観光・文化・スポーツ施設等	
史跡	[特別史跡・国指定] 五稜郭跡 [史跡・国指定] 四稜郭 志苔館跡	観光施設	五稜郭タワー 函館山ロープウェイ・展望台 市宮熱帯植物園 観光軌馬車 港内遊覧船 函館シーボートプラザ・メモリアルシップ摩周丸 ふれあい「イカ広場」 市電
		文化施設	市立函館図書館 市立函館博物館・五稜郭分館 函館市北洋資料館 北海道立函館美術館 函館市北方民族資料館 函館市文学館 函館市民会館 高田屋嘉兵衛資料館 北方歴史資料館
事跡	白岸河野館跡 箱館奉行所跡 ベリール会見所跡	スポーツレクリエーション施設	函館市民体育館 函館市民プール 函館市民スケート場 千代台公園陸上競技場 千代台公園野球場 根崎公園ラグビー場 空港緑地パークゴルフ場 ゴルフ場(7)、アスレチック等(5)
公園	函館公園 元町公園 市民の森 見晴公園 啄木小公園	見学・体験施設	梁川公園(交通公園) NHK函館放送局 日本たばこ産業(株)函館工場 榎宇治園 北海道瓦斯(株)函館支社 第2明治館 北海道乳業(株) 生田ガラス館函館 ザ・ガラススタジオ・イン・函館 榎布目 (株)函館カール・レイモン本社工場
		その他レクリエーション	函館競馬場 函館競輪場



八 幡 坂



ウォーターフロントの倉庫群



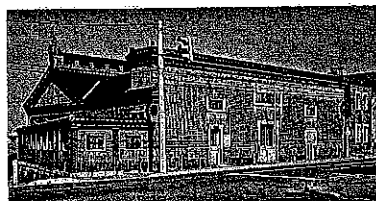
ライトアップされた重要文化財旧函館区公会堂



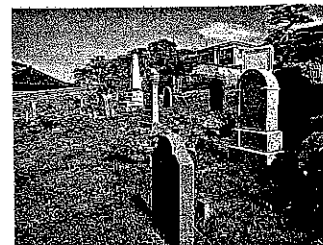
重要文化財  
函館ハリストス正教会復活聖堂



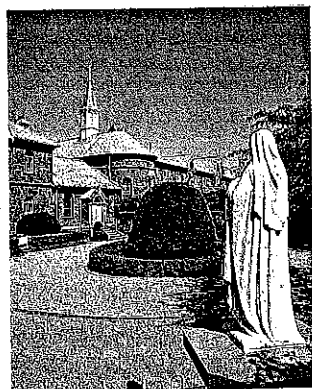
旧イギリス領事館(開港記念館)



中 華 会 館



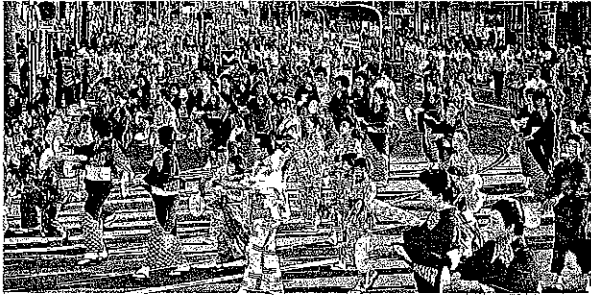
外 人 墓 地



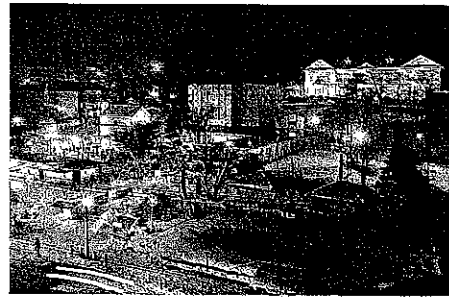
トラピスチヌ修道院



特別史跡五稜郭跡



函館港まつり (一万人おどりパレード)



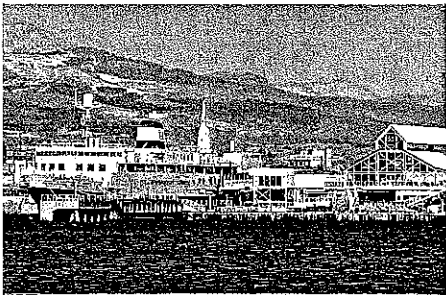
はこだて冬・フェスティバル



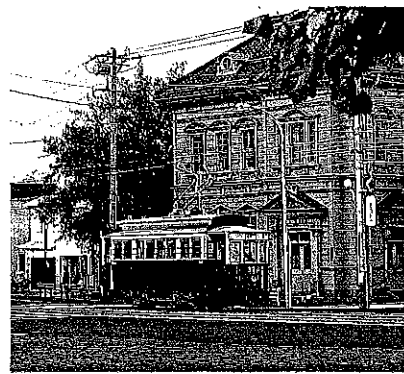
函館夜景の日



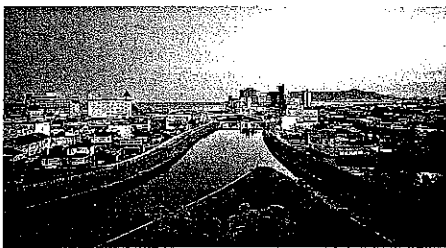
市民創作函館野外劇



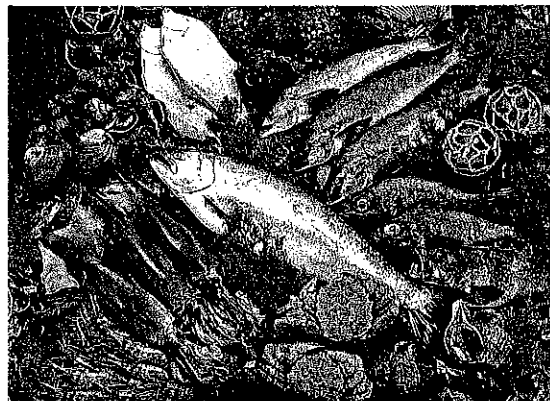
函館シーボートプラザ・メモリアルシップ摩周丸  
ふれあい「イカ広場」



レトロ電車「箱館ハイカラ号」



湯の川温泉



新鮮な魚介類



朝市

## 2 函館市の交通環境

### (1) 航空路

国内の主要空港である函館空港は、東京、大阪、名古屋、仙台、札幌（新千歳、丘珠）、奥尻、秋田の8路線で結ばれ、加えて平成4年4月には福岡線が就航するなど、航空機利用客は年々増大傾向にある。その便数は、延べ25便（平成5年8月現在）を数え、特に首都圏や札幌圏とのアクセス性が高い。

また、平成6年には、ロシア・ユジノサハリンスクとの航路開設が予定されているとともに、空港滑走路3000mへの拡張や国際線ターミナルの建設が進められるなど、国際空港としての機能強化が図られている。

### (2) 幹線道路

札幌方面を結ぶ国道5号や江差、松前方面を結ぶ国道227、228号、恵山方面を結ぶ国道278号が主要な幹線道路となっている。

また、国道5号函館新道や一般国道自動車専用道路函館・江差自動車道の整備が進められ、一部区間においては既に供用開始されており、さらには、平成5年11月に北海道縦貫自動車道の七飯・長万部間の施行命令が出され、その整備が進められるところとなっている。このほか本市と道南圏は主要な道道により結ばれている。

これら主要な幹線道路には、本市と道南圏の各地を結ぶ路線バスや、札幌、洞爺湖方面へのシャトルバス（定期連絡バス）が運行されているほか、函館と大沼・駒ヶ岳、江差・松前などを周遊する広域の定期観光バスコースも設定されている。

### (3) 鉄道

昭和63年の青函トンネル開通により本州とを結ぶ津軽海峡線が運行を開始し、東京、大阪方面との利便性の強化が図られており、道内方面においても平成4年からリゾート列車が運行され、また新型車両の導入によるスピードアップが図られるなど、利用者ニーズの多様化へ対応している。

一方、北海道新幹線については、平成3年に着工した東北新幹線（盛岡～青森間）の青森開業時における函館までの同時開業を目指し、北海道や青森県などと整備促進運動を展開している。

### (4) 海上交通

函館と本州の青森、野辺地、大間間を結ぶフェリーが就航しているほか、平成2年からは、函館～青森間にジェットフォイルが就航するなど、海上輸送の大型化、高速化、高級化が図られ、安定した交通手段となっている。

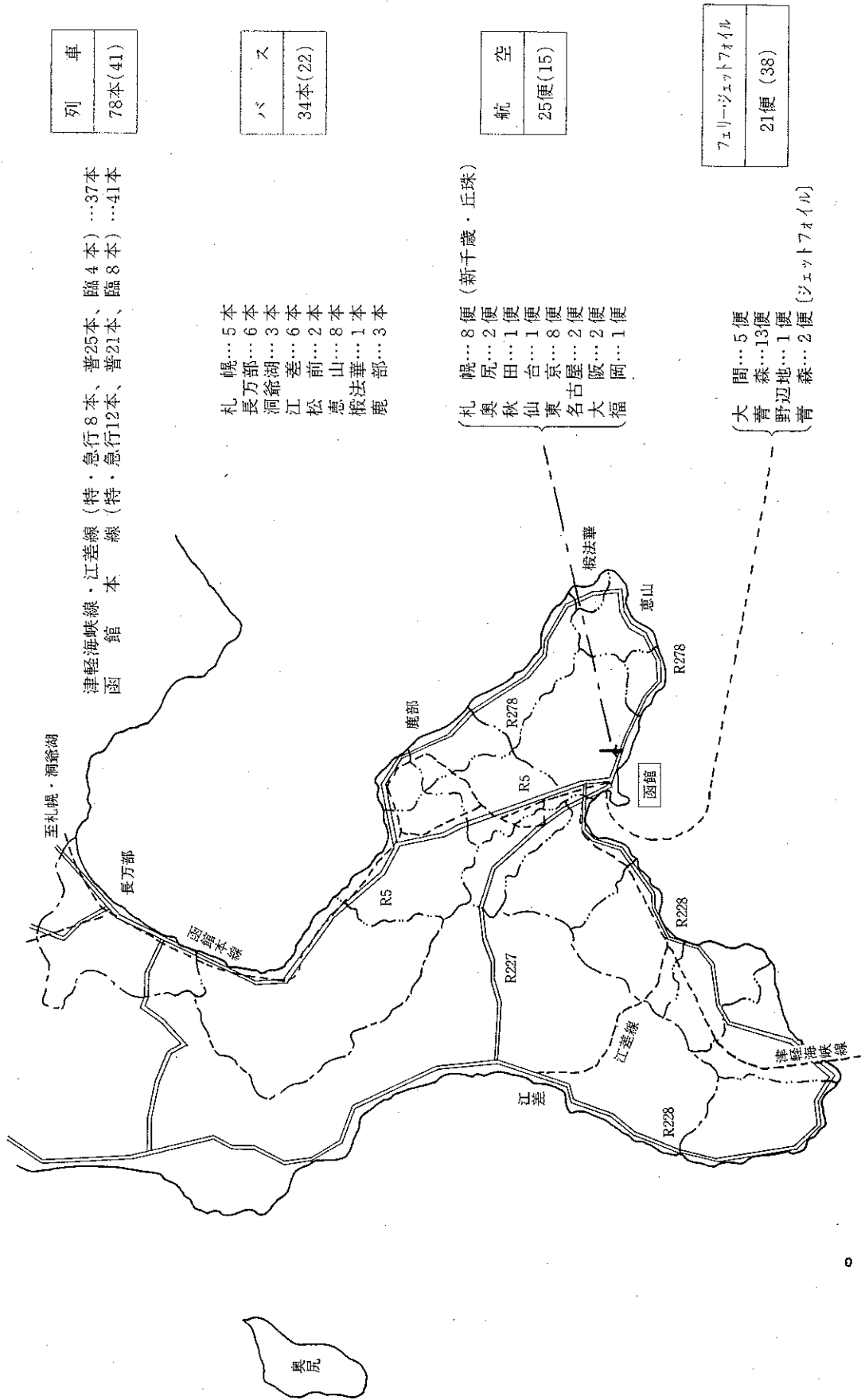
### (5) 市内交通

市電は、市民生活に必要な都市施設として機能しているほか、新たにレトロ電車が運行されるなど、観光資源としての見直しを含め、市内観光の重要な交通手段のひとつとなっている。

定期観光バス、ハイヤー・タクシーについては、利用者ニーズに合わせた多様なコースが運行されている。



図II-2-1 函館への乗り入れ交通機関現況 (平成5年8月現在, カッコ内: 昭和56年8月当時)



### 3 函館観光のポテンシャル

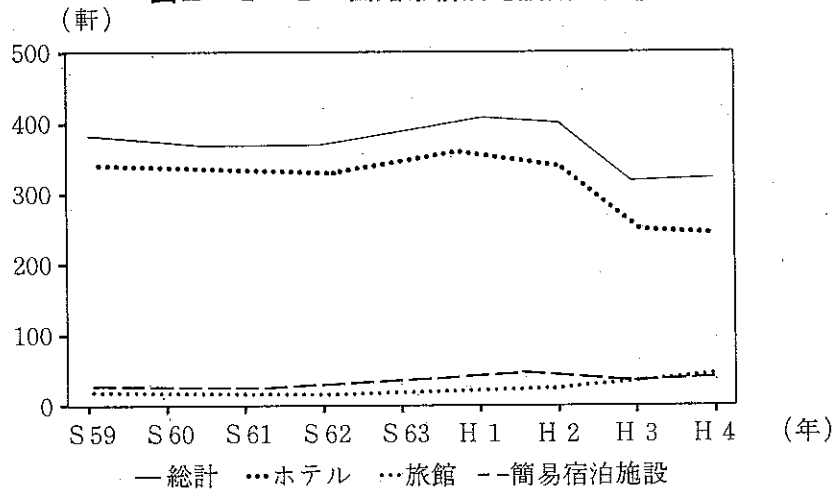
#### (1) 宿泊施設

本市の宿泊施設は、総数で約320軒、収容人員で約21,000人（平成4年3月末現在）となっている。

その特徴としては、青函トンネルの開通した昭和63年以降宿泊収容力が増大する一方、施設数は減少の傾向を示している。

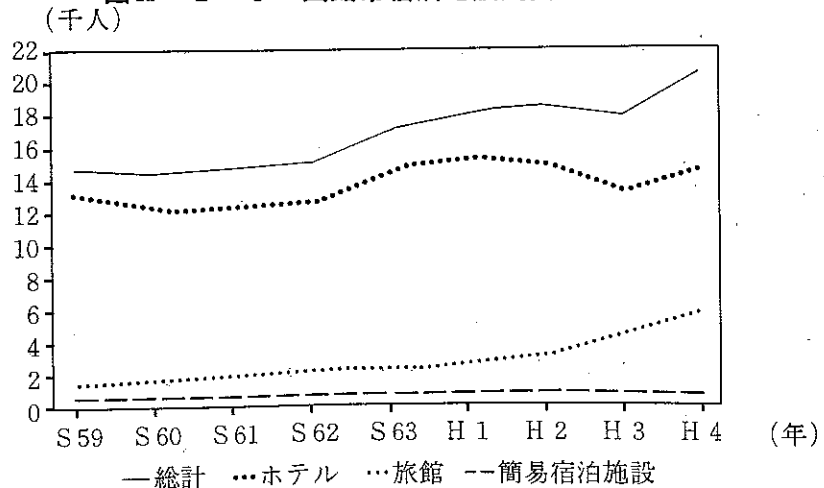
また、宿泊施設の形態としては、ホテル、ビジネスホテルが駅前周辺および五稜郭地区に、旅館、ホテルが湯の川温泉地区に集中しており、近年、特にホテル、ビジネスホテルの収容力の伸びが高くなっている。（図Ⅱ-2-2、図Ⅱ-2-3）

図Ⅱ-2-2 函館市宿泊施設数の推移



出典：市立函館保健所

図Ⅱ-2-3 函館市宿泊施設定員数の推移



出典：市立函館保健所

## (2) 情報サービス

情報サービス活動については、第3セクターの函館インフォメーション・ネットワーク（HINET）がキャプテンシステムにより全国に向け観光情報や宿泊情報等を発信しているほか、NTTによるテレホンサービスが実施され、平成4年12月からは、全国初のコミュニティFM放送局による観光情報や交通情報のサービスも行われている。また、平成6年には、都市型CATV（有線テレビ）の開局が予定されている。

さらに、市内2カ所（駅前・元町）に設置した観光案内所においては、観光客に対する日常の利便が図られているとともに、駅前観光案内所は「i」案内所（外国人客に対する情報提供機能を持つ案内所）として、外国人観光客に対する情報サービスにも努めている。

## (3) 観光ホスピタリティ

一般的に北海道観光は、大自然を売り物に、それらに依存するあまり、サービスや料理が画一的であるなど、観光ホスピタリティについては厳しい評価がなされている。本市が実施している観光客アンケート調査によると、観光地としての印象の中で、悪かった点として、ドライバーの運転マナーや観光関連従事者の接遇サービスに関する苦情があげられている。

また、観光についての市民アンケート調査によると、受け入れ体制の整備面の課題として、「観光関係従事者の接遇サービスの向上」「市民ホスピタリティの向上」が上位にあげられており、このことは国際観光都市宣言後、市民の間にもホスピタリティの重要性が認識されてきていることを示している。

これらの対応策として、市民に対する観光モニター制度の実施、観光ボランティアの育成や観光協会等による接遇講習会等の開催などが進められている。

このほか民間ボランティアによる観光ガイドサービスも行われている。

## (4) 広域的な視点でのポテンシャル

### ① 道南観光圏

#### ア. 観光資源

道南圏は、大沼国定公園をはじめ、恵山、松前矢越、檜山、狩場茂津多の道立自然公園など、景勝に富む海岸線や山岳、湖沼等、優れた自然資源に恵まれている。

特にスキー場やゴルフ場等のスポーツレクリエーション施設は、大沼国定公園

周辺を中心に整備されており、新たなリゾート地としても注目されている。

これらの観光資源は、各地でその特性を活かした整備が進められており、大沼周辺、松前、江差など知名度も高まってきているが、全般的には、まだ十分とはいえず、また交通体系に大きな進展がみられないことなどから、観光地として有効に機能していない面も多い。

#### イ. 観光ルート

道南圏を結ぶ主な観光ルートとしては、次のコースが設定されている。

##### ● エイトライン

函館を中心に、函館～江差～松前～木古内～函館という西回りコースと函館～恵山～榎法華～森～七飯～函館という東回りコースが連動する、函館近郊を巡るルートである。

##### ● 追分ソーランライン

函館から、木古内～福島～松前～江差～熊石～瀬棚～小樽と日本海沿いに北上していくコースであり、道南圏と道央圏を結ぶ日本海ルートである。

##### ● みなみ北海道オーシャンライン

函館から、恵山～榎法華～森～八雲～長万部～苫小牧に至るコースであり、道南圏と道央圏を結ぶ太平洋ルートである。

#### ウ. 宿泊施設

道南圏の宿泊施設については、大沼を擁する七飯町に比較的多く集積しているほか、温泉資源を中心に江差町、奥尻町、松前町、恵山町、鹿部町、八雲町、長万部町などに点在している。

#### ② 青函観光圏

これまでも、函館地域と、青森地域においては、広域観光圏形成のため、観光客誘致や宣伝活動など相互に連携して取り組んできたが、昭和63年の青函トンネルの開通を契機に平成元年には、本市と青森市との間でツインシティの提携がされるとともに、青函圏の時間距離の短縮による観光行動圏の拡大など、青函圏の一体的な観光振興に対する期待とその動きが一層活発になってきている。

青函連絡船当時に比べ時間距離で約2時間短縮され、さらに近い将来新幹線が通ることにより、函館・青森両地域の一層の連携強化が強く望まれている。

## 4 函館観光のイメージ

### (1) 北海道における函館観光

北海道観光に共通するイメージは、雄大な自然であり、大自然の中でリゾートを楽しむ観光形態が北海道観光最大のセールスポイントである。

しかし、北海道観光は、夏季と冬季の2シーズン集中型観光形態に特徴があり、観光行動の大半は、夏季が自然志向の見学型、冬季はスキーなどのスポーツ型といった傾向が強い。こうした2シーズン型の観光地から脱皮することが、北海道観光の課題であり、その打開策の一つとして都市型リゾートや史跡観光の充実などが指摘されている。

こうした北海道観光の中であって、史跡・グルメ・温泉保養地型観光の性格を持つ本市観光は、道内他地域に比べ異国情緒あふれるまちなみに代表されるような個性や交通の利便性など観光ポテンシャルが高く、その独自性を発揮することにより通年化への対応も十分に期待できる。

### (2) 全国における函館観光

一般的に旅行者が観光地を選択する場合、観光地の持つイメージが重要な要素となる。

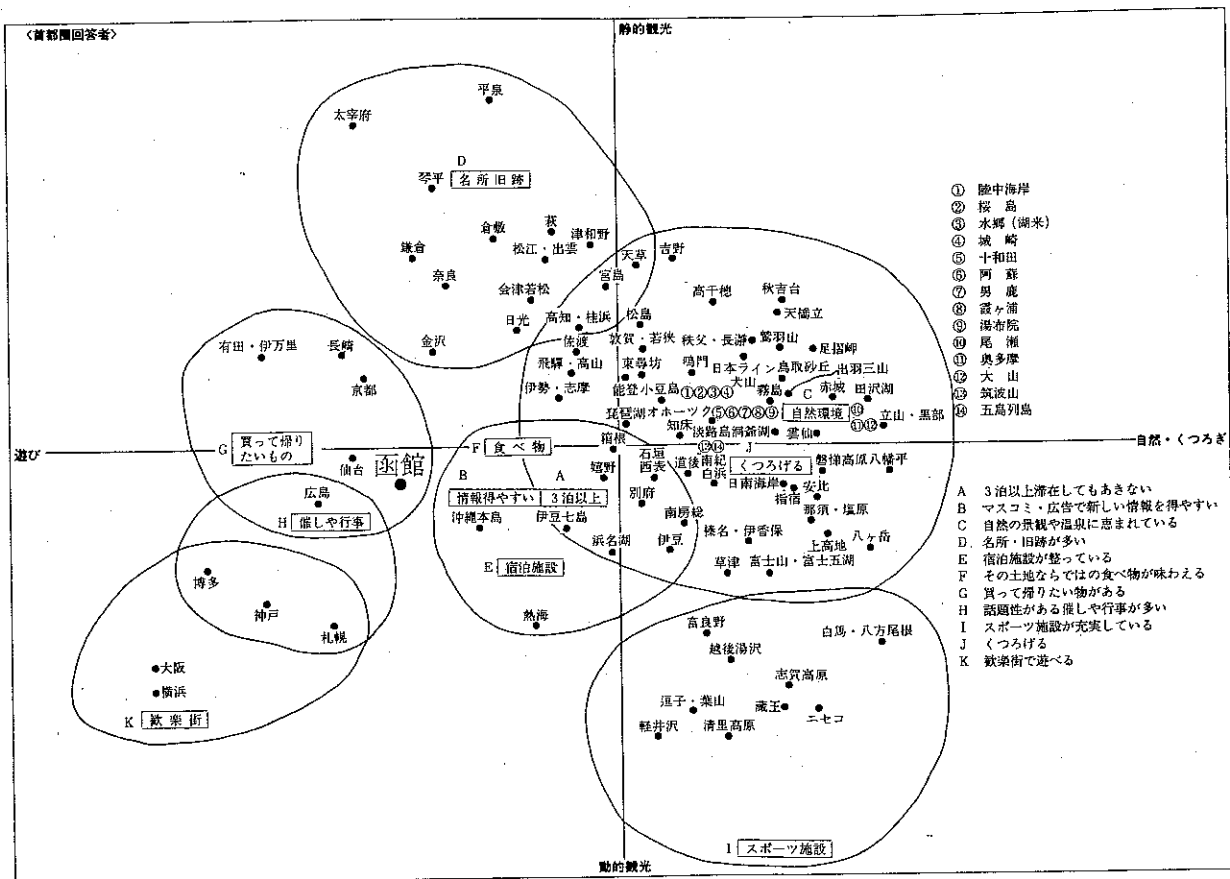
このため、民間が実施した「観光地イメージ調査」と「人気観光地調査」をもとに本市観光のイメージの分析を行った。

その結果、本市は海産物等の土産品やグルメあるいはイベント・催事イメージの強い地域としてとらえられている。(図Ⅱ-2-4, 図Ⅱ-2-5)

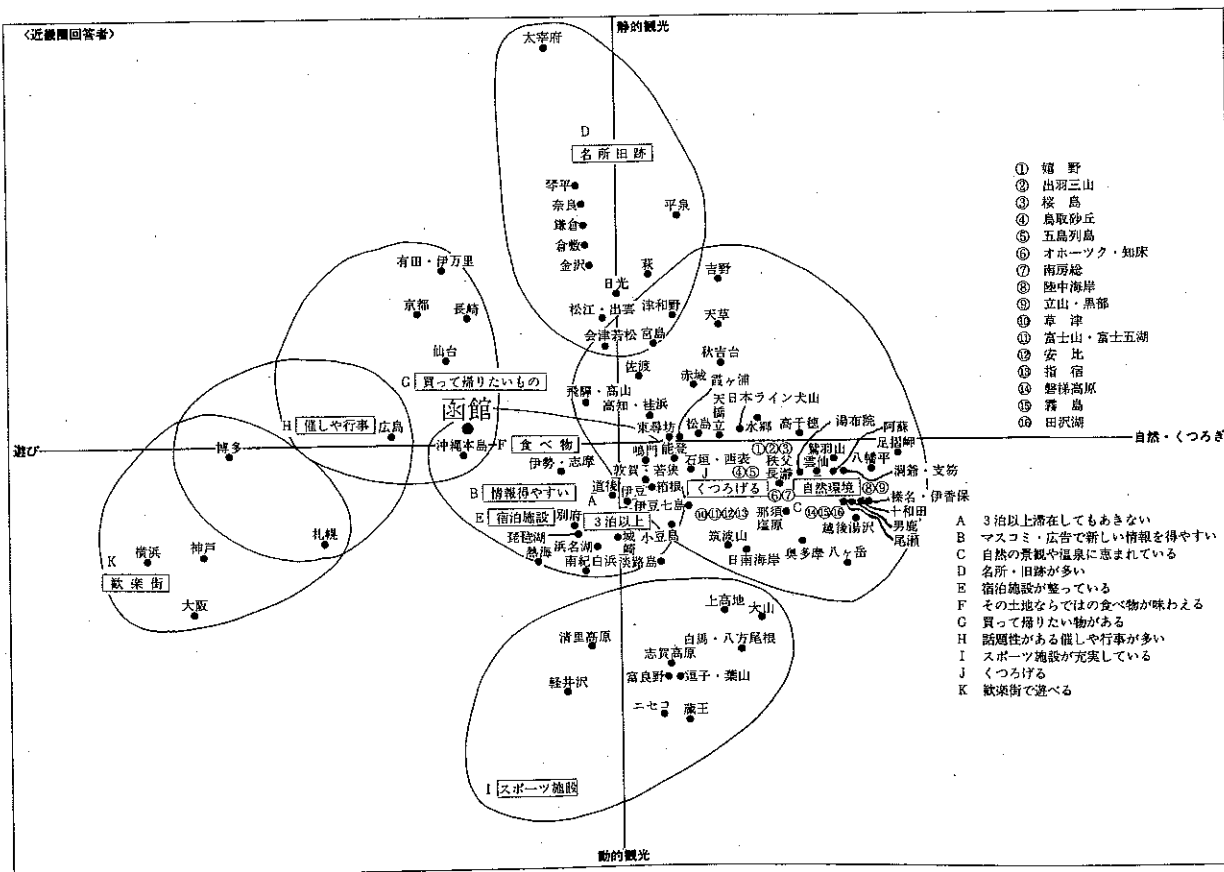
また、観光地に対する人気度等の調査結果によると、本市は、行ってみたい観光地の5位、もう一度行きたい観光地の6位にランクされ、沖縄、札幌、京都、神戸などとともに人気観光地のひとつとなっている。(図Ⅱ-2-6)

こうした本市を含む人気観光地は、いずれも旅行代理店が主要顧客とするOLや学生、熟年層に評判の高い観光地でもあり、本市は、札幌・小樽・金沢・京都・神戸・長崎と同じ情緒・散策、都市・レジャー型の観光地に位置づけされ、今後、これらの観光地といかに差別化を進めていくかが重要なテーマである。

図II-2-4 国内主要観光地のイメージ別分類 (首都圏)



図II-2-5 国内主要観光地のイメージ別分類 (近畿圏)



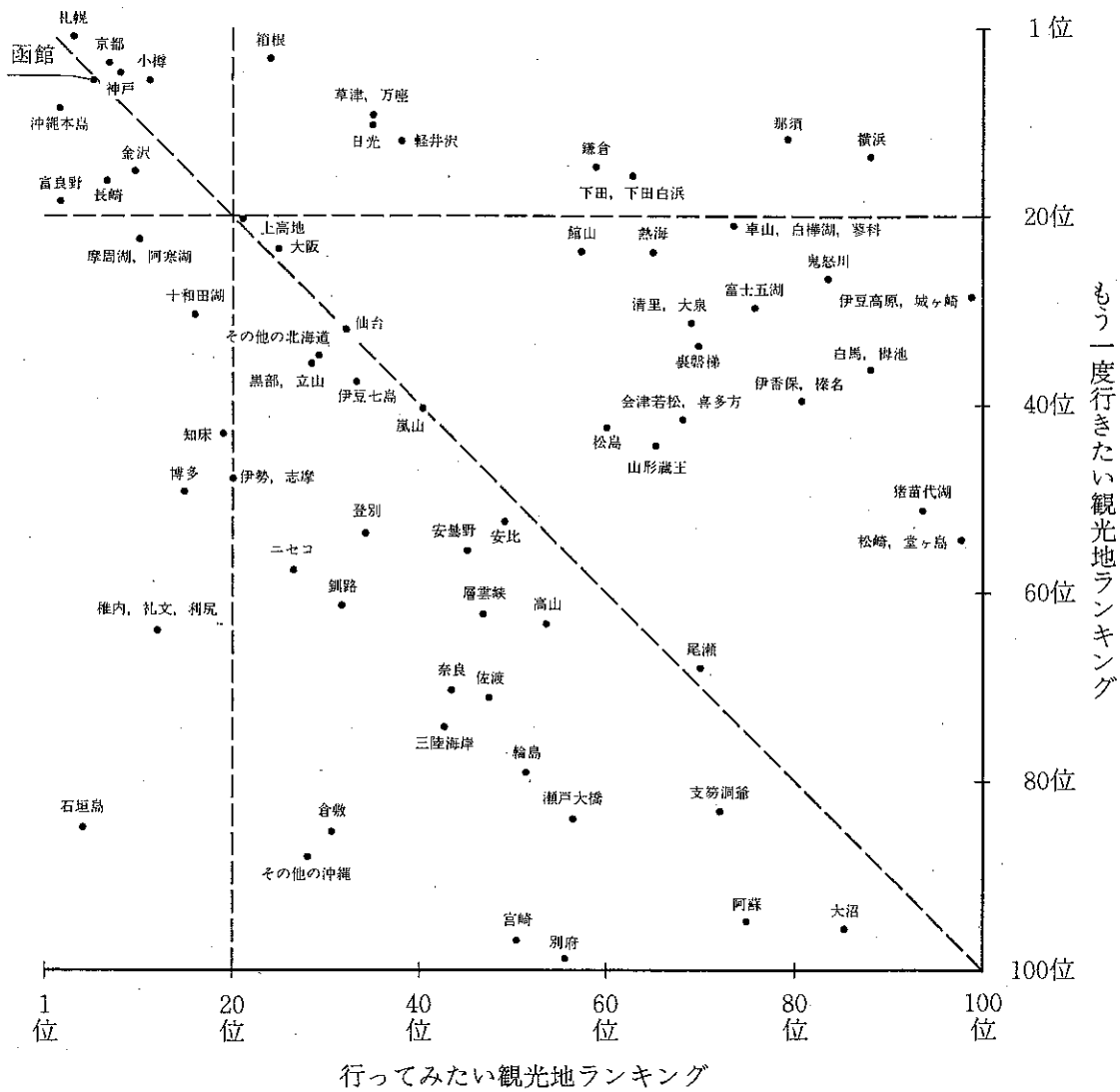
資料：日本消費経済研究所「地域・都道府県・観光地イメージ調査(1987年)」

図II-2-6 行ってみたい観光地、もう一度行きたい観光地ランキング

順位	行ってみたい観光地
1位	沖縄本島
2位	富良野
3位	札幌
4位	石垣島
5位	函館
6位	長崎
7位	京都
8位	神戸
9位	金沢
10位	摩周湖・阿寒湖

順位	もう一度行きたい観光地
1位	札幌
2位	浦安TDL
3位	箱根
4位	京都
5位	神戸
6位	函館
6位	小樽
8位	沖縄本島
9位	草津・万座
10位	日光

調査人数 10,000人  
調査対象 254観光地



出典：リクルート「人気観光地調査レポート（1993年）」

## II - 3 観光動向の分析

### 1 全国の観光動向

#### (1) 概 況

昭和50年代後半以降、我が国では、円高不況等による国内経済の低迷期があったものの、今日まで比較的安定した経済成長を続けてきた。

この間、国民所得の上昇や余暇時間の増大等がもたらされたことにより、国民の価値観の多様化が進み、国民の生活様式に余暇やレジャーは着実に組み込まれ、それとともに観光レジャー産業は順調な発展を遂げてきた。

このように、観光需要は比較的堅調に推移しているが、昨今の景気の変動等とともに観光形態にも変化の兆しがあらわれてきている。

観光を取り巻くこの10年間の特徴的な現象をあげると、

- 昭和58年にテーマパークの先駆けとなった東京ディズニーランドが開業するなど、観光機能にアミューズメント要素が加味されるようになった。
- また、昭和60年の筑波万博、平成2年の大阪花博に代表されるように全国的な博覧会ブームが訪れ、全国各地で周年イベント型観光が活発に展開された。
- 交通アクセスの面では、昭和57年以降、東北・上越新幹線の開業、中国自動車道・関越自動車道の全線開通や青函トンネル開通など、全国を結ぶ交通ネットワークの整備が進むとともに、各交通機関の大量輸送化、高速化、高級化が進展した。
- 昭和62年に始まった大型景気に続く円高傾向や労働時間の短縮等に牽引された海外旅行ブーム、リゾートブームが高まった。
- こうした背景によって、国民の観光に対する志向の水準も高まったが、同時に国内観光地における施設水準の向上が図られ、湾岸危機やバブル経済の崩壊を引き金に海外旅行が頭打ちをみせ、平成3年には、国内旅行ブームを惹起した。
- このような現象により、国民の宿泊観光に対する需要は順調な増加傾向を示している反面、滞在型の観光旅行に関しては、長期休暇がとれないことや金銭的負担が大きいなどの理由から、その実現への課題も多く抱えている。

また、観光需要の概況をみると

- 観光ニーズの個性化、多様化、高級化が進展している。



- 「みる」から「する（精神的豊かさを追及する，体験，交流）」型観光の需要が増大している。
- バブル経済崩壊後，堅実志向・目的志向型の旅行形態が，一層高まりつつある。
- 一方，観光客を受け入れる地域サイドからも，住民が楽しめることを正面に見据えながら，地域経済の発展と協調した地域一体型の観光振興が定着しつつある。

## (2) 観光需要の特性

地域別の観光需要をみると，大都市圏在住者ほど，宿泊・日帰り観光とも参加率・参加回数が高くなっている。

国内観光旅行における参加率・参加回数等からその主要な需要層を分析すると

- 宿泊旅行については，3大都市圏を中心とした

- ① 20～34歳男性・20～29歳女性
- ② 40～59歳男性
- ③ 35～39歳女性
- ④ 60～69歳男女

- 日帰り旅行については，3大都市圏および甲信越地方を中心とした

- ① 25～34歳男性
- ② 25～39歳女性

が主流を占めており，それぞれの需要層において大きな特徴がみられる。

(表Ⅱ-3-1)

海外観光旅行に関しては，男女ともに20代の参加率が高く，全般的には女性より男性の参加率が高いが，今後の参加意向としては，10代，20代女性の希望が高い。

また，観光行動については，国内・海外観光地を問わず，自然景観の探訪・鑑賞に対するニーズが高く，食事やショッピング，文化施設・史跡めぐりのニーズについては，むしろ海外観光地の方が高い。

次に，主要な観光目的としては，慰安旅行，自然・名所・スポーツなどの見物・行楽，スポーツ・レクリエーション，温泉にはいる・湯治の順となっているが，大都市圏在住者の場合，慰安旅行の比率は低く，スポーツ・レクリエーション，湯治の比率が高い傾向にある。

表Ⅱ-3-1 主要需要層別の特徴

需 要 層	志向が特に強いもの
20～34歳男性 20～29歳女性	<ul style="list-style-type: none"> <li>●スポーツ・レクリエーション</li> <li>●自然・名所・スポーツなどの見物・行楽</li> <li>●避寒・避暑以外の保養・休養</li> </ul>
40～59歳男性	<ul style="list-style-type: none"> <li>●慰安旅行</li> </ul>
35～39歳女性	<ul style="list-style-type: none"> <li>●スポーツ・レクリエーション</li> <li>●自然・名所・スポーツなどの見物・行楽</li> </ul>
60～69歳男女	<ul style="list-style-type: none"> <li>●神仏詣</li> <li>●湯治</li> <li>●避寒・避暑以外の保養・休養</li> <li>●旅先での出会い</li> </ul>

### (3) 利用交通機関および宿泊施設の特徴

交通機関としては自家用車の利用が最も多く、次いで鉄道の順となっている。

また、宿泊施設については、ホテル・旅館が約7割を占め、ホテル利用者は増加傾向にあるが、旅館・民宿利用者は漸減傾向にあり、その平均宿泊日数は、過去20年大きな変化はなく、2泊程度となっている。

### (4) 地域別観光流動の特徴

#### ① 国内宿泊観光

3大都市圏在住者の観光流動状況をみると、地方圏在住者に比較して、地域外への宿泊旅行比率が高い傾向にある。(図Ⅱ-3-1, 図Ⅱ-3-2)

#### ● 関東地域在住者

軽井沢、志賀、湯沢、富士五湖をはじめとする甲信越地域への流動が最も多く(21.8%)、次いで伊豆、箱根などの中部地域(18.7%)、仙台、十和田湖などの東北地域(9.8%)、京都、伊勢、志摩などの関西地域(7.7%)の順で、北海道地域(3.7%)は5番目となっている。

#### ● 中部地域在住者

甲信越地域(20.3%)と関西地域(20.3%)が並んで1位となっており、次いで日光、那須をはじめとする関東地域(9.9%)の順で、北海道地域(2.5%)は4番目となっている。

● 関西地域在住者

中部地域(14.2%)への流動が最も多く、次いで出雲をはじめとする中国地域(10.2%)や甲信越地域(9.7%), 関東地域(7.7%)の順で、北海道地域(2.5%)は7番目となっている。

② 国内日帰り観光

日帰り観光については、当然、地域内への流動が中心となっているが、地域外観光地まで足を伸ばしている層も存在する。

③ 海外旅行

大都市圏在住者を中心に海外旅行の観光流動状況を見ると、台湾、香港・マカオ、シンガポールなどの東南アジアへの流動が41.6%、ハワイ、グアム・サイパンなどの太平洋諸島への流動が27.3%、米国・カナダへの流動が18.2%、ヨーロッパへの流動が9.1%という順位になっている。

一方、平成2年度における海外旅行の希望地としては、1位がオーストラリア・ニュージーランド、2位ヨーロッパ、3位太平洋諸島の順となっている。

(5) 旅行費用

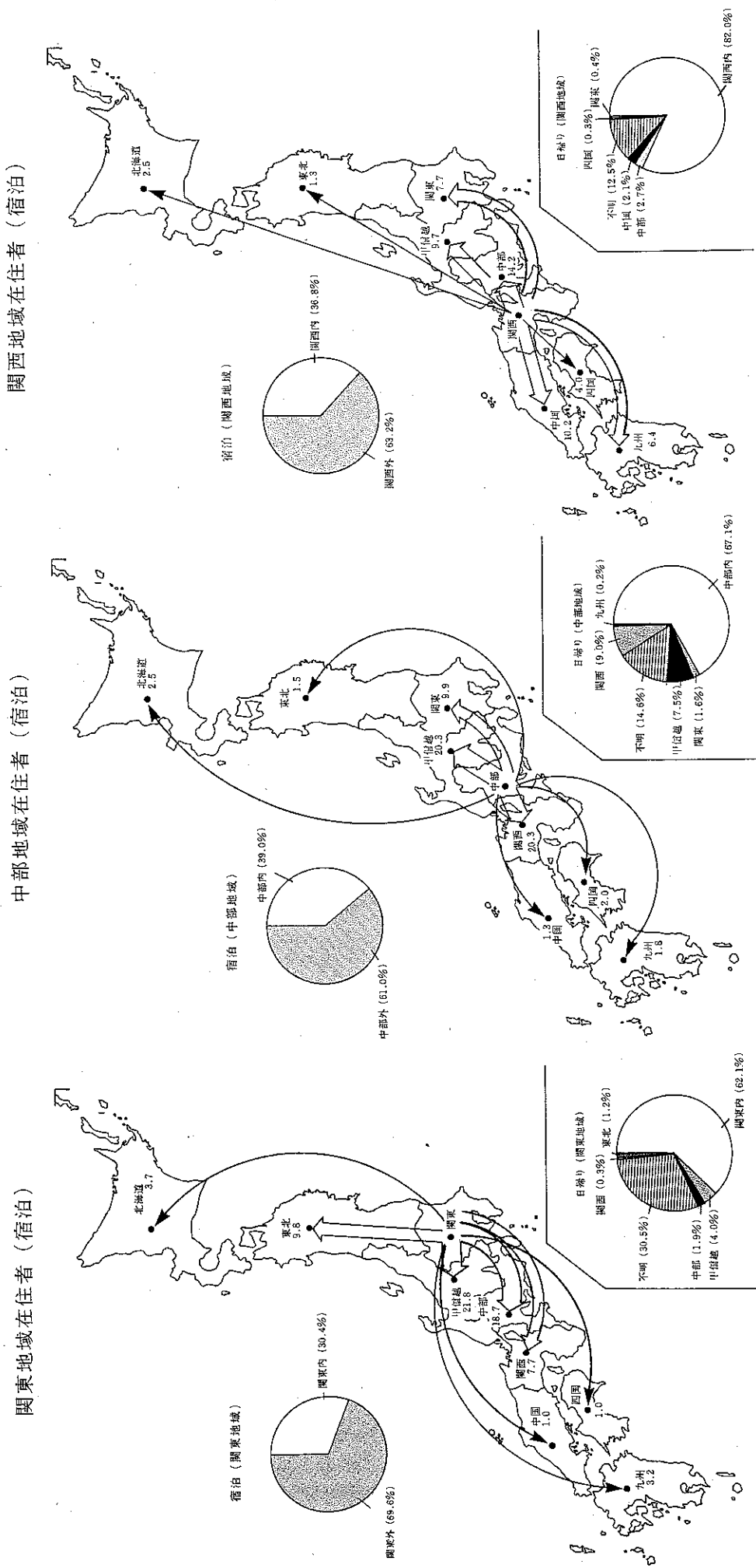
国内・海外旅行費用については、国内旅行は増加傾向となっているのに対し、海外旅行は減少傾向を示している。(表II-3-2)

表II-3-2 国内・海外観光旅行費用の推移

項 目		昭和61年	昭和63年	平成2年
国 内	平均宿泊数(泊)	1.72	1.78	1.77
	1回当り総費用(円)	40,200	41,000	48,100
	1泊当り総費用(円)	23,400	23,000	27,200
海 外	平均宿泊数(泊)	6.32	6.38	6.92
	1回当り総費用(円)	453,000	398,000	364,700
	1泊当り総費用(円)	71,677	62,382	52,702

出典：(社)日本観光協会「平成2年度観光の実態と志向」

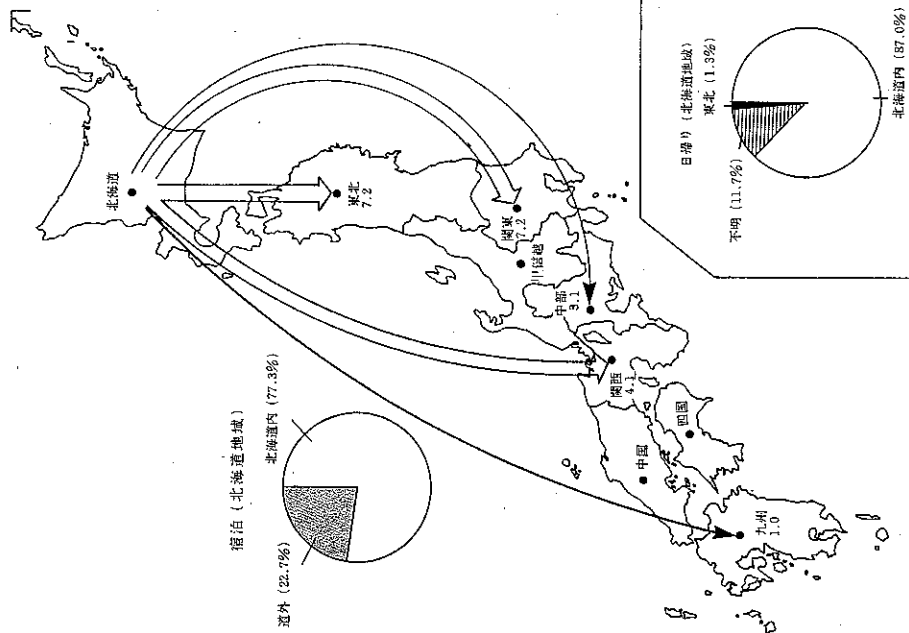
図II-3-1 地域別観光流動の状況 (その1)



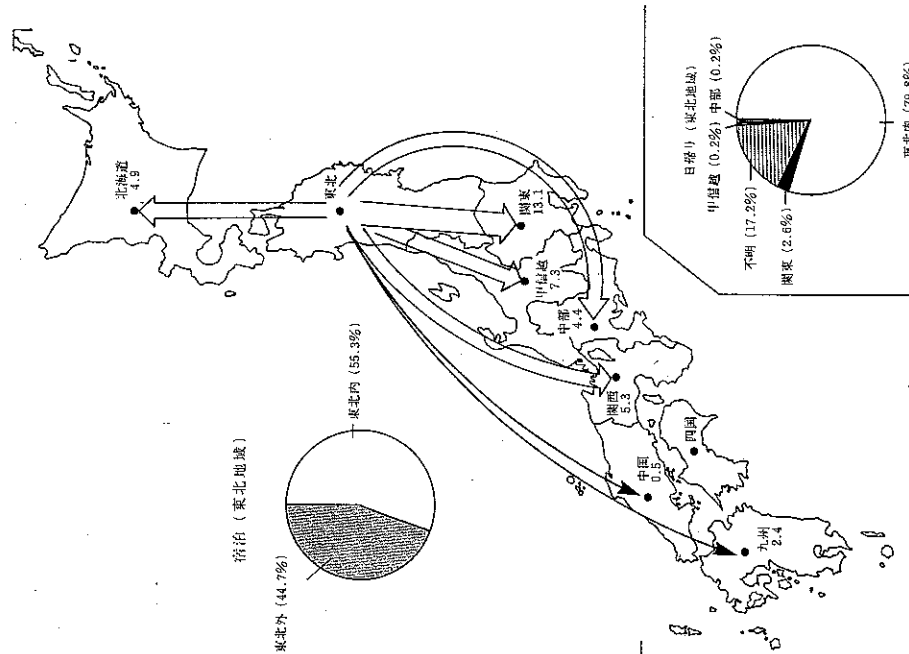
(社) 日本観光協会「平成2年度観光の実態と志向」よりMRI作成

図II-3-2 地域別観光流動の状況(その2)

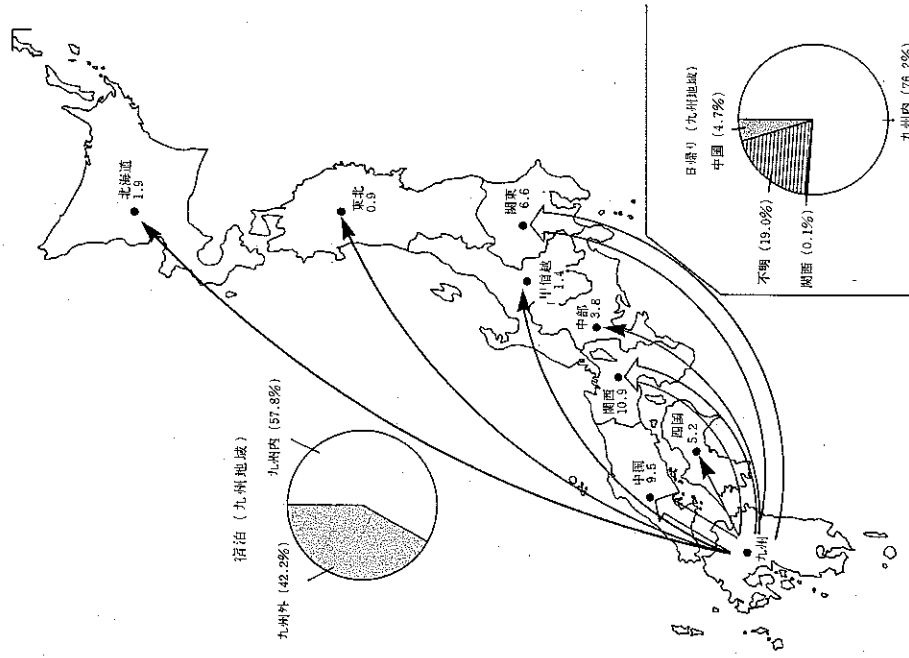
北海道地域在住者(宿泊)



東北地域在住者(宿泊)



九州地域在住者(宿泊)



(社)日本観光協会「平成2年度観光の実態と志向」よりMRI作成

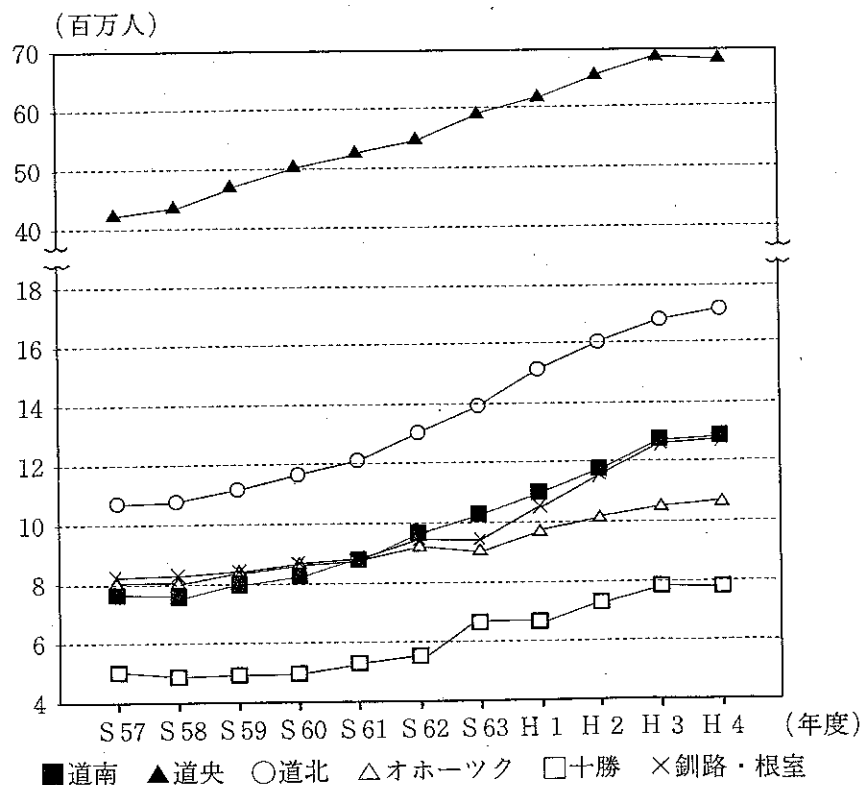
## 2 北海道および道南の観光動向

北海道の観光客入込み数の推移についてみると、昭和60年代初めは、円高効果による海外観光旅行ブームや道外での大型イベントの開催などにおされ、厳しい環境下にあったが、昭和62年からの国内の大型景気とリゾート法の制定、国民の余暇・レジャーに対する意識変化などの追い風を受け、さらには青函トンネルの開通、はまなす国体の開催、テーマパークの開設、航空網や高速道路網の整備拡充などにより、道内主要観光地の観光入込み数および来道観光客数は順調に増加傾向を示している。

このような状況の中で北海道の観光客は、平成4年度1億3000万人を超え、これを道内圏域別にみると、本市を含む道南圏の観光入込み数は、道央圏(6,811万人)、道北圏(1,768万人)に次ぐ、1,328万人となっている。(図Ⅱ-3-3)

道南圏の特徴としては、道内他圏域に比べ春季(4, 5月)の入込み比率が高く、冬季(12~3月)の入込み比率が低いことと、道外客比率、宿泊客比率の高いことがあげられる。(図Ⅱ-3-4)

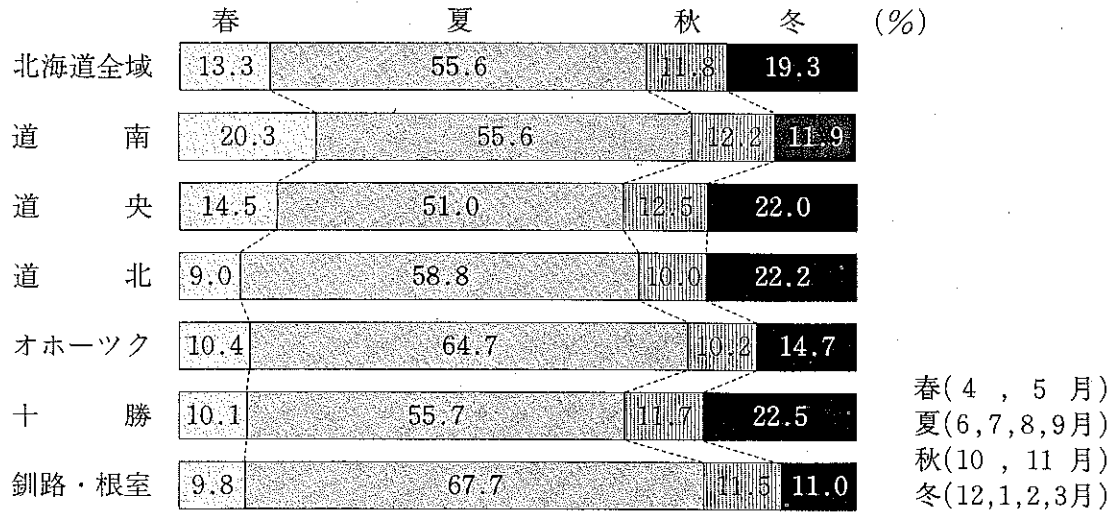
図Ⅱ-3-3 道内圏域別観光入込み数の推移



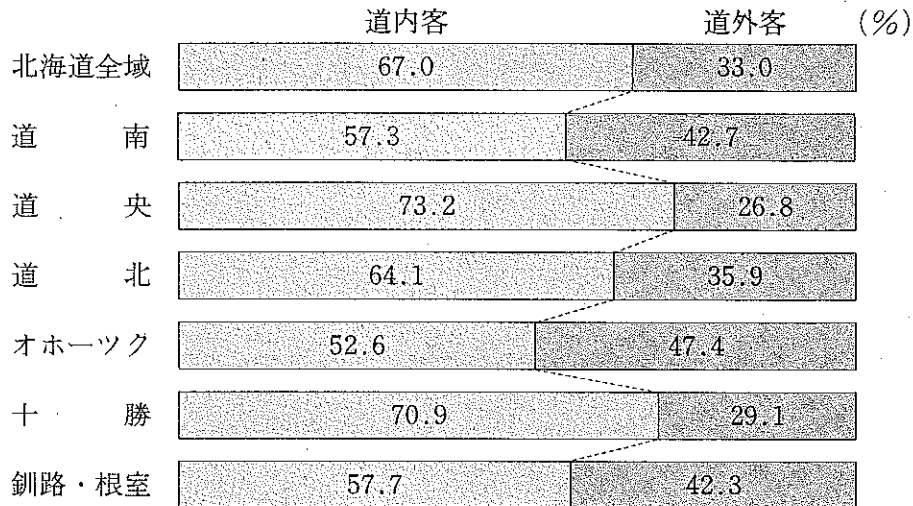
出典：北海道商工労働観光部「平成4年度観光客入込みに関する資料」

図II-3-4

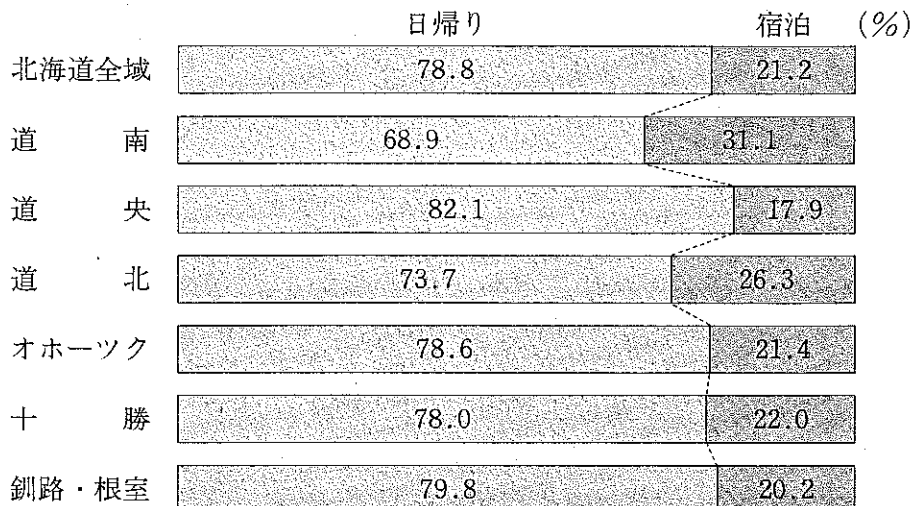
道内圏域別季節別の入込み比率



道内圏域別道外・道内客比率



道内圏域別宿泊・日帰り客比率



出典：北海道商工労働観光部「平成4年度観光客入込みに関する資料」

### 3 函館市の観光動向

#### (1) 概 況

本市は、全国的な観光ブーム、国民の生活様式の変化などに加え、昭和63年の青函トンネル開通と津軽海峡線開業、航空網の拡充等にもなう交通アクセスの改善、さらには青函博の開催や函館山ロープウェイの大型化と展望台の改築、ウォーターフロントの再開発、ファンタジー・フラッシュ・タウン計画による歴史的建造物のライトアップや街路灯整備など、観光施設・資源の充実等を大きなステップに、観光都市として著しい発展を遂げている。

また、平成元年には、世界からの観光客に対応しうる国際的な観光都市づくりを目指して国際観光都市を内外に宣言するとともに、青函圏の一体的な発展を目指し青森市とツインシティの提携を行っている。

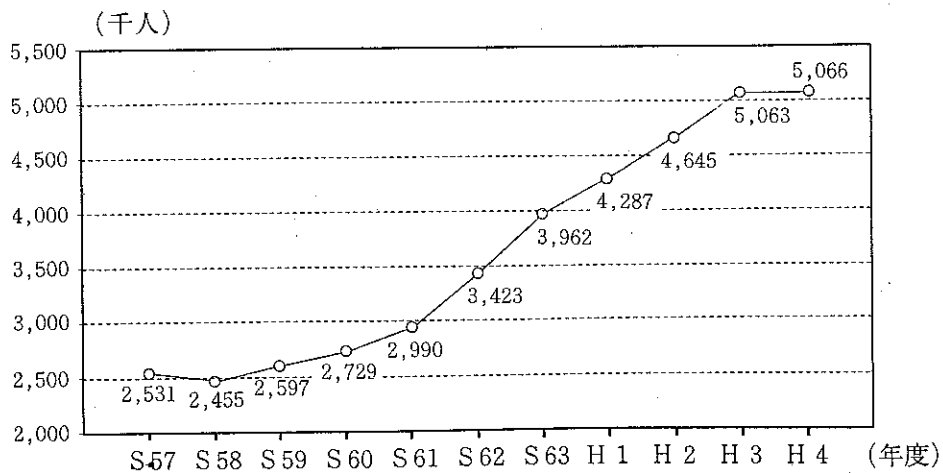
さらに、カナダ・ハリファックス市に続き平成4年には、ロシアのウラジオストク市、オーストラリアのレイク・マコーリー市との姉妹都市提携や、シンガポール政府観光局と社団法人函館観光協会との姉妹提携など国際的な交流の促進が図られている。

#### (2) 観光客の入込み状況

##### ① 来函観光客の推移

平成4年度の来函観光客数は、506.6万人であり、前年度の506.3万人と比べると微増であるが、これを「函館市観光基本計画」策定時の昭和57年度と比較すると、ほぼ倍増の入込みとなっている。その推移をみると、昭和57年から円高不況が始まる60年にかけての伸びは低調であったが、61年以降好調な推移に転じ、63年の青函トンネル開通と津軽海峡線開業や青函博の開催などによって、さらに大きな伸びを示し、その後も国内の大型景気の到来と全国的な観光ブームに乗って、極めて順調な増加傾向を示している。(図Ⅱ-3-5、図Ⅱ-3-6)

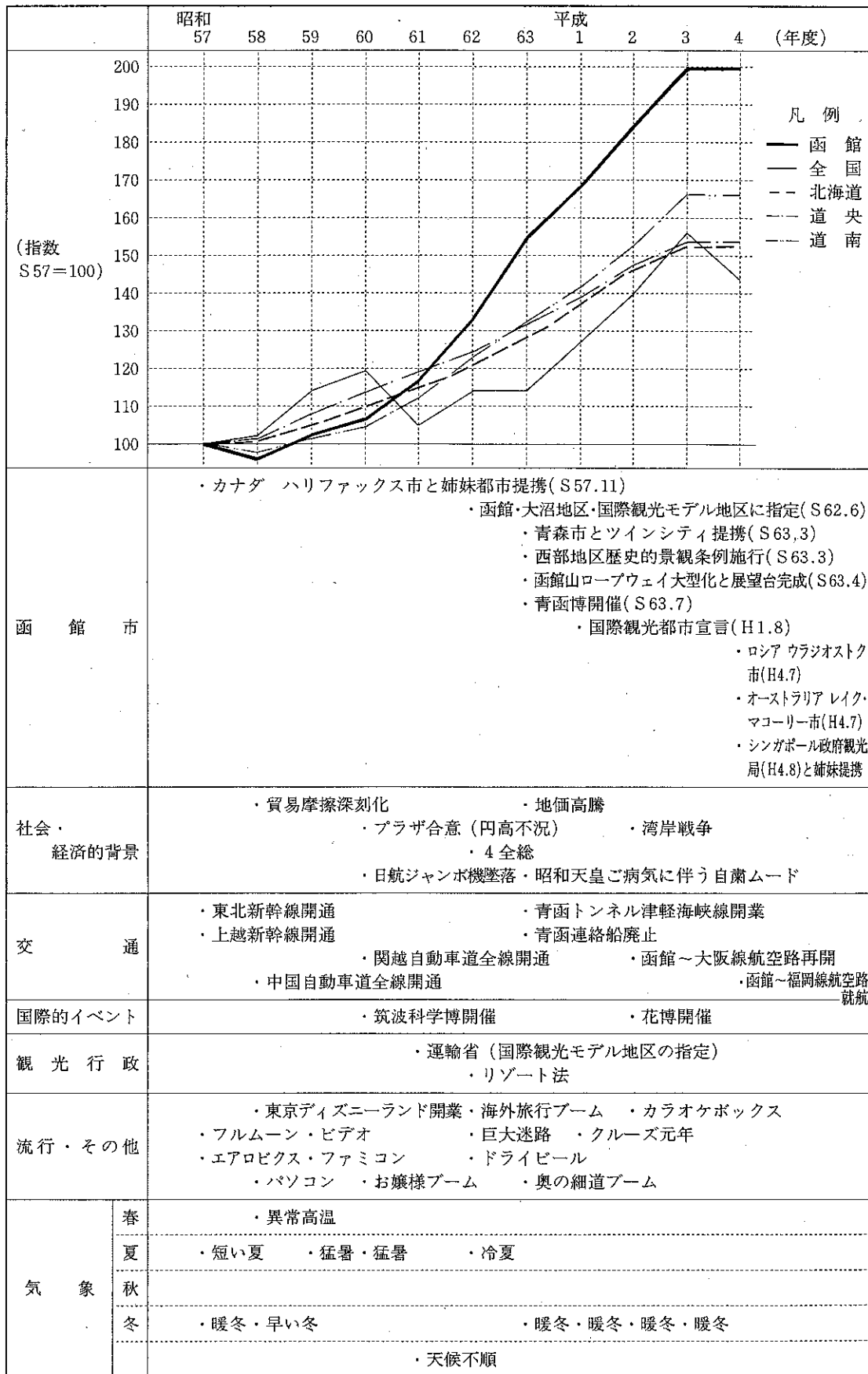
図Ⅱ-3-5 来函観光客の推移



出典：函館市商工観光部「来函観光客入込み数推計」



図II-3-6 入込み指数の推移



函館市	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カナダ ハリファックス市と姉妹都市提携(S57.11)</li> <li>・函館・大沼地区・国際観光モデル地区に指定(S62.6)</li> <li>・青森市とツインシティ提携(S63.3)</li> <li>・西部地区歴史的景観条例施行(S63.3)</li> <li>・函館山ロープウェイ大型化と展望台完成(S63.4)</li> <li>・青函博開催(S63.7)</li> <li>・国際観光都市宣言(H1.8)</li> <li>・ロシアウラジオストク市(H4.7)</li> <li>・オーストラリアレイクマコーリー市(H4.7)</li> <li>・シンガポール政府観光局(H4.8)と姉妹提携</li> </ul>			
社会・経済的背景	<ul style="list-style-type: none"> <li>・貿易摩擦深刻化</li> <li>・地価高騰</li> <li>・プラザ合意(円高不況)</li> <li>・湾岸戦争</li> <li>・4全総</li> <li>・日航ジャンボ機墜落・昭和天皇ご病気に伴う自粛ムード</li> </ul>			
交通	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東北新幹線開通</li> <li>・青函トンネル津軽海峡線開業</li> <li>・上越新幹線開通</li> <li>・青函連絡船廃止</li> <li>・関越自動車道全線開通</li> <li>・函館～大阪線航空路再開</li> <li>・中国自動車道全線開通</li> <li>・函館～福岡線航空路就航</li> </ul>			
国際的イベント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・筑波科学博開催</li> <li>・花博開催</li> </ul>			
観光行政	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運輸省(国際観光モデル地区の指定)</li> <li>・リゾート法</li> </ul>			
流行・その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京ディズニーランド開業</li> <li>・海外旅行ブーム</li> <li>・カラオケボックス</li> <li>・フルムーン・ビデオ</li> <li>・巨大迷路</li> <li>・クルーズ元年</li> <li>・エアロビクス・ファミコン</li> <li>・ドライビール</li> <li>・パソコン</li> <li>・お嬢様ブーム</li> <li>・奥の細道ブーム</li> </ul>			
気象	春	・異常高温		
	夏	・短い夏	・猛暑・猛暑	・冷夏
	秋			
	冬	・暖冬・早い冬	・暖冬・暖冬・暖冬・暖冬	
		・天候不順		

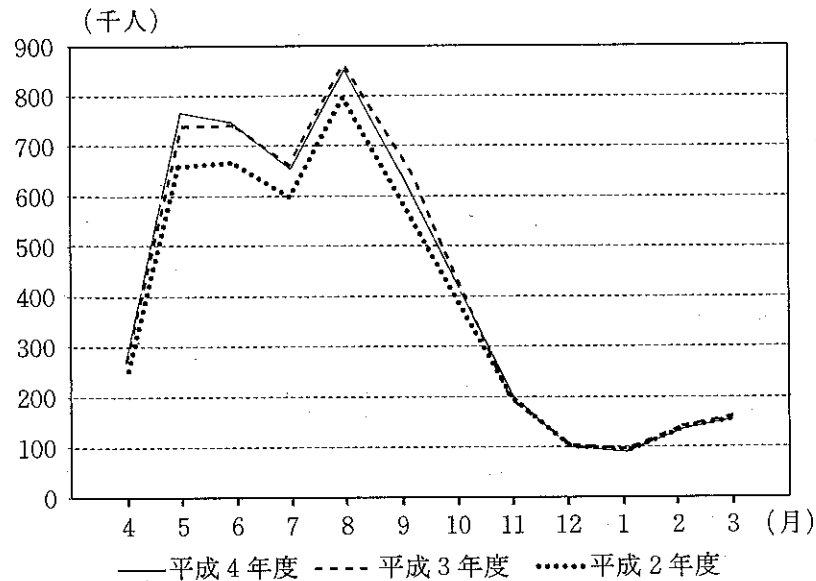
出典：函館市商工観光部「来函観光客入込み数推計」  
総理府「平成5年版観光白書」

② 月別入込み数

過去3か年の来函観光客の月別入込み数をみると、5月～10月の入込み比率が高い一方、12～3月（冬季）の入込み比率が低い。（図Ⅱ-3-7）

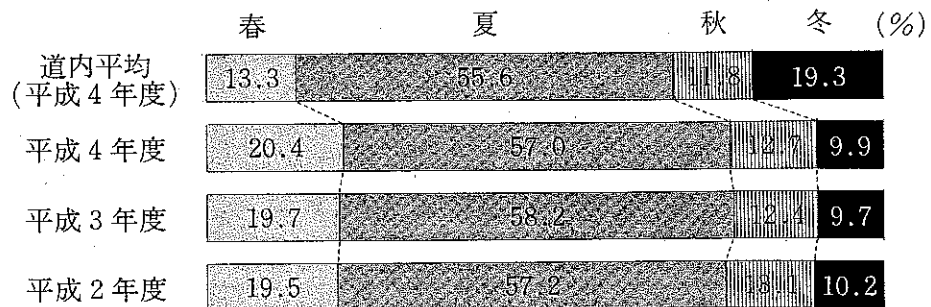
また、季節別入込みを全道と比較すると、本市は、春季（4、5月）の比率は高いが、冬季（12～3月）の比率は極めて低く、春夏偏重型の観光入込み傾向を示している。（図Ⅱ-3-8）

図Ⅱ-3-7 来函観光客の月別入込み数の推移



出典：函館市商工観光部「来函観光客入込み数推計」

図Ⅱ-3-8 来函観光客の季節別入込み比率の推移



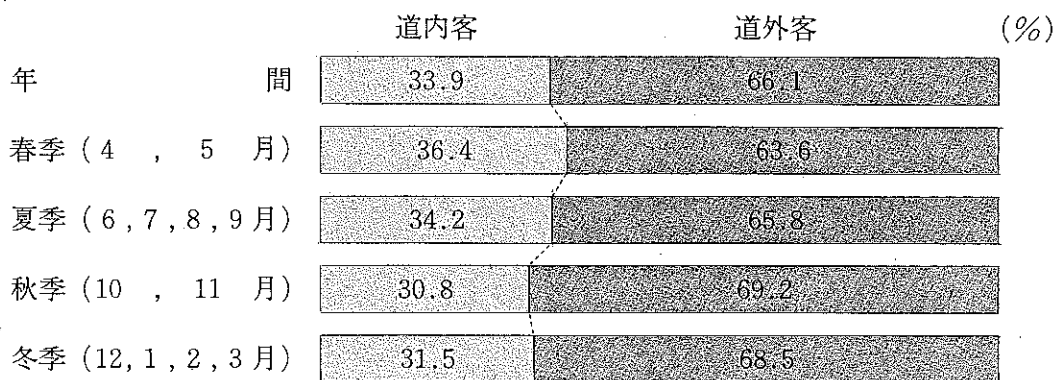
出典：函館市商工観光部「来函観光客入込み数推計」

③ 観光客層

来函観光客の道外、道内客比率を全道比率と比較すると、全道では道外客が33.0%であるのに対し、本市では66.1%と道外客比率が高いことが特徴であり、その季節動向をみると、春季の比率が最も低く63.6%、秋季の比率が最も高く69.2%となっている。(図Ⅱ-3-9)

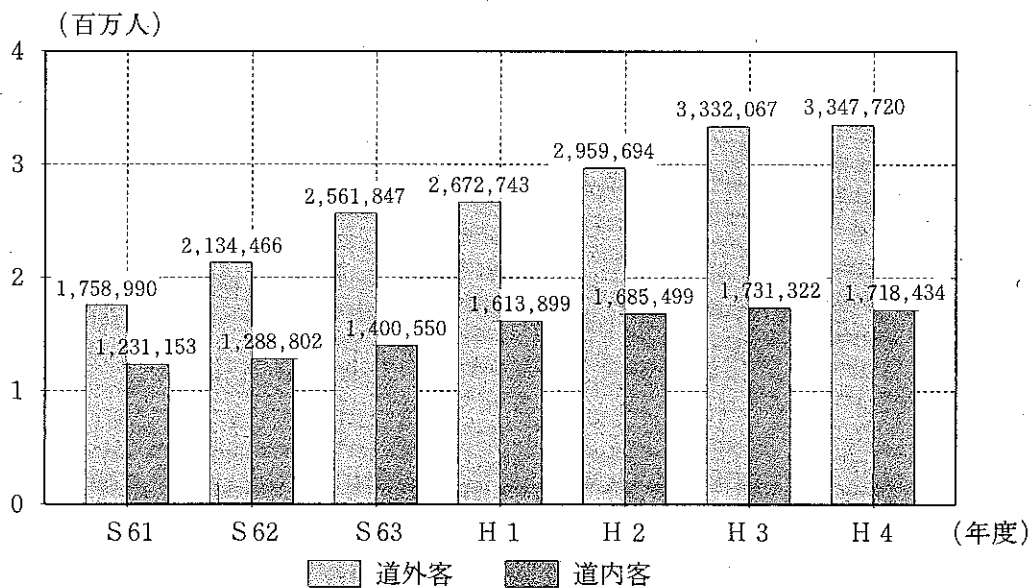
また、時系列による道外・道内客の入込み趨勢をみると、近年の観光入込みの伸びは、道外客が支えていることがわかる。(図Ⅱ-3-10)

図Ⅱ-3-9 来函観光客の季節別道外・道内客比率



出典：函館市商工観光部「平成4年度来函観光客入込み数推計」

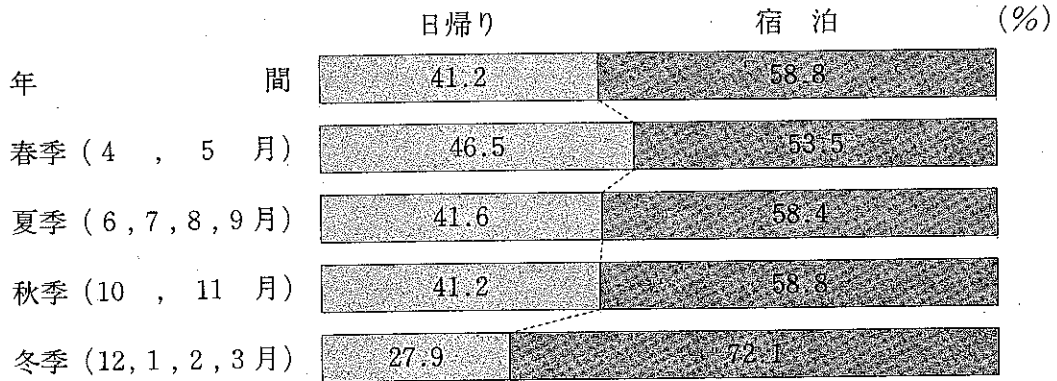
図Ⅱ-3-10 来函観光客の道外・道内客比率の推移



出典：函館市商工観光部「来函観光客入込み数推計」

一方、その宿泊、日帰り比率においても、全道の比率が宿泊21.2%、日帰り78.8%となっているのに対し、本市は、宿泊が58.8%、日帰りが41.2%となっており、宿泊率が極めて高いことが大きな特徴である。(図II-3-11)

図II-3-11 来函観光客の季節別日帰り・宿泊客比率

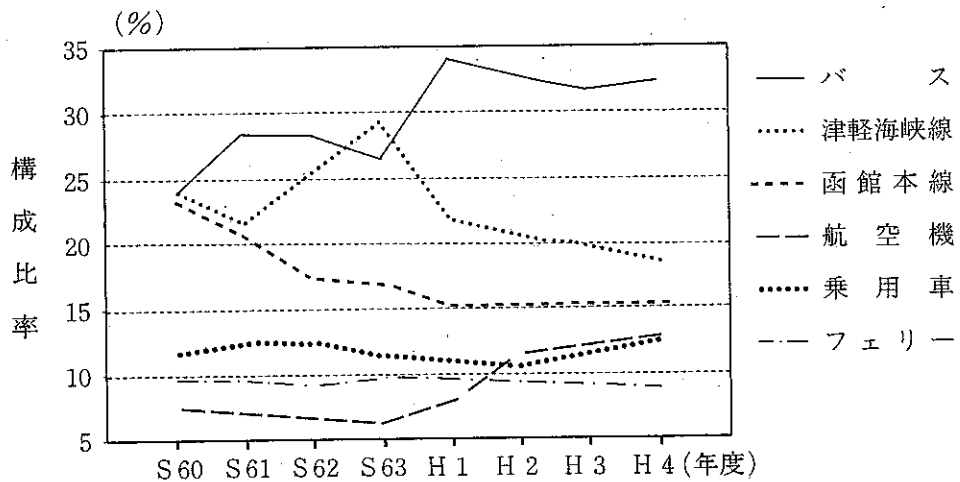


出典：函館市商工観光部「平成4年度来函観光客入込み数推計」

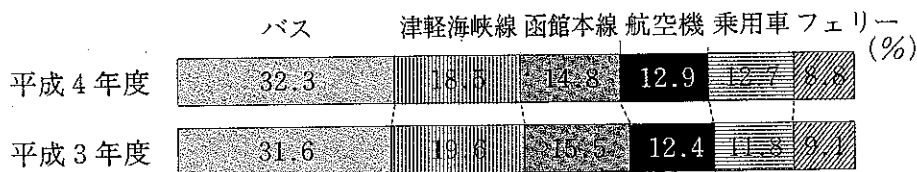
④ 利用交通機関

平成4年度の来函観光客利用交通機関をみると、JRおよびバス利用が最も多く、次いで、航空機、乗用車、フェリーの順となっており、これを前年度と比較すると、乗用車、バス、航空機の伸びが大きい。(図II-3-12)

図II-3-12 来函観光客の利用交通機関別の推移



交通機関別観光客数



出典：函館市商工観光部「来函観光客入込み数推計」

#### ⑤ 来函観光客の特性

本市が実施している「観光客アンケート調査」を基に、来函観光客の特性を分析すると、そのイメージは概ね次のように集約され、首都圏の旅行代理店に対する聞き取り調査においても同様のことが指摘されている。

##### ○若年層が主体である。

来函観光客を性別・年齢別に分析すると、中心層は男女ともに20代であり、19歳以下の年齢も含めると観光客層の過半がここに集中している。これは国内旅行の全国平均からみても、特異な観光客層となっている。

これを時系列の趨勢で見ると、わずかずつではあるが、若年層の比率が低下傾向にある反面、30代以上の層が増加傾向にあり、サービス面をはじめとしてこうした世代への対応を考慮していくことが必要になるとと思われる。

##### ○関東・道内・東北からの入込みが多く、関東・関西からの伸びが堅調である。

発地別の来函観光客をみると、関東が最も多く、次いで道内、東北、関西、中部、その他の順となっている。このうち道内客では、道央がトップで、次に道南、道東、道北と続いている。

また、時系列の趨勢により地域別の傾向をみると、関東地方からの来函観光客は昭和59年度でいったん低下するが、それ以降は堅調な伸びを示している。

一方、青函トンネルの開通によって期待された東北地方からの観光客は、昭和61年度でいったん伸びを示したものの、現在は59年度以前と同じ水準となっており、期待されたほど伸びていない。

関西地方からの来函観光客は、漸減傾向にあったが、平成2年の函館－大阪便航空路の再開などによって、再び増加傾向を示している。

また、道内客は、青函博および津軽海峡線の開通により、いったん大きな伸びを示したが、その後は落ち着きをみせている。

##### ○道央との周遊観光が主流である。

来函ルートとしては、道内客の半数が「函館だけの観光」であるのに対し、道外客は「観光の途中」とするものが圧倒的に多く、周遊観光ルートの主流は、道央を経由するルートであることを示している。

○来函目的の中心は、函館山からの景観、グルメ、歴史である。

来函目的としては、「函館山からの景観」が最も多く、次いで「食べもの」「幕末の歴史」と続いている。

また、主な訪問観光地としては、「函館山」「五稜郭」「元町周辺」「トラピスチヌ修道院」「朝市」「立待岬」「金森倉庫周辺」があげられ、本市周辺では「大沼」を訪れる傾向が最も高い。

○道内客のリピート（再度の来訪）傾向が高い。

来函回数についてみると、「初めて」の人がほぼ半数を占めており、その特徴として道外客で「初めて」の人が大半であるのに対し、道内客では「初めて」「2回目」「3回目」と来函回数が平均的に分散しており、リピート傾向が高い。

## 第Ⅲ章

### 函館観光の課題と将来方向

## III - 1 全国的な観光の将来展望

### 1 今後の観光動向

今後の観光需要については、バブル経済時に見られたように、急勾配で上昇しつづけるとは思われず、伸び率の低下や一時的な減少といった波形模様を描きながらも、長期的な視点では週休2日制の拡大などによる本格的な労働時間の短縮等ともあいまって、小さな波はあるものの基本的に伸長していくものと思われる。

このような状況の中で、今後の観光動向については、次のような特徴を示しながら推移すると思われる。

#### (1) 半観半リゾート型、中期・四季分散型観光需要の進展

今後の観光需要については、旅行形態の多様化が進むとともに、旅行目的も「みる」と「する」が共存する、「半観半リゾート」といった形態が顕著になっていくものと思われる。

また、旅行期間も欧米型のような一季集中・長期リゾート型に移行するという見方より、むしろ我が国の場合には、それぞれに美しい四季の変化と魅力があり、年末年始、ゴールデンウィークおよび夏期休暇の一週間といった四季分散型の余暇形態が定着しつつある現状からしても、年休等を利用した秋季休暇を加えた「中期・四季分散型」の余暇活動が進展していくものと思われる。

なお、この場合の「中期」については、現時点での旅行1回当たりの宿泊日数が平均で約2泊であり、今後は3、4泊といった形で徐々に伸長していくものと思われる。

#### (2) 多様なニーズを充足しうる観光需要の増大

国内外を問わず観光地に対する観光客のニーズは、自然をはじめ、その地域がもつ資源や風土との触れ合い、地域の人々との交わり（地域のにぎわい・雑踏感・ふるさとのような親しみなど）を重視しながら、スポーツやレジャー、グルメにショッピング、陶芸や絵画などの文化活動を行い、合間には史跡・名所めぐりをするといったように旅行形態の多様化が進展している。

こうした観光客それぞれが持つ好みや年齢等に応じて旅行費用の設定や、旅行形態を選択するといった幅広く多様な観光需要が、今後ますます増大していくものと思われる。



### (3) 大都市圏居住者を中心とした需要増加傾向の持続

我が国の宿泊旅行の参加率は、欧米諸国との旅行形態と比較しても、既に世界的な水準に達してきている。

参加率自体は、人間の価値観の多様性からみて大きく伸びることはないと思われるが、例えばフランスでは、農村の参加率が40%程度であるのに対し、パリ市民の参加率は80%を超えており、我が国においても引き続き都市人口の増加が予想されることなどから、大都市圏居住者の需要増加傾向が続くものと思われる。

### (4) 日帰り型と宿泊滞在型の使い分け需要の増大

近年、交通体系の高速化や利便性の進展により、特に大都市圏から時間距離2時間圏内のスポーツ型観光地においては、週末利用のリピート型日帰り観光が増加する傾向があらわれている。

このような傾向は、今後さらに伸長していくものと考えられ、旅行目的等に応じて日帰り型と宿泊滞在型を使い分ける需要が増大していくものと思われる。

### (5) 国内外における競合化の進行

観光行動の広域化は、ボーダーレス化（国境消失化）の一層の進行を促し、国内の観光地においては、必然的に国際間の競合の中に組み込まれることとなり、地域の資質や特性に応じた個性的で競争力のある観光地づくりが必要となる。

また、一般的に海外旅行は、国内旅行に比べ旅行形態や予算の選択の幅が大きく、特にグアム、サイパンなどの太平洋諸島地域、香港、台湾、韓国などの東南アジア地域や、ロシア極東地域などは国内旅行よりも比較的安価な旅行設定が可能であることから、国内観光地においては、これら国外地域との競合を前提に、コスト面も考慮に入れた魅力づくりが重要となる。

## 2 観光地の将来展望

今後の観光動向を考えると、観光地の将来展望においては、次の観点からの対策が重要となる。

### (1) 自己実現の場としての観光地

21世紀には、国際的にも「心の豊かさ」「自然との触れ合い」「ヒューマンタッチ（人間的な交わり）の創造」といった“ゆとり”と“交流”が観光地の中に求められる。

観光地における余暇活動には、自然への回帰、様々なストレスの解消、高齢化社会に対応した健康や生きがいを目的とするスポーツ・趣味、各種レジャー活動、知的生産など、各世代にわたる生涯学習の視点も含め、多彩な自己実現の充足といったものが求められる。

### (2) 観光振興と地域づくりとの一体性

観光分野においては、従来の観光対象を“みる”だけでなくその基盤である地域社会との触れ合いを含めた、学習や参加・体験を深めるためのニーズが高まってくる。

一方、リゾート分野においては、環境アメニティ（環境の快適性）の向上を前提としながら、週休リピート型リゾートに加え、21世紀には、一週間程度の滞在に対応するバカンス型リゾートが台頭してくるものとみられ、そこでは、市民生活と調和した多彩な生活機能の集積とリゾート社会の形成を目指した市民と観光客・リゾート客との混住の仕組みづくりも課題になってくる。

### (3) 地域における観光とリゾートの相互連携の必要性

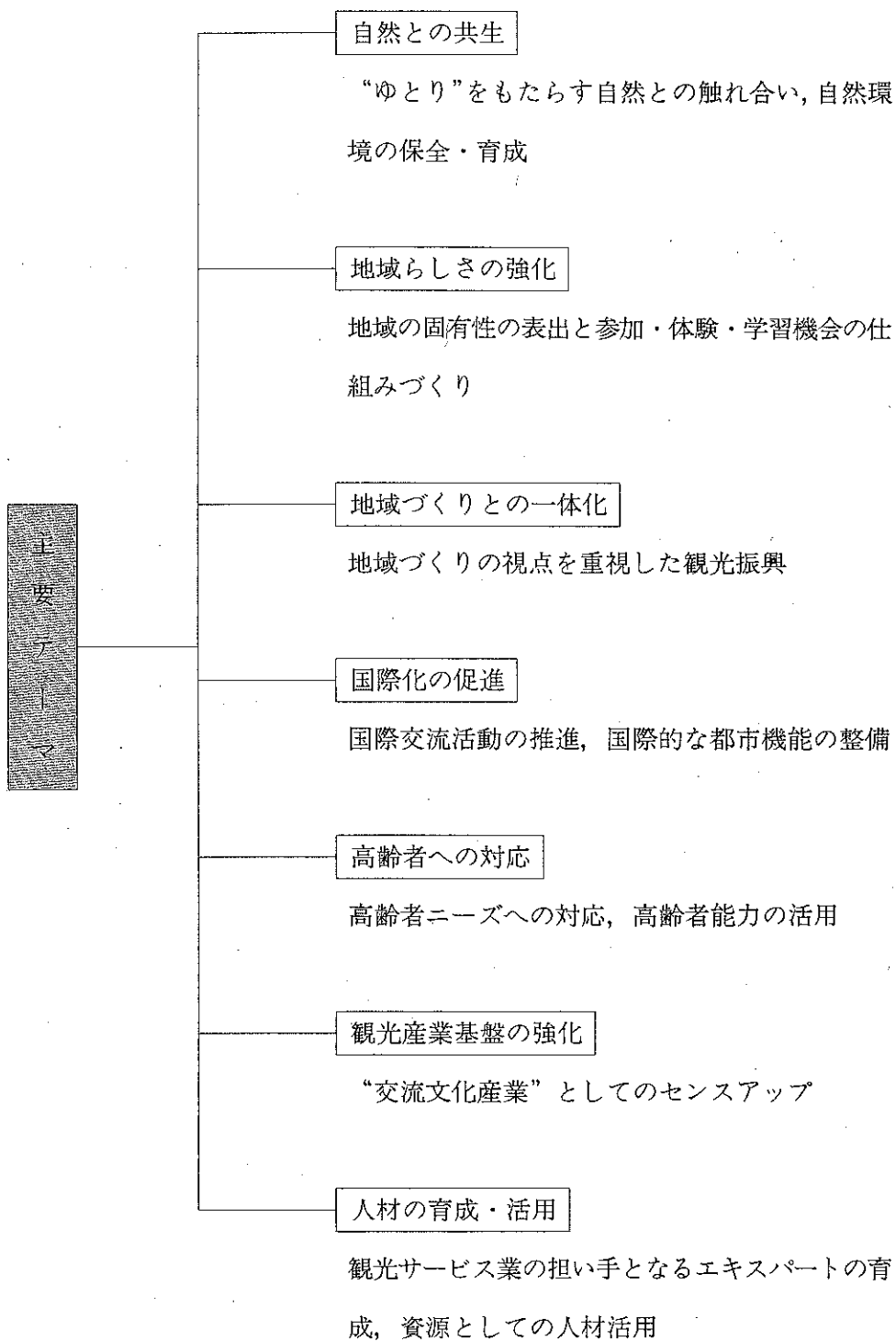
観光、リゾートそれぞれに対するニーズの増大は、地域においても観光、リゾートの垣根を取り除き、両分野の相互連携を求めてくるものとみられ、例えばリゾート生活圏に観光地を組み入れるような対応策も必要とされるようになる。

### (4) 観光ニュービジネスの育成

観光、リゾートニーズの増大は、宿泊・飲食・土産品・観光施設といった従来型観光産業のほか、コンベンション（大規模な会議、集会）、人材育成、情報サービス等、新しいビジネスチャンスを生み出す要因ともなり、その育成が重要となる。

特に観光、リゾートサービスのエキスパート（専門家）など人材の育成は、地域にとって中長期にわたる重要な課題のひとつとなる。

## 観光地の将来展望における主要テーマ



## III - 2 函館観光の課題

本市観光の現況と全国的な観光の将来展望を踏まえ、その課題を整理すると次の事項があげられる。

### (1) 幅広い世代の需要開拓と高齢化社会への対応

北海道観光の中にあつて本市観光は、全国の主要需要層のひとつである20～34歳男性や20～29歳女性が比較的高い入込み比率を示している反面、40～59歳男性、35～39歳女性、また60～69歳男女といった層の入込み比率が低く、高齢化社会、高級化志向等の高まる時代を迎え、今後はこうした客層に対する需要拡大や、サービス面の充実等の対応策が重要である。

### (2) 全国的な観光客誘致の展開

本市を訪れる観光客は、道外客の比率が高く、中でも関東地域からの来訪者が過半数を越えている。今後は、航空路線の拡充の進んだ大阪、名古屋、福岡等の大都市圏域や津軽海峡線の開通により時間距離の短縮された東北地域に対する需要の開拓、誘致戦略の強化が重要となる。

### (3) 道央地区との連携強化

道外観光客が北海道を訪れる主要な利用交通機関は航空路であり、特に発着便数の多い新千歳空港が中心となっている。

本市を訪れる道外客については、こうしたルートに乗って周遊観光地のひとつとして来函する比率が高く、今後一層道央地区との連携強化を図ることが、集客施策上からも重要である。

### (4) 通年観光地の形成と冬季振興

本市の観光シーズンは、近年拡大傾向にあるが、12～3月の冬季の入込み比率は全道平均を下回り、夏季との入込み格差が大きい。

このため、民間事業者の積極的な投資やサービス面の拡充等を促進するうえからも、通年化対策が強く望まれている。

全国的な傾向として、冬季観光需要の主流はスポーツ・レクリエーションであり、そのニーズは年々増大傾向にある。一方、本市観光客の主流である関東地域についてみれば、その冬季需要は非常に高い。

しかし、その流動先の大半は甲信越地方となっており、こうした現状を踏まえこれ

らの競合地域を念頭に置いた観光振興を図ることが重要である。

また、季節対応を考えるうえで施設自体は動かせないが、従業員は動かすことができるといった経営面での発想転換や工夫なども必要である。

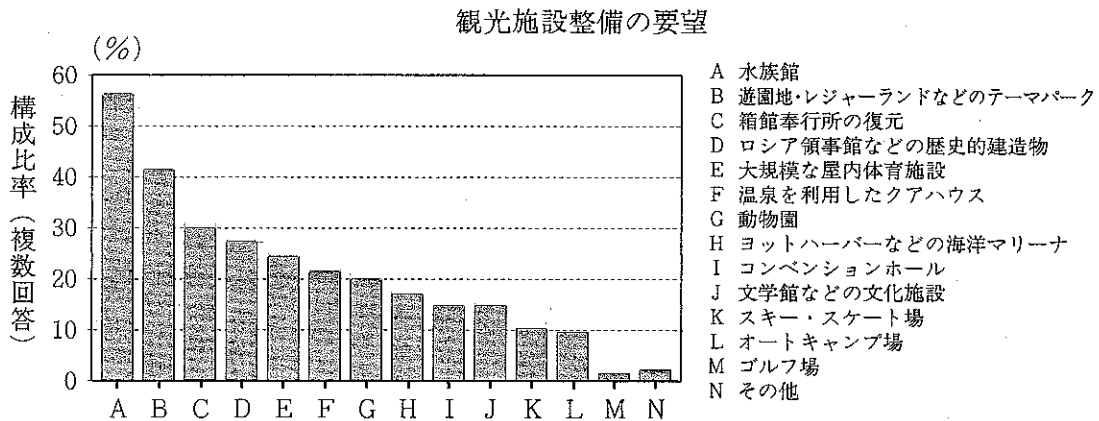
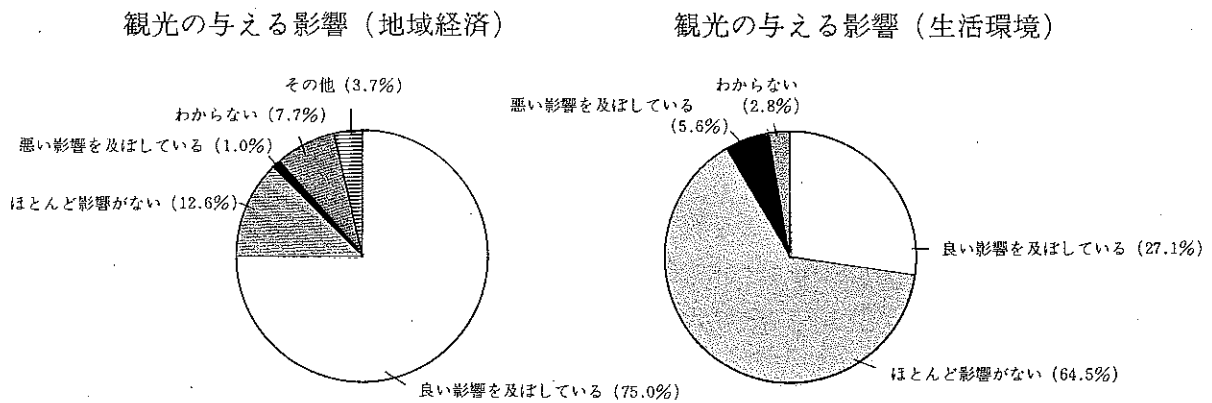
#### (5) 地域づくりと一体となった観光施設整備

市民アンケートによると、観光が地域経済に好影響をもたらしていると答えた市民は75%であるのに対し、生活環境に好影響をもたらしていると思っている市民は30%弱となっている。

また観光施設整備の要望についても、水族館やテーマパークといった市民利用の高いレジャー・レクリエーション施設の整備が強く求められている。(図Ⅲ-1-1)

今後、こうした市民要望に配慮し、地域づくりと一体となった観光施設整備を進めていくことが重要である。

図Ⅲ-1-1



資料：函館市商工観光部「平成3年度市民アンケート調査」

## (6) 国際化を踏まえた広域圏の形成

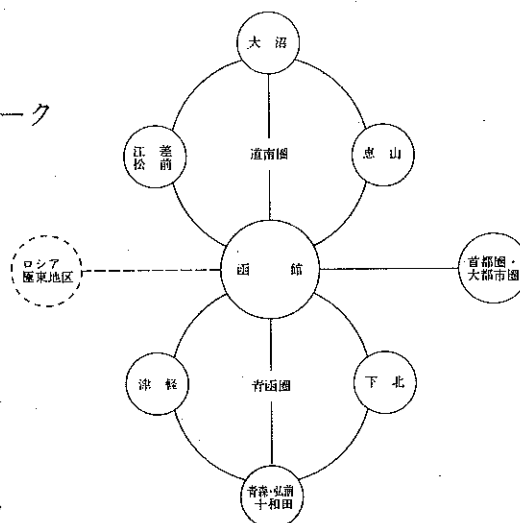
現在、本市から1～2時間圏には、6か所のそれぞれに異なる特色を持つ主要観光地があり、今後、高速道路網や高速鉄道網の整備が進むことにより、これら観光地は、本市を基点として1時間圏内に配置されることになる。さらに、国際定期航空路の整備が進みロシア極東地域が加わると7地区の構成が考えられる。

また、東京、大阪をはじめ、首都圏や大都市圏からは、本市を經由して3時間以内でこれら観光地が結ばれることとなり、本市は、広域拠点としてますます重要な位置付けとなる。

21世紀に対応した観光振興を図っていくうえでは、国際観光都市の形成、複合型観光地への進展、および道南圏・青函圏におけるハブ都市機能の創出などが重要であり、これらの問題点に対しては、広域的な視点での検討が必要となる。

※ハブ都市機能：一般的には“ハブ”とは、中核、中枢、中心を意味するが、ここでは「周辺観光地の観光資源を有機的に結び相乗効果を発揮する機能」として用いる。

### ■函館をハブとする広域観光圏のネットワーク



## (7) 輸送力の拡大と道路交通ネットワークの拡充

鉄道、航空路および海上交通機能については、それぞれ順調な拡充・進展をみているが、道路交通網については、高速性・利便性の面から大きな進展がみられない。

今後、本市観光の幅と奥行きを深め、観光ルートの活性化を図るうえからも、北海道新幹線等高速大量輸送体制の確立や道南地域の交通ネットワークの整備拡充が重要である。

## (8) ソフト面の充実

既存の観光資源・施設の多機能化やネットワーク形成等による資質の向上を図るとともに、イベントやコンベンションビューロー（コンベンションの誘致、支援組織）、ホスピタリティ、サービス等ソフト面の充実なども重要な課題である。

### III-3 函館観光の将来方向

本市は、近年来、都市型観光地として着実な発展を遂げているが、これは歴史文化資源の掘り起こしやウォーターフロントの再開発、航空路線網の拡充により北海道観光の周遊拠点としての整備が一層進展したこと等が大きな要因である。

しかし、観光を取り巻く環境は、観光のリゾート化への移行や経済成長の鈍化、高齢化社会の進展等により大きく変化しつつある。

一方、観光地を商品として捉えた場合、その商品価値は3A（アトラクション、アメニティ、アクセスの3要素）によって決定されるともいわれており、全国的な観光の将来展望を踏まえ、本市観光の将来方向を考察すると、次の基本認識にたった観光地づくりが重要である。

#### 1 将来方向

##### (1) 道南圏・青函圏ハブ都市機能の形成

自然との触れ合い、自然との共生の意義が一層重視される中で、道南圏との連携強化の推進はもとより、青函圏の自然資源を有効活用しながら、これら圏域のハブ都市として主導的な立場で、例えばPR活動や情報提供活動、宿泊・サービス面の充実などでの機能強化を図る。

また、観光対象を“みる”だけではなく、その基盤である地域社会との触れ合いを含めた学習や参加・体験機会を深めるなど、多様な観光客ニーズに対応した魅力的な観光対象づくりや運営体制の改善に努める。

##### (2) 観光振興と地域づくりとの一体的推進

個性的で快適な定住環境は、魅力的な観光対象ともなり得るという視点から、従来の観光領域にとらわれることなく、市民生活の向上や地場産業の育成という視点をも取り込んだ観光振興と地域づくりとの一体的推進を図る。

##### (3) 世界に比肩する観光地の形成

観光行動の広域化は、ボーダーレス化を一層進行させ、本市も国際間の競合の中に編入されることとなることから、地域の資質に応じた個性的で競争力のある国際観光都市の実現を図る。

一方、訪日外国人数は、平成3年に353万人を数え、さらに在日外国人数も増加して

いるなど、潜在的な外国人観光客はかなりの数にのぼるものと推察されており、これら外国人に対する観光誘致を図るため、言語や慣習等を踏まえたきめの細かい対応と的確な情報提供やPR活動等の充実に努める。

#### (4) ホスピタリティあふれる観光地イメージの醸成

「心の豊かさ」が今後ますます重視され、観光地に対し「心あたたまる人間的な交流」への期待と意義が高まることから、その交流の仕組みづくりやホスピタリティの向上などソフト面での一層の充実に努める。

また、観光ニュービジネスの台頭にともない、観光産業のセンスアップとサービス機能の充実や、エキスパート養成のための支援体制づくりに努める。

## 2 展開のポイント

### (1) 21世紀をマーケットに据えたアイデンティティ（主体性）の創出

#### ① 新しい広域観光圏の形成（資源ネットワーク型観光圏の実現）

これからの観光は、「みる（探訪・鑑賞）」と「する（体験）」が並存する観光需要に対応していくことが重要である。

本市の観光資源は、都市機能等とのかかわりが深く、観光イメージも都市的イメージ、「みる観光」のイメージが高い。

一方、「する観光」については、大沼地域でのリゾート機能の集積が進んでいるが、今後は、さらに本市を中核に道南圏と青函圏を含む、広域的な資源ネットワークを活用した観光地づくりを進め、観光客の多様なニーズ（スポーツ、レクリエーション等）に対応しうる新しい広域観光圏を形成していくことが重要である。

#### ② 新しい広域観光圏イメージの創出と浸透

資源ネットワークを活用した複合型観光地を実現するためには、市内および広域にわたる観光資源をひとつの大きなイメージとして統合化した「新しい広域観光圏イメージ」を形成することが重要であり、そのイメージを牽引するキーワードは「海、山、街の資源に恵まれた観光圏」であり、このことをベースに競合地域との差別化を図っていく必要がある。

また、このイメージを浸透させていくためには、より効果的な誘致宣伝活動の展開、継続的なイベントの開催等、ソフト面での充実も重要である。



## (2) 国際観光都市としてのアメニティ機能の強化

### ① 国際対応型ホスピタリティの醸成とハード・ソフト面の充実

名実ともに国際観光都市を推進するため、言語や慣習の違い等を踏まえたきめ細かいソフト面の充実を図るとともに、国内外からの来函者と市民との幅広い交流を促進するハード面の施設整備が重要である。

### ② 市民のレクリエーションニーズを充足する地域づくりと観光地づくりの融合

これからの観光地づくりの重要なテーマのひとつは、地域の市民生活に潤いをもたらすまちづくりでもあり、このことが観光客にとっても来訪の大きな魅力のひとつとなることを念頭に観光振興に取り組むことが重要である。

### ③ 通年型観光の実現

年間を通じて、様々なふれあいと快適さを提供し、安定した需要の創出を図るため、スキー、温泉等を組み合わせたアメニティ機能の整備など、冬季観光の一層の振興による観光の通年化を推進する。

### ④ 商業、生産機能との連携

本市を強くイメージさせる地場製品の掘り起こしや地場企業のリストラ（事業の再構築）などを通じ、地域の商業、生産機能と連携した観光産業の振興を図る。

### ⑤ イベントの活性化

「港まつり」をはじめ様々なイベントが開催されているが、国際観光都市として、全国的に知名度の高いイベントは育っていないのが現状であり、今後これらのイベントを全国レベルまで育成していく一方で、新たなイベント起こしの検討も必要である。

## (3) 交通アクセスとネットワークの強化

道央や東北地域を来訪する観光客の周遊性をより一層強化・助長するため、函館空港の国際化を含めた航空路線網の拡充、北海道縦貫自動車道や高規格幹線道路の整備、北海道新幹線の建設など、交通体系の整備拡充を進め、国内外からの観光客吸引力を高める。

また、拠点的な観光施設をはじめ、レジャー、レクリエーション環境等の整備を進めるとともに、これらを結ぶ交通ネットワークの強化による有機的な連携を図る。

## 第Ⅳ章

# 基本計画

## IV-1 基本理念と目標像

### 1 基本理念

本市が有する優れた自然環境や、歴史的・文化的遺産を活かすとともに、さらに新たな魅力ある観光資源を整備することによって、新しい時代の要請に応え、函館観光の一層の振興と地域の活性化を促進するため、

- 世界に通用する魅力と受け入れ体制の整った

国際観光交流都市の創造

- 四季を通じての新しい楽しみを、地域が一体となって創り出す

通年観光レクリエーション都市の創造

- 快適で安全な滞在環境と、充実した生活・文化環境を備えた

快適観光文化都市の創造

- 道南および青函広域観光圏のハブ機能を有する

広域観光拠点都市の創造

を基本理念として設定する。

## 2 基本的目標像と基本方策

基本理念として4つの柱を設定したが、その各々に対応する基本的目標像は、次のとおりとする。

### ①国際観光交流都市の創造

- 国際感覚にあふれ、外国人観光客のニーズに対応できるシステムをもつまち
- 海外にも知られる魅力と話題性をもつまち
- 外国人観光客の積極的な誘致と、幅広い交流の仕組みをもつまち

### ②通年観光レクリエーション都市の創造

- 四季の豊かな自然と風物、物産、味覚を楽しめるまち
- 通年にわたって集客力の高い能力をもつまち
- 四季折々の新しい楽しみ方を提案するまち

### ③快適観光文化都市の創造

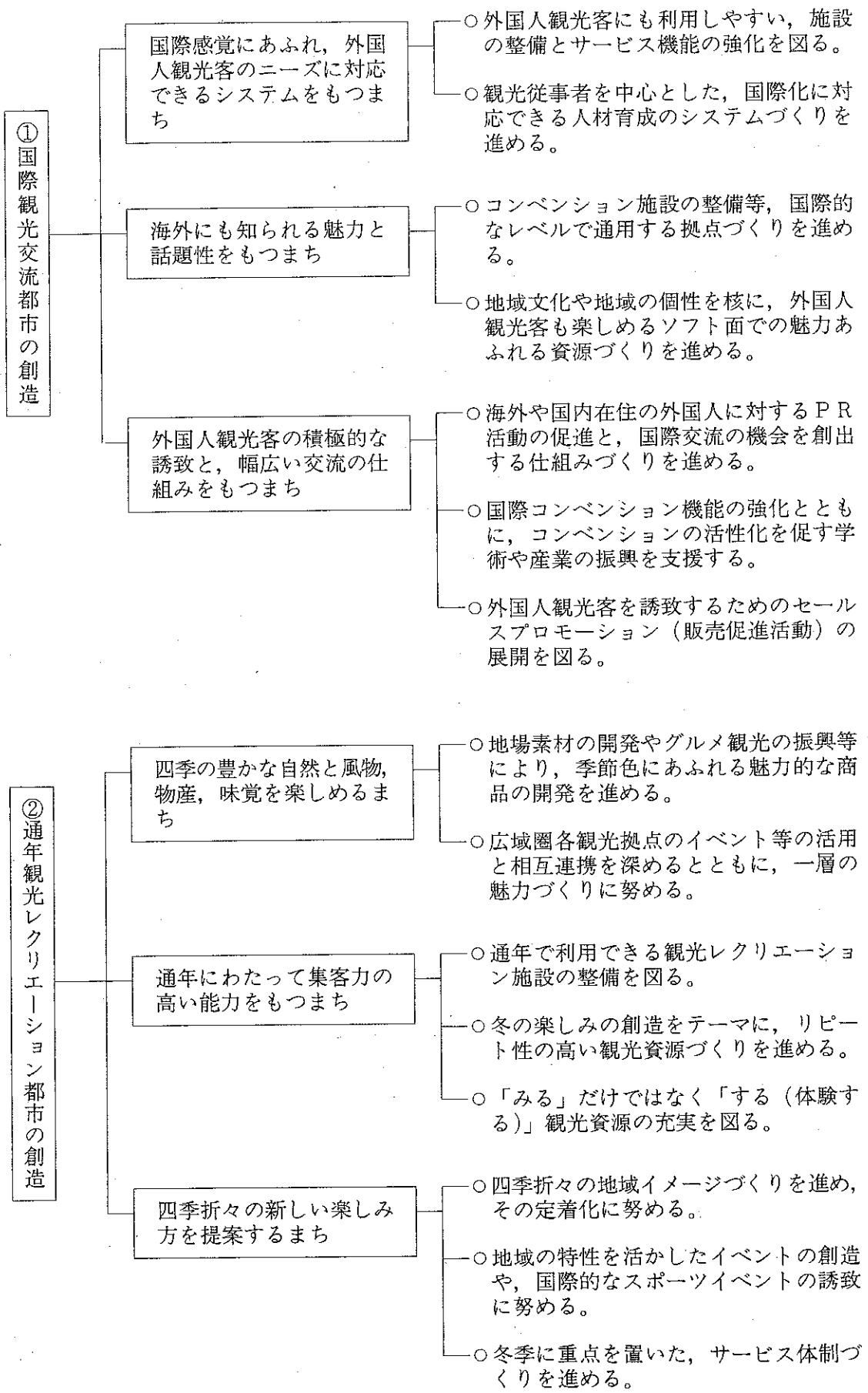
- 歴史の息吹とエキゾチシズムの中で、伝統的文化と新しい文化にひたれるまち
- 誰をもあたたかく迎え入れるホスピタリティに富むまち
- 人々の活気と夢にあふれるまち

### ④広域観光拠点都市の創造

- 道南・青函広域圏の魅力ある観光地を結ぶ周遊ルートの拠点となるまち
- 充実した滞在機能をもつ宿泊観光の拠点となるまち
- きめ細やかな観光情報、観光サービス機能が集積するまち

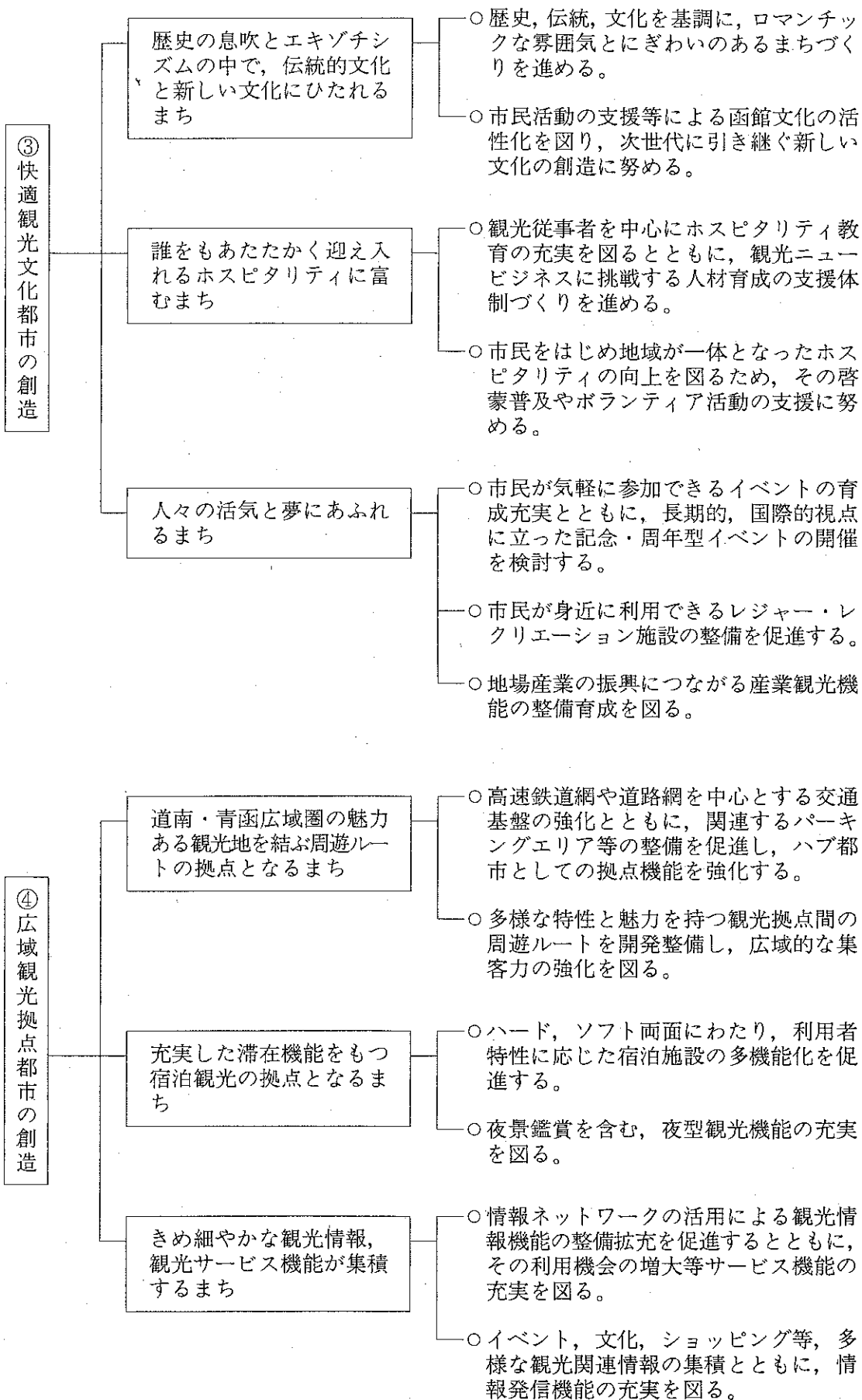
< 基本的目標像 >

< 基本方策 >



< 基本的目標像 >

< 基本方策 >



### 3 基本テーマ

本市の将来の観光地イメージは、「歴史や自然資源の恵みのもとに、国内のみならず様々な国から多くの観光客が訪れ、年間を通じたにぎわいと、そこから、新たな交流や文化などが生まれるとともに、そこに住む人々の心が調和し、良好な生活環境の中で生き生きとしているまち」である。

この将来像を来るべき21世紀の新たな目標に見据えながら、地域社会が一致協力して新しい観光地づくりを推進していくため、その基本テーマを掲げる。

きらめきとふれあいの国際観光都市・函館

## IV-2 振興計画

### 1 拠点整備

#### (1) エリア設定の基本方針

既存の観光施設・機能の集積状況は、緑のシンボルとなっている函館山エリア、函館山麓から中心市街地にかけて歴史的・都市的観光資源が集積しているエリア、函館空港やJR函館駅等の交通拠点エリア、湯の川温泉やJR函館駅周辺の宿泊拠点エリアという、大きく4つの性格を持ったエリアに分類される。

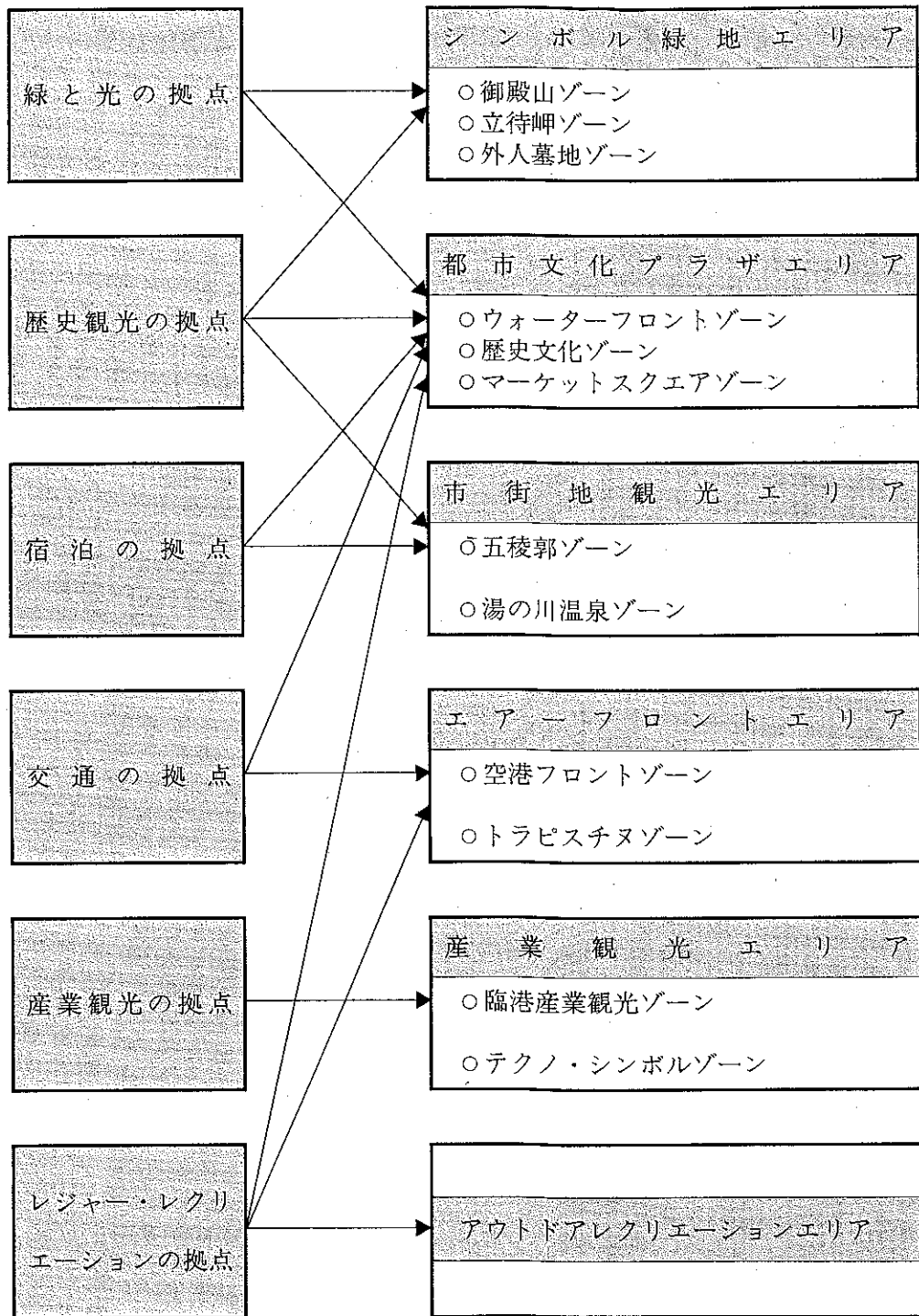
一方、函館観光の将来像を踏まえると、これまではあまり目をむけられていなかった、港湾北部から国道5号沿いの産業集積地域や、郊外北東部に展開する山岳丘陵地域が、新たな観光振興の対象地域として考えられる。

本計画は、市民レクリエーションの充実も含めた、より幅広い観光振興を目指すものであり、市全域を土地利用、地形条件、資源・施設の分布を基に、概念的に6つのエリアに区分し、これらのエリア毎に将来の観光像を明らかにするとともに、それぞれのエリアの中に拠点的な機能の集積を図るゾーンを設定し、重点的な整備に努めることにより、本市全体の観光拠点性を高めるものとする。(図IV-2-1)

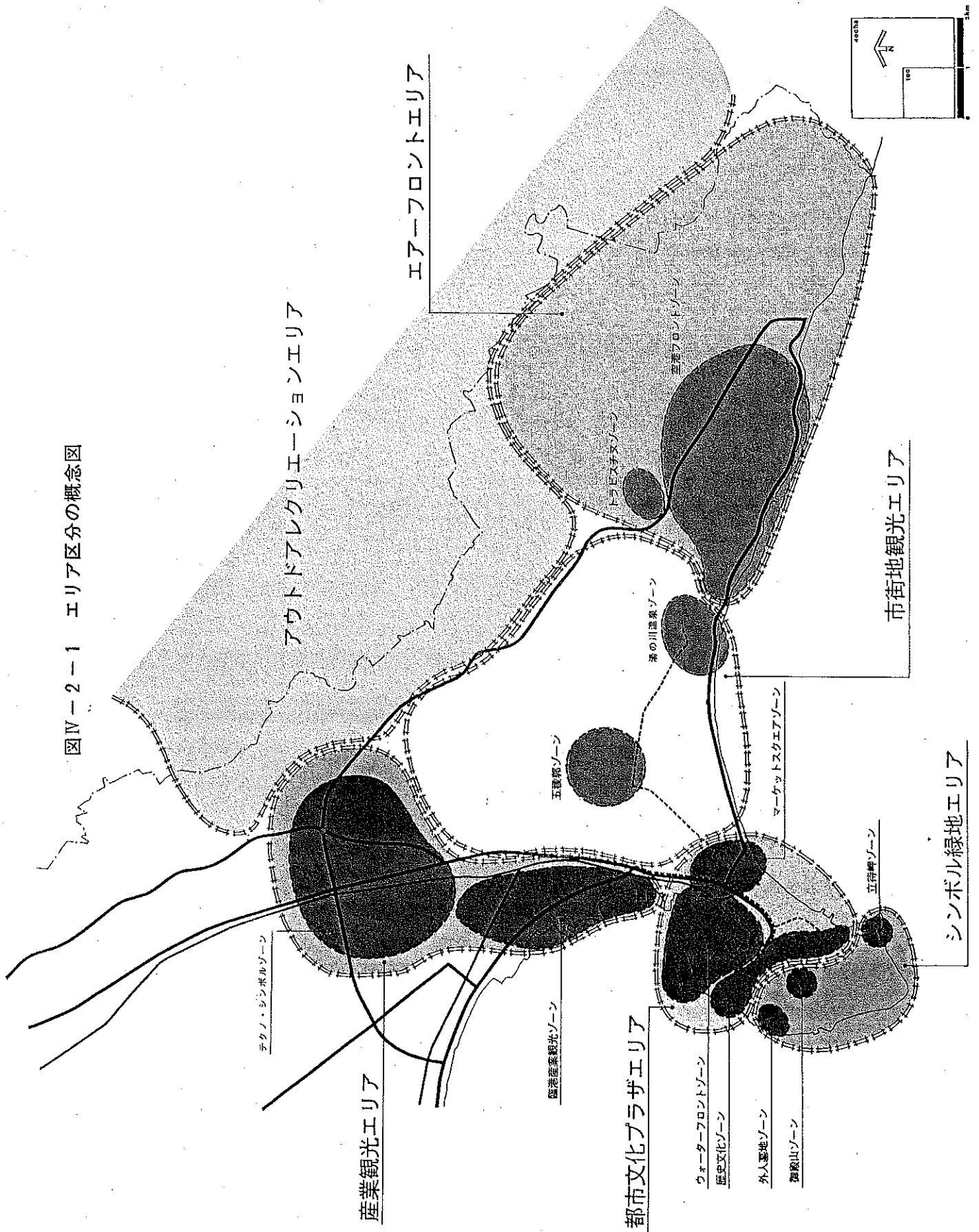


主機能

エリア



図IV-2-2-1 エリア区分の概念図



## (2) 導入機能・施設の検討

### ① シンボル緑地エリア

函館山の緑豊かな自然や山頂からの眺望は、市民はもとより多くの観光客に親しまれ、観光資源として全国的に高い評価を受け、まさに本市観光のシンボルとなっている。

このため、今後も自然景観の保全に努めながら、利用者の便益性に努めるなど、シンボル緑地エリアとしての機能整備を進める。

#### ○御殿山ゾーン

既存の展望機能等の充実に加え、緑の環境を楽しむための憩いの施設や、自然探究の施設等を整備し、市民のレクリエーションの場としての機能充実に努める。

#### ○立待岬ゾーン

函館山や津軽海峡と遠く太平洋を望む絶好のロケーションを活かし、周辺を含む散策ルートの整備や、冬期間における車両の通行確保に努めるなど、眺望をテーマにした憩いの場として位置付け、その活用を図る。

#### ○外人墓地ゾーン

外人墓地は、眼下に海を望み、この地に過ぎ去った異人達の遠き故国へのロマンを偲ばせる。

こうしたノスタルジーとエキゾチックなムードを活かし、地区一帯を静かな環境に包まれた観光ゾーン、デートスポットとして位置付け、休憩や眺望機能を配置した環境演出に努めるなど、新しい魅力づけに努める。

### ② 都市文化プラザエリア

中心市街地や、西部地区、ウォーターフロント地区を含む観光拠点として、集客力の極めて高いエリアである。

今後は、様々な観光機能や親水機能、都市機能の融合を図り、従来の点と線から、面的な広がりを持った観光地としての成熟を推し進めるとともに、多様なニーズに応える国際的な交流の進展をテーマとする通年観光の拠点として位置付け、新しい時代に対応した観光機能の育成や、商業機能の充実再編等に努める。

また、一層の民間活力の導入を図りながら、西部地区における歴史的建造物等の再生や修復への助成等に努めるなど、地域と一体となったまちづくりを推進する。

#### ○ウォーターフロントゾーン

観光の周遊基点であるJR函館駅からの連続性・周遊性を高めるとともに、他のゾーンとの有機的な連携を深めながら、商業・観光施設の集積やイベント空間、緑地空間の整備、海洋レジャー拠点の形成を図るなど、国際的な交流の中心的な都市型リゾートゾーンとして機能強化を図る。

#### ○歴史文化ゾーン

本市固有の歴史的な背景に支えられた地区であり、今後も資源・施設の保全活用を進めるとともに、景観的な調和を基調とした規制・誘導等を行い、地区全体のイメージを大切にしまちなみ形成に努める。

#### ○マーケットスクエアゾーン

物販や飲食機能の集積する中心地区であり、商業従事者等のホスピタリティの向上はもとより、今後は、本市の持つ独特な雰囲気とイメージを重視しつつ、店舗外観や外構デザインの適切な誘導等による商店街の再整備を促進するほか、新幹線時代に対応したJR函館駅を中心とする都市再開発等によりマーケット機能の更新充実を図る。

### ③ 市街地観光エリア

特別史跡五稜郭跡や湯の川温泉等、全国的にも知名度の高い資源が点在するエリアであり、今後は、個々の施設や環境整備はもとより、施設間の効率的なネットワーク機能の整備等によるエリア全体の一体性、利便性の向上を図る。

#### ○五稜郭ゾーン

特別史跡五稜郭跡や商店街等の、観光・文化・商業機能の充実と滞在性を助長する仕組みづくりを構築するとともに、既存の文化・スポーツ施設の効率的な利用促進を図るなど、市街地レクリエーション拠点としての機能強化にも努める。

また、五稜郭跡周辺のまちなみ整備には歴史性を活かすなど、地域全体のイメージアップを図る。

#### ○湯の川温泉ゾーン

温泉街としての風情づくりをテーマに、飲食の場、また観光・ショッピングや通年イベントの場として、民間（地元）サイドの積極的な環境づくりを誘導し、緑化修景施設の整備、まちなみ景観ガイドラインの検討、さらには海岸線や川沿いの利用促進など、新しい魅力とにぎわいの創出に努める。

#### ④ エアーフロントエリア

将来の新外環状線整備による既存市街地や函館圏3町との連担性等を踏まえ、牧歌的な自然環境の保全と既存市街地では得られない面的な広がりを活かしたレクリエーション施設等の立地を検討する。

##### ○空港フロントゾーン

市街地と空港に隣接する恵まれた立地条件や、牧歌的な空間という特性を活かし、自然と人間の触れあいをテーマとする通年型、ファミリー対応型レクリエーション施設の開発を検討する。

##### ○トラピスチヌゾーン

修道院と市民の森が一体となった良好な環境の増進をテーマに、市街地や空港からのアクセス機能の強化による周遊ルートの整備等を図るとともに、地区イメージに調和した環境整備に努める。

#### ⑤ 産業観光エリア

従来、産業施設は、観光にあまり馴染みがないものとして捉えられていたが、近年、企業サイドにおいては、ファクトリーパーク（工場公園）の建設等、環境を重視する整備方策の重要性が認識される一方、観光面でも教養・学習意欲をベースとする体験型観光へのニーズが高くなってきている。

こうした潮流を踏まえ、産業と観光の融合を基本に、基幹産業や流通関連産業が多く集積する臨港部や、先端産業の集積を目指す内陸部における産業と観光の融合化について、その可能性を検討する。

##### ○臨港産業観光ゾーン

水産加工など既存産業の体験観光機能の整備を促進するほか、老朽化したり、使われなくなった倉庫、工場等の大型空間を活用し、イベントやレジャー空間への再生を検討する。

##### ○テクノ・シンボルゾーン

緑豊かな自然に囲まれ、ゆとりある環境の中、市民や観光客がショールーム機能を持った工場や研究施設を巡り、先端的な産業技術等に触れ、知識を広げるなど、新しいイメージとスタイルを持った産業観光の拠点としての位置付けにより、その整備活用を検討する。

⑥ アウトドアレクリエーションエリア

ゴルフ場が点在するほか、近年、一部で宅地開発が進められているが、函館山のシンボル緑地エリアとは異なった視点での自然環境の中心エリアであり、市民の貴重な財産として環境の保全を十分に踏まえたうえで、屋外型スポーツ・レクリエーション機能の充実に努める。

したがって、特に拠点ゾーンは設けず、アクセス環境の改善と防災面に留意しながら、自然環境と一体となった開発を検討する。

## 2 交通ネットワークの整備

航空路，鉄道については，函館空港の国際化や国内外の路線網の拡充および北海道新幹線の整備や駅周辺の整備を促進し，高速大量輸送体制の確立を図る。

幹線道路については，北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）や一般国道自動車専用道路函館・江差自動車道の整備を促進し，道南圏域および道央圏域との高速性・利便性の向上を図る。

また，海上交通については，観光客船周航拠点としての機能強化を推進し，内外からの観光客船の誘致拡大を図る。

一方，市内交通については，市内幹線道路や駐車場をはじめとする道路交通基盤などの整備を促進するとともに，市電やバス等の利用者ニーズを考慮した交通ネットワークの拡充に努めるものとする。

### 3 冬季観光の振興

年間を通じて安定した入込みを確保していくため、冬季観光の振興を官民一体で検討する組織を設置するとともに、冬季需要の掘り起こしを中心とする新しい資源づくりやイベントの展開、誘致対策を推進する。

資源づくりについては、通年で安定した利用が可能な屋内型レジャー・レクリエーション施設やコンベンション施設等の整備を進める。

イベント起こしについては、冬フェスティバルの充実とともに、本市の歴史や風土等を活かし、地域イメージを基本に、冬の楽しみ方などをテーマとしたイベントや、雪が少なく、温暖であるという地域条件を活かしたスポーツイベントの創造に努める。

また、冬季に的を絞った新しい観光商品の開発等にも努め、東南アジアなど、特定地域を対象にしたバック旅行や団体旅行による観光客誘致を促進する。



#### 4 誘致宣伝活動の推進

観光宣伝は、その素材となる観光資源、施設を分かりやすく的確に、かつ興味を湧かせる方法で伝えていくことが重要であり、これまでのテレビや出版等のマス媒体と、口コミやタウン誌のようなミニ媒体の使い分けはもとより、これらのメディア（情報媒体）の複合化という視点を重視しながら、テレビ番組や映画、有力企業における宣伝等との積極的なタイアップ活動に努める。

また、広域的な誘致宣伝活動のデータベースとして、道南・青函広域圏をネットワークする広域観光情報の提供体制の強化を図るとともに、国際的な誘致宣伝体制の確立に努める。

さらに、新規需要を創出するため、コンベンションビューローを設立し、全国、国際規模の大会や産業振興に歩調をあわせたメッセ（見本市）などコンベンションの誘致開催を促進するとともに、道央や青函圏との連携体制の強化に努めるなど、通年における観光集客力の増強を図る。

## 5 ホスピタリティの充実

21世紀の観光地においては、魅力ある観光資源・施設の整備はもとより、「心の豊かさ」や「ヒューマンタッチ」などといった「ゆとり」と「交流」が強く求められるなど、観光客と地域との様々な触れ合いがますます重視される。

こうした時代に対応し、交流機会を積極的に創出するシステムづくりや、観光関連従事者のホスピタリティ教育と人材育成、市民ホスピタリティの涵養等、ソフト面での受け入れ体制の整備を図るとともに、国際化時代に対応したサービス機能の充実に努めるなど、観光客に「やさしい」ひとづくりと、「安全で、清潔で、快適な」まちづくりを推進する。

## 6 産業観光の振興

### (1) 観光関連産業の振興

観光産業は、主に人と人との交流・交歓に携わる産業であることから、物やサービスの付加価値を高めることが期待される産業でもある。

このため、農業や漁業など一次産業においては、従来からの受給体制にとどまらず、観光農園や観光漁業など、より積極的な効果が期待される体験型観光の振興を検討するとともに、観光施設の整備等に関連して派生する観光ニュービジネスなど、サービス関連産業の育成助長にも努める。

こうした産業を育成、定着することにより、今後の需要層の広がりやニーズに対応し、裾野の広い産業の振興に努める。

### (2) 産業観光の展開

従来、産業と観光とは無縁であった場合が多いが、近年、産業の高度化やソフト化にともない、緑の中の工場立地や建物にショールームを併設させる等、市民や観光客等との交流を通じた企業のイメージアップ活動が盛んになってきている。

観光客にとって地場製品の生産風景等を見ることは、非常に興味深い体験であり、特に水産加工業は、工場での試食や製造工程の見学等、観光と結びつきやすい業種のひとつである。

こうした背景を踏まえ、既存企業や先端企業等、産業の現場を観光の場としても取り込み、産業観光という視点から、通年型の観光需要を喚起することも、観光振興のひとつの手法であり、今後その可能性を検討するとともに、積極的な展開に努める。

また、地場製品や地域特性を活かした、独創性の高い商品の開発と、季節色あふれる魅力的な料理の創造などにも努めていくものとする。

## 7 広域観光の推進

### (1) 広域観光圏の形成

道南・青函広域圏の観光拠点それぞれが、自然的、社会的特性を活かした個性ある整備を進め、相互の連携を深めることにより、さらに多くの需要が創出される。

このため、道南観光圏においては本市を、北東北地方においては青森・弘前・十和田を中核とする広域観光圏の形成を図るとともに、両者の緊密な連携を基盤とする域内交通網の整備拡充や情報の交換、観光サービス機能の充実など、相互受入体制の充実に努める。

また、広域観光圏における本市の役割は、海外との広域交通の拠点、コンベンション等を通じた国際交流の拠点であり、これら拠点施設や関連中枢機能の整備を図るとともに、歴史、文化等が複合した魅力的な都市型観光地として一層の機能強化に努める。

### (2) 広域観光ネットワークの整備

#### ① 広域観光ルートの設定

広域観光ルートについては、観光資源の分布、交通体系、観光客の動態等を勘案し、本市と大沼、青森、十和田湖の各観光拠点を結ぶルートを基軸に、周辺観光地それぞれを効率的に結ぶ内陸周遊、湾岸周遊などの新たなルート設定と、その関連施設の整備充実を図る。

また、道央観光圏との周遊性を高めるため、既存の追分ソーランラインやみなみ北海道オーシャンラインの一層の活性化を推進し、その連携強化に努める。

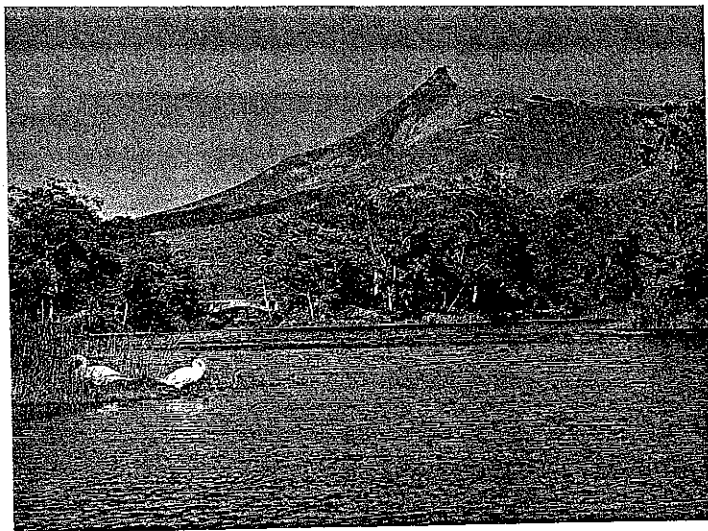
#### ② モデル観光コースの設定

観光コースには、基本的考え方として時間を軸としたコースと、あるテーマに沿ったコースづくりがあり、こうした2面性を踏まえコース設定に取り組むことが重要である。

したがって、今後のモデル観光コースの設定にあたっては、観光客ニーズや地域特性を十分に把握するとともに、広域的な視点と、きめ細やかな観光客層の分析に基づくメニューの多様化に取り組み、その内容充実に努める。

#### ③ 拠点ターミナル機能の整備

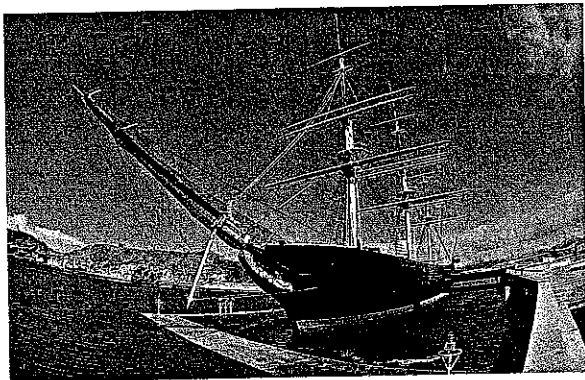
修学旅行等団体客のより積極的な誘致はもとより、高齢者、外国人、さらにはコンベンション客など、新しいタイプの観光客誘致を促進するため、その受け入れ、移動の拠点となるそれぞれのターミナルについて、サービス機能の強化など、一層の機能整備に努める。



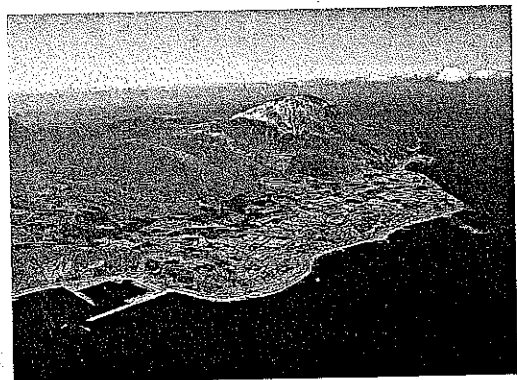
大沼国定公園（七飯町）



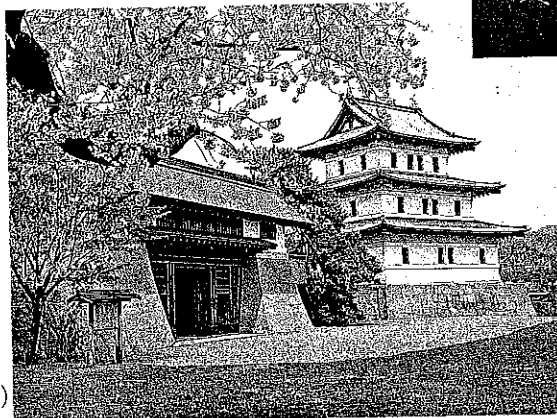
トラピスト修道院（上磯町）



青少年研修施設「開陽丸」（江差町）

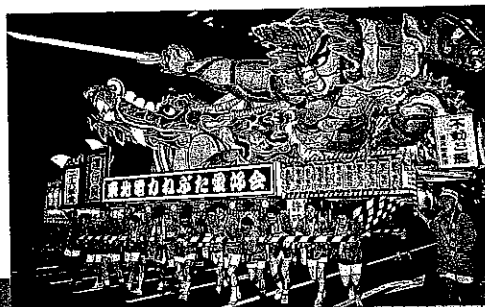


恵山（恵山町）



松前城（松前町）

ねぶた（青森市）



弘前城（弘前市）



十和田湖（十和田湖町）

## IV-3 計画実現のための施策

基本理念に掲げる4つの柱である「国際観光交流都市の創造」「通年観光レクリエーション都市の創造」「快適観光文化都市の創造」「広域観光拠点都市の創造」の達成、すなわち基本テーマである「きらめきとふれあいの国際観光都市・函館」を実現するため、今後、実施すべき観光振興の関連事業を具体的な整備施策として取りまとめる。

また、個々の具体的な施策については、基本理念の達成と振興計画の推進に対し、それぞれが横断的かつ複合的に密接な関係を持つことから、これら施策の位置付けの明確化を期するため、体系的に7つの施策群に分類・整理するものとする。

- 1 観光資源・施設等の整備
- 2 交通ネットワークおよび広域観光ルートの整備
- 3 コンベンション機能、イベントの充実
- 4 誘致宣伝の充実
- 5 ホスピタリティの充実
- 6 観光関連産業の振興
- 7 国際観光都市機能の充実

これら施策の推進にあたっては、今後の観光需要の動向や観光ニーズを的確に把握し、時代の変化に対応した弾力的な運用を図るとともに、その資金需要はもとより、実現可能性や緊急性、さらには様々な波及効果等を、全市的あるいは広域的視点などから総合的に検討しながら取り組んでいくものとする。

なお、施策の事業主体および整備時期は、本計画策定時において望ましいと考えられる方向について、整理をしたものである。

事業主体	公共……国，道，市等の公共団体
	民間……民間（第3セクターを含む）
	◎ ……主体となって取り組むべきもの
	○ ……支援をしていくもの
整備時期	前期……（平成6年度～10年度）
	後期……（平成11年度～15年度）

} 整備に向けて取り組み始める時期

# 1 観光資源・施設等の整備

施設	策	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期
					公共	民間	
都市型リゾート施設の整備		多様な観光資源の整備による、通年型観光地の形成を図る	海洋性レジャー・レクリエーション施設等の整備（水族館、マリーナ等）	都市文化プラザエリア	○	○	■
			ウォーターフロントゾーンにおける観光施設等の充実（輸入品専門店、レストラン、休憩施設、修景施設など）		○	○	■
			多目的アリーナの建設		○	○	■
			通年型テーマパークの整備		○	○	■
函館山地区の自然保護と魅力アップ		函館山を再確認し、環境と調和した整備を進め、存在価値を高める	緑のシンボル、市民共有の財産としての自然景観や生態系の保護保全	シンボル緑地エリア	○	○	■
			山頂展望台周辺部における園地や広場の整備		○	○	■
			立待岬周辺地域の整備		○	○	■
			函館公園の整備		○	○	■
函館夜景のグレートアップ		夜景観光のインパクト強化とイメージアップを図る	第2、第3夜景眺望ポイントの創造と関連施設の整備	市内	○	○	■
			建造物のライトアップ等景観照明の拡充		○	○	■
			夜景の日の充実		○	○	■
			旧ロシア領事館の保存活用		○	○	■
西部地区のまちなみ整備の推進		歴史資源の保全や活用による快適な生活環境づくりと文化的な風土のアピールに努める	歴史的景観の保全及び歴史的建造物の保存活用	都市文化プラザエリア	○	○	■
			歴史的建造物の復元と活用（旧税関、アメリカ領事館、アラスカ郵便局等）		○	○	■
			散策ルートの整備		○	○	■
			散策ルートの整備		○	○	■
外人墓地周辺の整備推進		新しい観光資源としてロマンチックな魅力を創出する	道路修景と案内、誘導サインの整備	シンボル緑地エリア	○	○	■
			展望休憩等施設の整備		○	○	■
緑の島の整備		シンボル施設の整備と話題づくりに取り組む	水族館を核とするレジャー・レクリエーション施設の整備	都市文化プラザエリア	○	○	■
			スポーツ、イベント等多目的広場の整備 緑地等の整備		○	○	■

施 策	中 心 テ ー マ	内 容	展 開 地 域	事 業 主 体		整 備 時 期	
				公 共	民 間	前 期	後 期
ウォーターフロントゾーンの観光拠点化	異国情緒豊かなまちなちのイメージ強化と親水性に富んだ空間づくりにより観光拠点性を高める	ウォーターフロント散策ルートの整備 海岸道路の整備 駅前、朝市、函館シーポートプラザの相互連携の強化 観光客船用バースの整備 海洋性レジャー・レクリエーション施設等の整備（水族館、マリナー等）[再掲] 倉庫群等歴史的建造物の再生活用 遊覧クルーズコースの充実	都市文化プラザエリア 都市文化プラザエリア 産業観光エリア 都市文化プラザエリア	◎ ◎ ○ ◎ ○ ○ ◎ ◎ ○ ◎	◎ ◎ ○ ◎ ○ ○ ◎ ◎ ○ ◎	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	
朝市地区の再整備	市民と観光客の心通うにぎわいの空間づくりに努める	ショッピング、グルメ、情報機能が充実した総合的な観光土産ゾーンの形成 老朽施設等の再開発 駅前、函館シーポートプラザとの相互連携の強化[再掲] ホスピタリティの向上	都市文化プラザエリア	○ ○ ○ ◎	◎ ◎ ◎ ◎	■ ■ ■ ■	
五稜郭跡の歴史ポテンシャルの強化と歴史性に富んだまちなみ整備	歴史資源の有効活用とリピータ性の高い観光資源としての機能強化を図る	箱館奉行所の復元と活用 植栽等修景施設の整備 展望施設の整備や周辺文化施設との連携強化 五稜郭跡周辺の歴史性を活かしたまちなみの形成	市街地観光エリア	◎ ◎ ○ ◎	○ ○ ◎ ◎	■ ■ ■ ■	
湯の川温泉街の活性化	宿泊拠点としての魅力アップと観光的なにぎわいを創出する	散策道路の整備等による魅力あふれる温泉街の形成 既存イベントの充実及び新規イベントの創出 熱帯植物園及び周辺の整備 海浜地の有効活用 総合的な案内機能の強化 ホスピタリティの向上	市街地観光エリア	◎ ◎ ◎ ◎ ○ ◎ ○ ◎	◎ ◎ ◎ ◎ ○ ◎ ○ ◎	■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■	



施 策	中 心 テ ー マ	内 容	展 開 地 域	事 業 主 体		整 備 時 期	
				公 共	民 間	前 期	後 期
郊外におけるアウトドアレクリエーションの振興	スポーツ・レクリエーションの場の創出と機会の充実を図る	オートキャンプ場の整備	アウトドアレクリエーションエリア エアーフロントエリア	○	○	■	
		ダム湖周辺地域の整備（キャンプ場、園地等）		○	○		■
		アウトドアスポーツ施設の整備		○	○	■	
		アクセス道路の整備		○	○		■
既存商店街の近代化、再開発の促進	新しい時代に対応した商業機能の活性化を図る	駅前周辺地区～観光ショッピング、飲食グルメリメ、ナイトレジャー機能等の充実	都市文化プラザエリア 市街地観光エリア	○	○	■	
		十字街地区～観光ショッピング、飲食グルメリメ機能等の充実		○	○	■	
		五稜郭地区～飲食グルメリメ、ナイトレジャー機能等の充実		○	○	■	
		湯の川地区～観光ショッピング、飲食グルメリメ機能等の充実		○	○	■	
		駅前、元町観光案内所の充実		○		■	
		観光案内板、観光標識、散策路誘導ラインの整備		○		■	
観光サービス関連施設等の整備	観光客の効率的な周遊性を高めるなど、快適な観光地の形成を図る	駐車場の整備	都市文化プラザエリア	○	○	■	
		公衆トイレの整備		○	○	■	
		緑化推進及びびべンチ、ポケットパーク（小公園）等修景施設 の整備		○	○	■	
		坂道のロードヒーティング等による安全で快適な道路の整備		○	○	■	
		市内交通ネットワークの拡充		○	○	■	
		レトロ電車、レトロバスの運行		○	○	■	
		宿泊施設の機能特化（料金設定・宿泊目的等）による多様な ニーズへの対応		○	○	■	
		外国人、高齢者、障害者、ペット同伴者等を考慮した宿泊施 設の整備		○	○	■	
		宿泊施設相互の連携による情報サービス機能の強化		○	○	■	
		宿泊施設等の整備充実		多様な観光客ニーズへの対応を図る		市 内	○
			市			■	

## 2 交通ネットワークおよび広域観光ルートの整備

施策	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期	
				公共	民間	前期	後期
北海道新幹線の誘致	時間距離の大幅な短縮により青函圏の相互交流を推進する	北海道新幹線の整備と、青森・函館間同時開業の実現	広域圏	○	○	■	
函館空港, JR函館駅, 函館港等交通拠点の整備充実	ハブ都市としての機能強化を図る	函館空港の滑走路延長と国際空港機能の整備 国内航空路線の拡充 国際航空路線の整備 コミュニティ航空路線(座席数60席以下の小型航空機による地方間定期航空路)の整備 JR函館駅の改築及び駅前広場等周辺地区の整備 観光客船用パースの整備 [再掲] 交通拠点における情報サービス機能の整備	エアーフロントエリア	○	○	■	
広域幹線道路網及び沿道修景の整備促進	ハブ都市としての機能強化を図る	北海道縦貫自動車道の整備 一般国道自動車専用道路函館・江差自動車道の整備 新外環状線の整備 インターチェンジ周辺地域の整備 緑化や景観ガイドライン導入による沿道の修景	市 広域圏	○	○	■	
広域観光交通ネットワークの整備促進	利便性・拠点性の強化により広域観光の活性化を促進する	広域観光圏循環バスの充実 広域観光圏におけるイベントの相互連携と周遊旅行の創出 青函トンネル観光の充実 魅力ある広域観光ルートの整備	アクトアフレグリエーションエリア エアーフロントエリア 産業観光エリア 広域圏	○	○	■	■
			広域圏	○	○	■	■

### 3 コンベンション機能, イベントの充実

施設	策	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期	
					公共	民間	前期	後期
コンベンション拠点機能の整備		会議や業務による利用を通じ観光客の増大と国際交流の進展を図る	コンベンションビュローの設立	市内	○	○	■	
			多目的アリーナの建設 [再掲]	市街地観光エリア	○	○	■	
			総合的な案内機能の整備	広域圏	○	○	■	
			情報収集機能の整備		○	○	■	
イベントの創出と充実		四季折々のイベントを企画し観光の通年化を図る	既存イベント(函館港まつり, 箱館五稜郭祭, はこだて冬フェスティバル等)の充実, 及び新規イベントの創出	市内	○	○	■	
			夜景の日の充実 [再掲]		○	○	■	
			全国・国際的な記念・周年型イベントの開催		○	○	■	
スポーツ関連施設の整備とスポーツイベントの振興		市民スポーツ等の新しい展開と振興を図る	多目的アリーナの建設 [再掲]	市街地観光エリア	○	○	■	
			千代台運動公園の整備		○	○	■	
			サイクリングロードの整備		○	○	■	
			マリンスポーツの振興		○	○	■	
			ウォーキンググラリーの振興		○	○	■	
			ハーフマラソンの充実		○	○	■	
			冬季スポーツの振興		○	○	■	
			全国・国際的スポーツイベントの誘致		○	○	■	

#### 4 誘致宣伝の充実

施設	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期	
				公共	民間	前期	後期
誘致宣伝活動の推進	誘致宣伝活動の強化により、観光客の増大を図る	観光ポスター・パンフレット等宣伝物の充実		○	○	■	
		テレビ、雑誌等マスメディアを活用した誘致宣伝活動の充実		○	○	■	
		観光客船の誘致		○	○	■	
		修学旅行生の誘致		○	○	■	
		広域誘致宣伝組織との連携強化		○	○	■	
		ふるさと会（地元出身者組織）に対する支援と連携強化		○	○	■	
		大都市圏、東北地域、道央地区を対象とした誘致宣伝活動の強化		○	○	■	
新規需要の開拓	新規需要を掘り起こし観光客の増大を図る	ニーズの多様化や世代毎の特性等を考慮した新規旅行商品の開発（高級・低級・バック旅行、冬季割引旅行、温泉旅行、グルメ旅行等）と、誘致宣伝活動の強化		○	○	■	
		冬季修学旅行生の誘致		○	○	■	
女性客をターゲットにした誘致活動の推進	旅行活動をリードする女性客のニーズを掘り起こし、観光客の増大を図る	女性客をターゲットとした観光コースの設定とPR活動の展開		○	○	■	
		女性向けグルメイベント等の開催	市内	○	○	■	
全国・国際規模のフェスティバルや姉妹都市等との連携によるイベントの開催	各種イベントを通じて全国・国際規模での誘客を促進する	全国・国際的な記念・周年型イベントの開催 [再掲]	市内	○	○		■
		姉妹都市及び友好都市との交流記念イベントの開催	市内	○	○	■	
観光物産情報機能等の整備	地場産品の販売を通じて観光PRを図る	函館の物産・グルメ等を紹介するアンテナショップ（試験店舗）の大都市での展開		○	○		■
		函館物産協会の法人化等による体制強化		○	○		■
		観光物産センターの整備	市内	○	○		■
		地場産品の全国、海外販売ネットワークの確立		○	○		■
		函館ブランドの確立と浸透		○	○		■

## 5 ホスピタリティの充実

施策	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期		
				公共	民間	前期	後期	
ホスピタリティの向上	観光関連従業者等のホスピタリティ向上による市のイメージアップを促進する	観光エキスポパースト育成のための高等教育機関における観光専門学科の設置及び専門学校の充実	市内	○	○	■		
		経営者意識改革セミナーの開催		○	○	■		
		観光関連従事者接遇セミナーの充実		○	○	■		
		従業者間交流組織の育成、支援		○	○	■		
		市民ホスピタリティフォーラムの開催		○	○	■		
		観光モニター・アドバイザー制度の充実		○	○	■		
		清掃や花壇づくり等まちなみ美化運動の推進		○	○	■		
		観光ホスピタリティ表彰制度の創設		○	○	■		
		民間ボランティア組織の育成、支援		○	○	■		
		外国人、高齢者、障害者、ペット同伴者等に対応できる多様なサービス体制の充実		○	○	■		
観光客の多様化に対するサービス体制の充実	今後の社会課題を先取りし、快適な観光環境の形成を図る	モデル事業の認定による支援	○	○		■		
		交通拠点における簡易宅配等各種サービス機能の整備		○	■			
		図書館、博物館等文化施設の充実	○		■			
		修学旅行生など観光客を対象とした体験・学習機能の充実	○	○	■			
		市民文化イベントの充実	○	○	■			
		郷土芸能の育成、支援	○	○	■			
		市民の芸術、文化普及活動に対する支援	○	○	■			
		市民や地元出身文化人、芸術家などによる地域文化交流組織の設置	○	○	■			
		地域文化の育成、向上及び学習機能の充実	文化の継承と市民の郷土意識の向上による観光文化都市の醸成を図る	市民文化イベントの充実	○	○	■	
				郷土芸能の育成、支援	○	○	■	

## 6 観光関連産業の振興

施設	策	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期	
					公共	民間	前期	後期
観光関連産業の活性化		産業と観光の結び付きを一層強化し、地域経済の活性化を図る	観光農園、観光漁船等の充実		○	◎	■	
			観光ニュービジネスの研究と育成、支援 地場産品を活用した新しい土産品や料理の研究開発と新作展示発表会の開催およびPR活動の展開 広域的な地場産品フェスティバルの開催 包装等のデザイン開発 遊休工場、倉庫等の観光の活用		○	◎	■	
産業観光の振興		企業のイメージアップと観光への寄与を促進する	産業観光マップの作成とPR活動の展開 見学及び体験コースなどの充実 工場内直販施設の整備 工場内の緑化等によるイメージアップ		◎	◎	■	
			○		◎	■		
			○		◎	■		

## 7 国際観光都市機能の充実

施設	中心テーマ	内容	展開地域	事業主体		整備時期	
				公共	民間	前期	後期
総合的な案内機能の整備	外国人に分かりやすく、便利な観光地づくりを進める	「i」案内所の機能充実	都市文化プラザエリア	○		■	
		公共交通及び公共施設サイン（案内表示等）の図案化と外国語併記の充実		○		■	
		ホテル、旅館、レストラン等の外国人向けサインの充実	市内		○	■	
		ニューメディアを活用したサービス機能の充実		○	○	■	
国際観光推進のための人材育成	国際観光都市にふさわしい人材の育成と支援に努める	観光エキスパート養成のための高等教育機関における観光専門学科の設置及び専門学校の充実【再掲】	市内	○	○	■	
		観光関連従事者に対する民間外国語研修講座の開設		○	○	■	
国際的な交流活動の促進	姉妹都市等との連携や外国人観光客誘致の強化による交流機会の増大を図る	姉妹都市等との連携強化		○	○	■	
		姉妹都市及び友好都市との交流記念イベントの開催【再掲】	市内	○	○	■	
		外国人に対する誘致宣伝活動の展開と外国人向け旅行の開発		○	○	■	
		外国人モニター制度の導入		○	○		■
		外国人向け各種パンフレットの充実		○	○	■	
		外国語による観光ビデオ等の作成とPR活動の強化		○	○	■	

## Ⅳ－４ 計画推進のあり方

### 1 計画推進の基本的な考え方

本計画は、観光振興を今後のまちづくりを担う重要な施策のひとつとして位置付けながら、来るべき21世紀を展望しつつ、長期的かつ国際的な観点から策定したものである。

計画の実施にあたっては、関係市町村や関係機関・団体および市民などの理解と協力を基本に、国、道等の事業についても、その実施を積極的に要請するなど、総合的な見地から地域が一体となって推進するものとする。

また、観光は、地域立地型の事業として、地域経済や地域社会の発展に大きく関与するものであり、その実施にあたっては、民間活力の導入が不可欠であることから、これら民間企業等の積極的な参加を誘導するとともに、その円滑な推進を図るため、地域全体が協調と調和を基調に諸施策の推進に努めるものとする。

### 2 推進体制のあり方

観光に関わる団体は、特定の事業者団体から市民団体に至るまで数多くあり、観光振興を図るうえで、これら団体の活動と協力に対する期待も大きく、今後さらに共同意識の高揚や組織の育成助長に努めるとともに、より一層連携強化を図るものとする。

また、その中核をなす観光協会については、民間における観光振興の主導的な機関として、市と連携を取りながら関連企業や団体の指導、助言、活動推進の支援やインキュベーション（育成、養成）機能を発揮することが期待されている。

このほか、新たな推進機能、体制として、観光客ニーズにきめ細かに対応するため、国際交流、コンベンション誘致のための機能や、文化創造活動のための機能、産業観光推進のための機能の整備についても、市はもとより観光協会をはじめ、既存の関係団体が一体となり検討を深めていくものとする。



## 第V章

### 需要目標

## V 需要目標

平成15年度における観光客入込み数および観光消費額の目標を次のように設定する。

区 分	単 位	平成4年度	平成15年度
観光客入込み数	千 人	5,066	7,500
観光消費額	億 円	1,278	3,000

- 1 平成4年度観光客入込み数は、商工観光部調べ。
- 2 平成4年度観光消費額は、観光アンケート調査に基づき推計。
- 3 平成15年度における「観光客入込み数」の需要目標については、5年度上期までの本市「観光客入込み数」と、これまでの入込み数に影響が高いと考えられる「一人あたり観光消費額」「鉄道利用による時間距離」「宿泊収容者数」「乗り入れ航空便1日あたり人員輸送力」を諸元として推計のうえ設定した。
- 4 平成15年度における「観光消費額」の需要目標については、4年度までの本市「一人あたり観光消費額」の推移を諸元として、15年度の本市「一人あたり観光消費額」を推計し、これに15年度「観光客入込み数」の目標値を乗じて設定した。

※なお、需要目標については、㈱三菱総合研究所において試算をした推計値に基づく。

資料編

# 国際観光都市宣言

函館は、美しい自然、豊かな温泉、そして異国情緒あふれるまち並みや歴史的文化遺産などの観光資源に恵まれた、魅力ある都市です。

世界の国々から訪れる方々を、私たち函館市民が温かい真心で迎え、感動とやすらぎのなかで、再び函館を訪れたくなるような、人情味あふれる観光地づくりをすることが、観光都市函館のねがいです。

歴史と文化のかおり高い美しい街函館の、より一層の飛躍を目指し、全市民の総意と熱意をもって、ここに「国際観光都市・函館」を宣言します。

平成元年8月1日

函 館 市

# 新函館市観光基本計画検討委員

(50音別, 敬称略)

観光ボランティアサークル会長	秋本シゲ
平成5年 新 成 人	飯田晃子
○ 函 館 大 学 教 授	大野和雄
函館湯の川温泉旅館協同組合理事長	河内孝夫
函館工業高等専門学校助教授	川村 彰
函館の歴史的風土を守る会事務局長	工藤光雄
北海道旅客鉄道(株)函館支社長	小島正克
(社) 函 館 青 年 会 議 所	佐々木 祐二
(株) 日 本 交 通 公 社 函 館 支 店 長	庄司忠逸
○ (社) 函 館 観 光 協 会 専 務 理 事	杉野一博
函館開発建設部地域振興対策室長	鈴木孝司
函 館 税 関 総 務 部 長	高取繁晴
渡 島 支 庁 経 済 部 長	田中 毅
函 館 物 産 協 会 会 長	名取喜昭
(社) 函 館 地 方 法 人 会 青 年 部	林 侑逸
◎ 函 館 商 工 会 議 所 専 務 理 事	平野鶴男
海 外 居 住 経 験 者	山崎暁子
海 外 居 住 経 験 者	横澤欣一郎
平成5年 新 成 人	渡辺雄史
(前函館開発建設部地域振興対策室長	奥山 清)
(前函館税関総務部長	小泉 隆)

◎委員長, ○副委員長, ( ) 前任者

# 北海道広域観光圏・道南観光圏観光地別入込み数の推移

(単位：人)

区分	年度	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度
北海道	総計	84,961,849	85,640,392	90,284,099	93,505,062	98,321,016	103,373,165	109,789,423	116,546,165	124,499,547	131,127,499	131,156,391
	前年度対比 %	105.0	100.8	105.4	103.6	105.2	105.1	106.2	106.2	106.8	105.3	100.0
	指数 S57=100	100	101	106	110	116	122	129	137	147	154	154
道南観光圏		7,908,264	7,737,081	8,067,957	8,379,810	8,950,527	9,813,847	10,515,980	11,195,419	12,136,893	13,230,968	13,282,019
函館		2,531,294	2,454,612	2,597,416	2,728,689	2,990,143	3,423,268	3,962,397	4,286,642	4,645,193	5,063,389	5,066,154
松前		427,300	412,100	446,200	461,354	471,900	546,000	524,300	560,400	653,570	749,730	617,400
大沼		2,063,270	1,981,740	2,033,393	2,135,406	2,140,283	2,376,210	2,552,455	2,621,751	2,765,981	2,972,729	2,890,430
恵山		664,391	618,732	607,002	579,889	589,246	604,728	637,789	671,152	706,361	720,941	679,037
鹿部								289,407	299,468	293,116	302,452	300,439
森		171,958	174,919	183,917	192,832	270,020	365,201	432,000	451,798	552,050	694,005	724,096
長万部		336,236	445,920	523,709	537,391	595,582	640,660	701,244	828,982	875,126	1,044,938	1,138,734
仁山		399,452	425,607	383,749	417,551	440,854	500,140					
江差		609,231	562,998	588,292	611,976	744,646	645,974	676,517	687,550	806,422	782,604	746,857
桧山海岸												675,020
熊石		284,207	275,992	300,129	301,630	303,150	294,040	295,435	308,127	310,552	323,524	
大成		110,226	108,241	107,179	108,202	112,587	112,623	120,082	131,833	140,478	151,736	
奥尻		129,953	104,668	117,897	123,545	124,314	133,309	137,916	148,857	178,447	175,224	159,858
南狩場茂津多		180,746	171,552	179,074	181,345	167,802	171,694	186,438	198,859	209,597	249,696	283,994
道央観光圏		44,649,434	45,492,142	48,802,761	50,743,175	53,726,234	55,690,310	59,252,939	62,027,275	65,981,571	68,566,637	68,111,314
道北観光圏		10,866,742	10,905,717	11,419,777	11,947,081	12,474,342	13,370,857	14,325,301	15,645,734	16,510,047	17,258,360	17,679,672
オホーツク観光圏		8,135,261	8,236,971	8,463,625	8,582,274	8,950,003	9,455,349	9,402,574	10,033,978	10,407,255	10,859,549	10,901,832
十勝観光圏		5,027,181	4,845,522	4,940,043	5,005,081	5,275,962	5,548,401	6,624,838	6,790,569	7,406,084	7,999,581	7,941,761
釧路・根室観光圏		8,374,967	8,422,959	8,589,936	8,847,641	8,943,948	9,494,401	9,667,791	10,853,190	12,057,697	13,212,404	13,239,793

資料：北海道商工労働観光部

# 来函観光客入込み数の推移

(単位：人)

区分	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度
来函観光客入込み数	2,531,294	2,454,612	2,597,416	2,728,689	2,990,143	3,423,268	3,962,397	4,286,642	4,645,193	5,063,389	5,066,154
前年度対比%	100.4	97.0	105.8	103.0	108.1	114.5	115.7	108.2	108.4	109.0	100.1
S57=100	100	97	103	103	108	135	157	169	184	200	200
上期	2,041,746	1,974,765	2,098,709	2,232,335	2,413,445	2,683,760	3,226,628	3,326,365	3,564,289	3,942,865	3,922,196
前年度対比%	100.9	96.7	106.3	106.4	108.1	111.2	120.2	103.1	107.2	110.6	99.5
S57=100	100	97	103	103	108	131	158	163	175	193	192
4月	113,377	133,178	127,921	132,694	128,140	148,051	176,933	211,081	241,471	262,151	270,904
5月	409,044	378,983	388,217	449,787	500,359	580,961	580,961	658,716	735,670	785,670	763,028
6月	364,188	348,262	363,039	400,256	441,201	455,815	535,473	626,358	666,711	736,916	748,313
7月	386,455	364,951	396,059	396,954	432,111	462,952	601,640	598,494	669,155	652,697	652,697
8月	500,086	482,866	511,520	532,453	580,845	697,946	798,412	732,431	791,757	845,527	852,686
9月	268,596	266,525	311,953	320,191	348,189	418,637	533,209	600,396	686,287	644,727	644,727
下期	489,548	479,847	498,707	496,354	576,698	739,508	735,769	960,277	1,080,904	1,120,524	1,143,958
前年度対比%	98.3	98.0	103.9	99.5	116.2	128.2	99.5	130.5	112.6	103.7	102.1
S57=100	100	98	104	101	118	151	150	196	221	229	234
10月	198,235	194,452	211,155	203,606	222,536	268,850	299,026	378,436	410,092	427,471	434,091
11月	87,711	85,493	87,686	90,915	101,080	123,258	132,503	164,121	199,411	201,693	211,550
12月	41,371	39,013	39,686	40,375	50,131	55,149	57,810	84,592	107,799	103,554	103,554
1月	38,422	38,025	37,961	36,606	53,623	60,612	58,188	86,657	95,173	89,411	96,001
2月	44,203	46,759	49,953	47,266	61,285	87,294	79,315	123,569	125,164	131,879	139,793
3月	79,606	76,109	72,266	76,089	88,038	144,345	108,927	122,902	149,037	162,271	158,969
外	1,273,784	1,206,035	1,179,373	1,593,563	1,758,990	2,134,466	2,561,847	2,872,743	2,959,694	3,332,067	3,347,720
前年度対比%	98.9	94.7	97.8	135.1	110.4	121.3	120.0	104.3	110.7	112.6	100.5
S57=100	100	95	99	125	138	168	201	210	232	262	263
4月	1,257,510	1,248,572	1,418,043	1,135,126	1,231,152	1,288,802	1,400,550	1,618,899	1,685,499	1,731,322	1,718,434
前年度対比%	101.9	99.3	113.6	80.0	108.5	104.7	108.7	115.2	104.4	102.7	99.3
S57=100	100	99	113	90	98	102	111	128	134	138	137
5月	1,151,040	1,122,969	1,187,052	1,241,358	1,361,938	1,572,702	1,808,957	1,886,915	2,009,641	2,120,338	2,087,430
前年度対比%	100.2	97.6	106.7	104.6	109.7	115.5	115.0	104.3	106.5	105.5	98.4
S57=100	100	98	108	108	118	137	157	164	175	184	181
6月	1,380,294	1,331,643	1,410,364	1,487,331	1,628,205	1,850,566	2,153,440	2,399,727	2,635,552	2,943,051	2,978,724
前年度対比%	100.6	96.5	105.9	105.5	113.7	113.7	116.4	111.4	109.8	111.7	101.2
S57=100	100	96	108	108	118	134	156	174	191	213	216
7月	756,832	706,635	665,451	656,760	643,463	877,178	1,157,824	929,856	949,551	991,786	935,622
前年度対比%	99.6	93.4	94.2	98.7	98.0	136.3	132.0	80.3	102.1	104.4	94.3
S57=100	100	93	98	98	85	110	津島	123	125	131	124
8月	721,819	681,051	651,728	632,595	611,846	598,467	668,689	646,437	699,473	783,783	750,976
前年度対比%	97.8	94.4	95.7	97.1	96.7	97.8	111.7	96.7	108.2	112.1	95.8
S57=100	100	94	94	88	85	83	93	90	97	109	104
9月	1,478,651	1,387,686	1,317,179	1,289,355	1,255,305	1,475,645	1,826,513	1,576,293	1,649,024	1,775,569	1,686,598
前年度対比%	98.7	93.8	94.9	97.9	97.4	117.6	123.3	86.3	104.6	107.7	96.0
S57=100	100	94	94	87	85	100	124	107	112	120	114
10月	291,862	273,315	267,125	267,603	295,996	316,792	391,104	417,738	436,935	460,581	443,295
前年度対比%	97.9	93.6	97.7	100.2	110.6	107.0	123.5	106.8	104.6	105.4	96.2
S57=100	100	94	92	101	109	109	134	143	150	158	152
11月	347,740	370,075	520,941	650,502	856,124	972,721	1,049,124	1,465,930	1,524,697	1,599,039	1,637,959
前年度対比%	112.6	106.4	140.8	124.9	131.6	113.6	107.9	139.7	104.0	104.9	102.4
S57=100	100	106	140	187	246	280	302	422	438	460	471
12月	231,439	244,797	295,254	321,463	369,776	425,094	447,591	478,082	492,097	598,559	644,055
前年度対比%	102.3	105.8	115.0	108.9	115.0	115.0	106.3	106.8	102.9	121.6	107.6
S57=100	100	106	128	139	160	184	193	207	213	259	278
1月	181,602	178,739	196,917	199,768	212,938	233,016	248,065	348,592	542,440	629,641	654,247
前年度対比%	95.9	98.4	110.2	101.4	106.6	109.4	106.5	140.5	155.6	116.1	103.9
S57=100	100	98	108	110	117	128	137	299	347	360	360

資料：函館市商工観光部

# 觀光施設等利用者数の推移

(単位：人)

区分	年度	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度
駅前	観光案内所	159,126	170,838	155,099	159,773	171,524	254,930	241,502	226,461	220,911	226,262	179,733
	前年度対比%	115.4	107.4	90.8	103.0	107.4	148.6	94.8	93.8	97.5	102.4	79.4
元町	観光案内所	50,449	109,171	121,904	123,682	163,828	215,666	307,637	320,871	374,649	324,740	29,698
	前年度対比%	皆増	216.4	111.7	101.5	132.5	131.6	142.6	104.3	116.8	86.7	9.1
函館市旧イヌノ町	観光案内所	100	216	242	245	325	427	610	636	743	644	48,901
	前年度対比%	100	216	242	245	325	427	610	636	743	644	皆増
旧函館区公会堂	観光案内所	108,289	108,289	104,498	118,010	153,615	205,444	221,013	246,592	273,295	294,745	266,341
	前年度対比%	皆増	皆増	96.5	112.9	130.2	133.7	107.6	111.6	110.8	107.8	90.4
北洋	観光案内所	17,855	32,102	31,555	29,528	49,451	50,474	53,166	52,064	57,585	56,684	53,330
	前年度対比%	皆増	179.8	98.3	93.6	167.5	102.1	105.3	97.9	110.6	98.4	94.1
函館市北方民族資料館	観光案内所	100	180	177	165	277	283	298	292	323	317	299
	前年度対比%	100	180	177	165	277	283	298	292	323	317	299
熱帯植物園	観光案内所	133,175	142,716	115,927	133,426	130,726	106,973	100,526	98,621	95,392	108,802	76,813
	前年度対比%	113.5	107.2	81.2	115.1	98.0	81.8	94.0	98.1	96.7	114.1	70.6
五稜郭	観光案内所	402,075	401,572	409,196	424,850	453,687	629,978	688,678	770,395	848,794	924,819	939,273
	前年度対比%	101.0	99.9	101.9	103.8	106.8	138.9	109.3	111.9	110.2	109.0	101.6
函館山口	観光案内所	332,437	258,807	323,690	360,051	385,650	338,667	1,100,531	1,184,663	1,489,030	1,710,049	1,734,046
	前年度対比%	110.0	77.9	125.1	111.2	107.1	87.8	325.0	107.6	125.7	114.8	101.4
中華	観光案内所	87,703	56,937	52,103	54,666	60,788	79,547	87,901	79,404	80,606	80,929	75,843
	前年度対比%	皆増	64.9	91.5	104.9	111.2	130.9	110.5	90.3	101.5	100.4	93.7
高田屋	観光案内所	100	65	59	62	69	91	100	91	92	92	86
	前年度対比%	100	65	59	62	69	91	100	91	92	92	86
メモリアル	観光案内所	57,242	45,641	44,414	39,183	45,983	69,755	82,919	114,437	179,403	211,829	224,648
	前年度対比%	92.7	79.7	97.3	88.2	117.4	151.7	118.9	138.0	156.8	118.1	106.1
定期	観光案内所	100	80	78	68	80	122	145	200	313	370	201
	前年度対比%	100	80	78	68	80	122	145	200	313	370	201
函館山	観光案内所	23,020	22,538	27,746	71,437	69,981	64,608	89,118	87,985	93,275	100,291	82,036
	前年度対比%	132.2	97.9	123.1	257.5	98.0	92.3	137.9	98.7	106.0	107.5	81.8
港内	観光案内所	6,497	5,016	5,281	17,440	16,489	18,199	19,276	24,208	27,545	38,020	29,896
	前年度対比%	100.7	77.2	105.3	330.2	94.5	110.4	105.9	125.6	113.8	138.0	78.6
	観光案内所	100	77	81	268	254	280	297	373	424	585	460
	前年度対比%	100	77	81	268	254	280	297	373	424	585	460

資料：函館市商工観光部



### 観光関連イベント一覧（市内）

開催時期	名	称
4月 下旬～5/中	函館さくらまつり	
5月 中 旬	箱館五稜郭祭	
7月 1～7日	交通安全祈願七夕祭	
上旬～中旬	函館湯の川千勝まつり	
下 旬	高田屋嘉兵衛まつり	
下 旬	道南くどき全国大会	
下旬～8/中	市民創作函館野外劇	
8月 1～7日	函館港まつり	
13 日	函館夜景の日	
下 旬	湯の川温泉いさり火まつり	
10月 上 旬	土方軍五稜郭進撃ツアー	
2月 中 旬	はこだて冬・フェスティバル	

### 観光関連イベント一覧（道南観光圏）

開催時期	名	称	開催地
4月 下 旬	駒ヶ岳開山祭		七 飯 町
5月 1～20日	松前さくらまつり		松 前 町
第1日曜日	館城跡まつり		厚 沢 部 町
10 日	霊場八十八ヶ所めぐりと松前藩歴史探訪		松 前 町
上 旬	夜桜インおおの		大 野 町
上 旬	大千軒岳登山大会		福 島 町
上 旬	しびの岬桜まつり		乙 部 町
上 旬	写万部山山開き		長 万 部 町
上旬～下旬	森町桜まつり		森 町
第2日曜日	水仙まつり		北 檜 山 町
第2日曜日	女相撲大会		福 島 町
第2日曜日	さらんべ公園さくらまつり		八 雲 町
中 旬	大沼湖畔一周駅伝競争大会		七 飯 町
中旬～6/上	どうだんつつじ祭り		楳 法 華 村
中 旬	江差北前船まつり		江 差 町
中 旬	くまいし桜まつり		熊 石 町
30 日	落部公園つつじ祭		八 雲 町
下 旬	おしゃまんべ桜まつり		長 万 部 町
下 旬	南かやべふるさと祭り川汲公園さくら祭り		南 茅 部 町
下旬～6/上	恵山つつじまつり		恵 山 町
6月 上 旬	ふるさとの森まつり		木 古 内 町
上 旬	カニカン岳山開き		今 金 町
第2土・日	南かやべふるさと祭りひろめ舟まつり		南 茅 部 町
中 旬	牧場まつり		奥 尻 町
中 旬	大千軒岳バックパッキング（徒歩旅行）		上ノ国町
第3土・日	夷王山祭		上ノ国町
20～22日	八雲まつり		八 雲 町
第4日曜日	浮島公園まつり		北 檜 山 町
第4日曜日	毛がにロード・レース大会		長 万 部 町

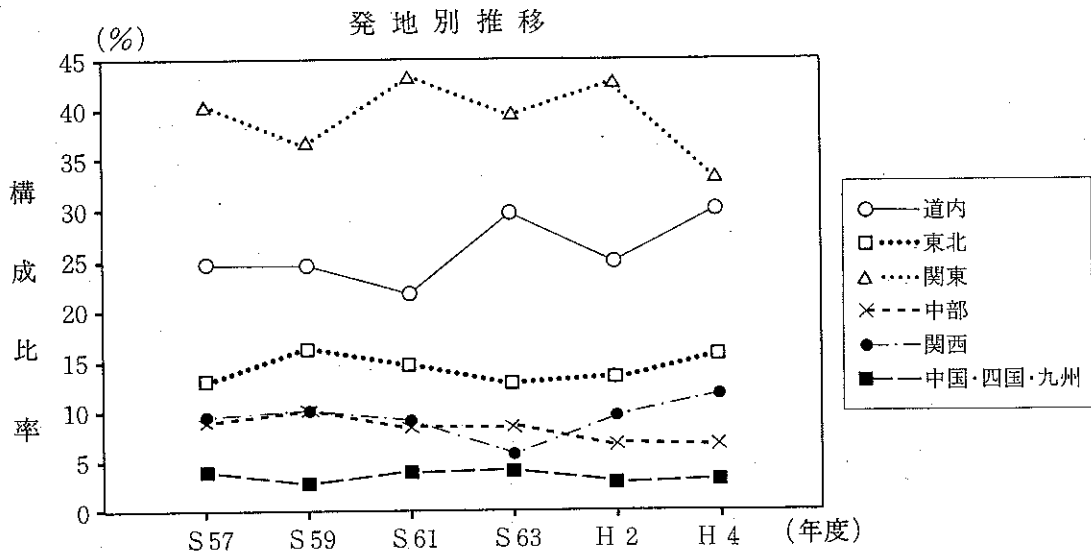
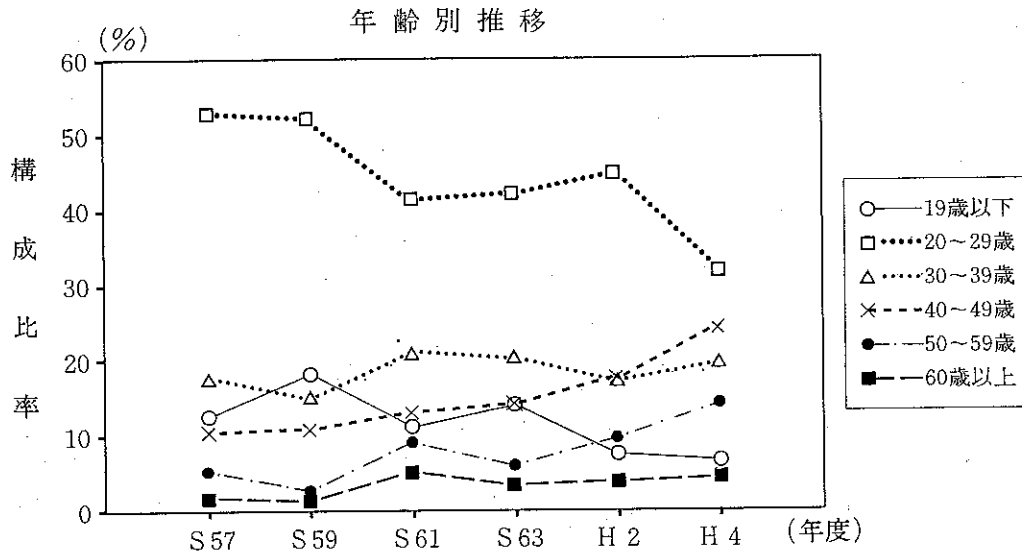
開催時期	名	開催地
6月 下 旬	賽の河原祭	奥尻町
下 旬	サバイバル 2DAY'S エンデュール木古内大会	木古内町
下 旬	九郎岳(乙部岳)町民登山	乙部町
下 旬	乙部温泉まつり	乙部町
7月 第1土・日	江差かもめ島まつり	江差町
上 旬	おしゃまんべフェスティバル	長万部町
上 旬	熊石休養村まつり	熊石町
15 日	噴火湾どんとまつり	砂原町
第2土・日	ジャンボ風車よってこいまつり	今金町
第2日曜日	湯ノ岱温泉祭	上ノ国町
第2日曜日	狩場山開き	北檜山町
19～20日	室津祭	奥尻町
第3土・日	キリスト教徒殉教ミサ	福島町
24～25日	大沼湖水まつり	七飯町
第4日曜日	自然休養村まつり	北檜山町
第4日曜日	牧場まつり	大野町
最終土・日	わっためがしてフェスティバル	大成町
最終土・日	なべつる祭	奥尻町
下 旬	元和台マリンフェスティバル	乙部町
8月 7～9日	夏のまつり in もり	森町
9～11日	江差姥神大神宮渡御祭	江差町
10 日	飯生神社例大祭	長万部町
第1土・日	せたな漁火まつり	瀬棚町
第1土・日	太鼓山まつり	厚沢部町
第1日曜日	八雲ユーラップまつり	八雲町
第1日曜日	乙部町産業まつり	乙部町
上 旬	清流まつり	今金町
上 旬	松前神社例大祭	松前町
上 旬	松前町牧場まつり	松前町
11～13日	サマーフェスティバル・イン・トドホッケ	榎法華村
12～16日	松前城下時代まつり	松前町
13～15日	根崎神社例大祭	熊石町
13～14日	やるべ福島イカまつり	福島町
14～15日	エゾ地の火祭り	上ノ国町
14～16日	乙部八幡神社例大祭	乙部町
14～15日	上磯町夏まつり	上磯町
14～15日	サマーカーニバル in 知内	知内町
15 日	ふるさと港まつり	大成町
15 日	サマー・イン・エサン	大恵山町
16 日	夜間みこしフェスタ	木古内町
中 旬	サマーナイトクルージング	奥尻町
中 旬	きたひやま夏まつり	北檜山町
中 旬	ふるさとの夏まつり	大野町
中 旬	ライダーズフェスティバル in とい	戸井町
中 旬	七重浜まつり	上磯町
第4日曜日	おおの結っこまつり	大野町
下 旬	しかべ海と温泉のまつり	鹿部町
下 旬	TOPAS-CUP トライアスロン and 北海道選手権 in TOI	戸井町

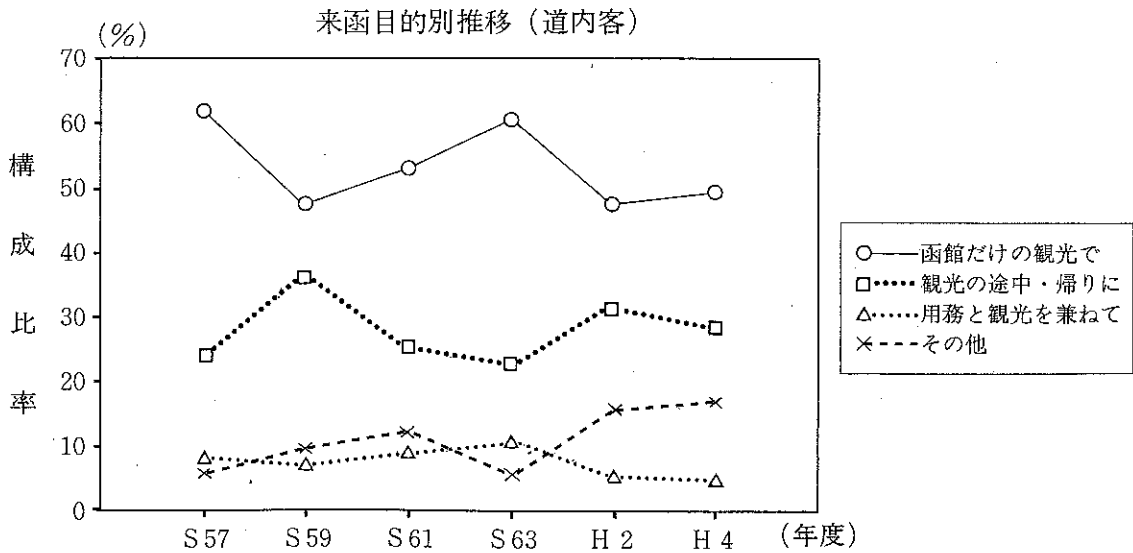
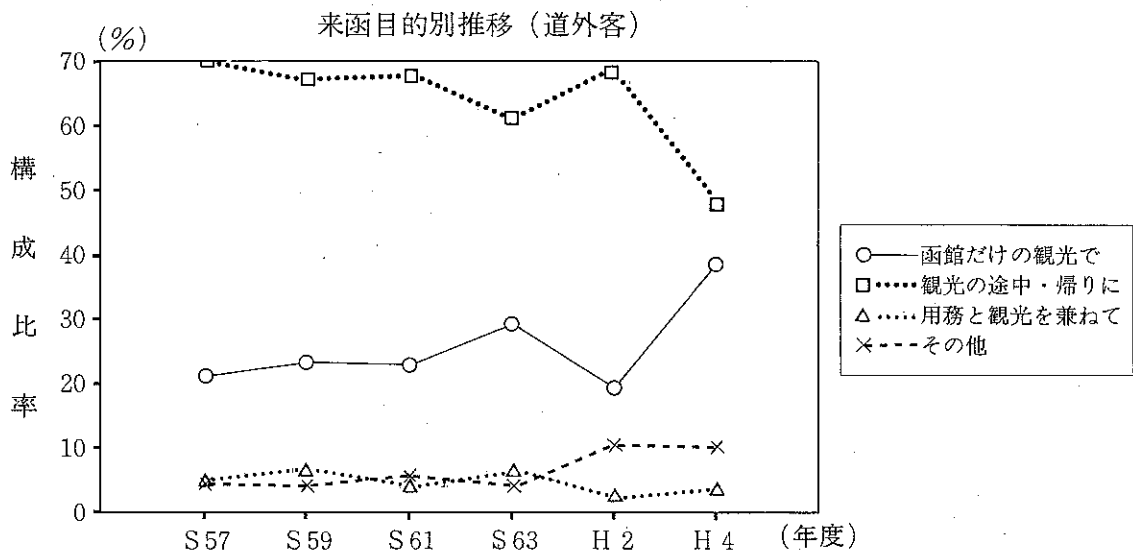
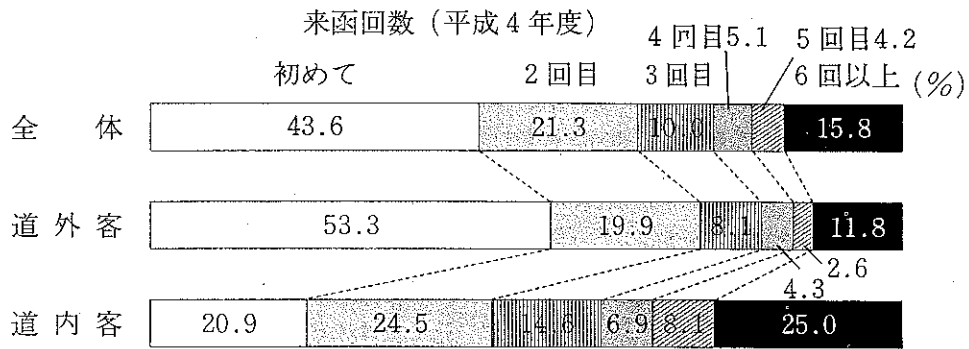
開催時期	名 称	開催地
8月 下旬	もりあがってもりっ子フェスティバル	森 町
9月 5日	大沼ボートオリエンテーリング	七 飯 町
上 旬	江差町産業まつり	江 差 町
14～15日	きたひやま秋まつり（真駒内神社祭典）	北 檜 山 町
14～16日	福島大神宮例大祭	福 島 町
第3土・日	“海と緑と太陽のまち” さわらふるさとまつり	砂 原 町
第3土・日	江差追分全国大会	江 差 町
19～21日	いまかね秋まつり	今 金 町
23日	厚沢部町産業まつり	厚 沢 部 町
23日	縁桂（えんかつら）森林公園まつり	乙 部 町
下 旬	九郎岳（乙部岳）町民登山	乙 部 町
10月 第1日曜日	上ノ国町産業まつり	上ノ国町
第1日曜日	瀬棚町大収穫祭	瀬 棚 町
10日	せたなうまいものまつり	瀬 棚 町
上 旬	駒ヶ岳閉山祭	七 飯 町
上 旬	松前城下楽市楽座	松 前 町
第2土曜日	福島町カントリーフェスティバル	福 島 町
中 旬	紅葉かんしょう会	森 町
中 旬	ランニング・オン・大沼	七 飯 町
第3日曜日	知内町産業まつり	知 内 町
下旬～11上旬	恵山町産業まつり	恵 山 町
下 旬	戸井町産業まつり	戸 井 町
下 旬	巨大カボチャまつり	長 万 部 町
下 旬	大収穫祭・かみいそ海と大地と風	上 磯 町
11月 3日	上磯町さけまつり	上 磯 町
上 旬	木古内町産業まつり	木 古 内 町
上 旬	野菜まつり	大 野 町
第3日曜日	やくも大漁秋味まつり	八 雲 町
下 旬	あきあじまつり	森 町
12月 第2土・日	奥尻町特産品フェスティバル	奥 尻 町
1月 14～15日	寒中みそぎフェスティバル	木 古 内 町
2月 1～28日	江差追分セミナー	江 差 町
1～28日	たば風の祭典	江 差 町
上 旬	大沼函館雪と氷の祭典	七 飯 町
上 旬	八雲さむいべや祭り	八 雲 町
上 旬	おとべ冬フェスティバル	乙 部 町
第2土・日	いまかね雪まつり	今 金 町
中 旬	スノーランドかみいそ世界冬季運動会	上 磯 町
中 旬	雪上レクリエーション	長 万 部 町
中 旬	浜っ子冬のフェスティバル	砂 原 町
中 旬	恵山町ごっこまつり	恵 山 町
下 旬	冬季スポーツフェスティバル・自作ソリ大会	森 町
下 旬	北海道犬ぞり大会	森 町
下 旬	駒ヶ岳ぐるっと歩くスキーフェスティバル	七 飯 町
下 旬	自作ソリ大会	北 檜 山 町
3月 上 旬	ふるさとふれあいスポーツ交流大会	今 金 町

函館市商工観光部調べ

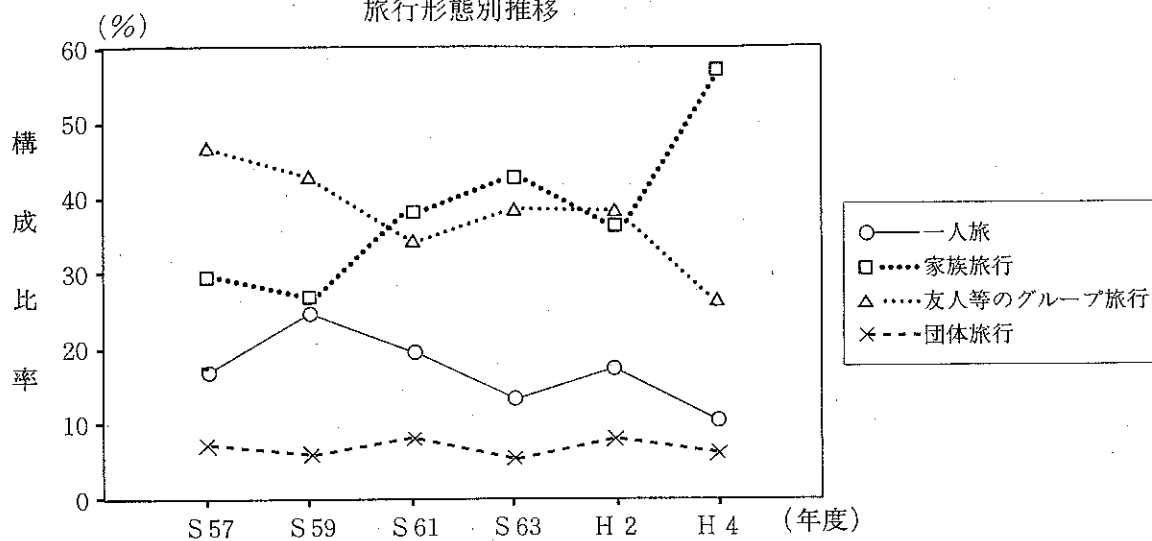
# 来函観光客アンケート調査結果

(昭和57年度～平成4年度)

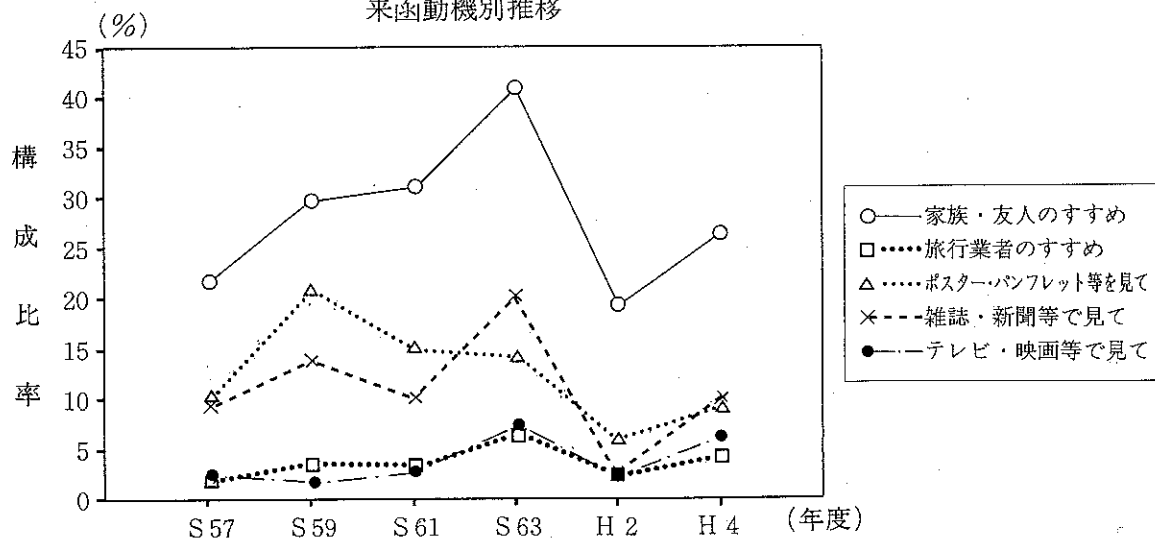


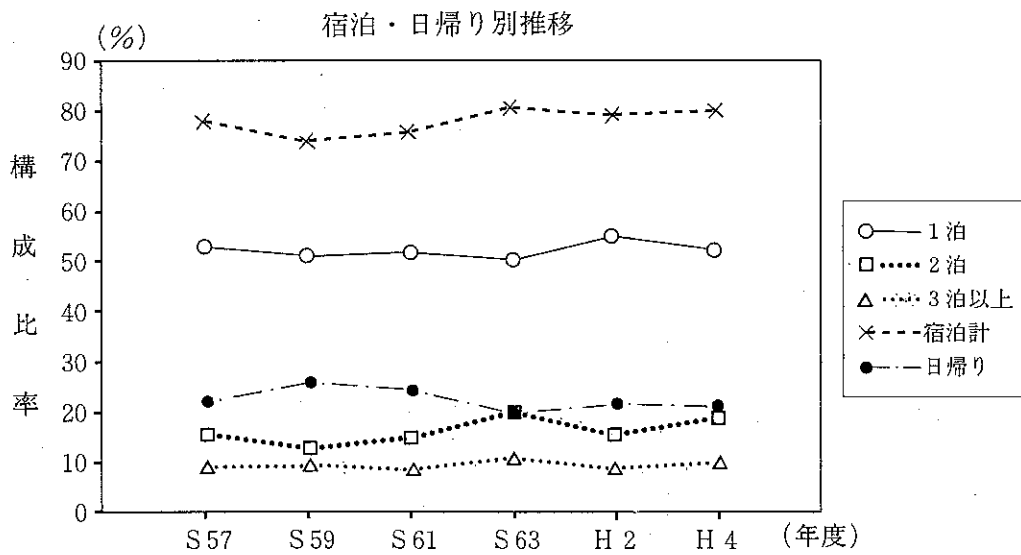
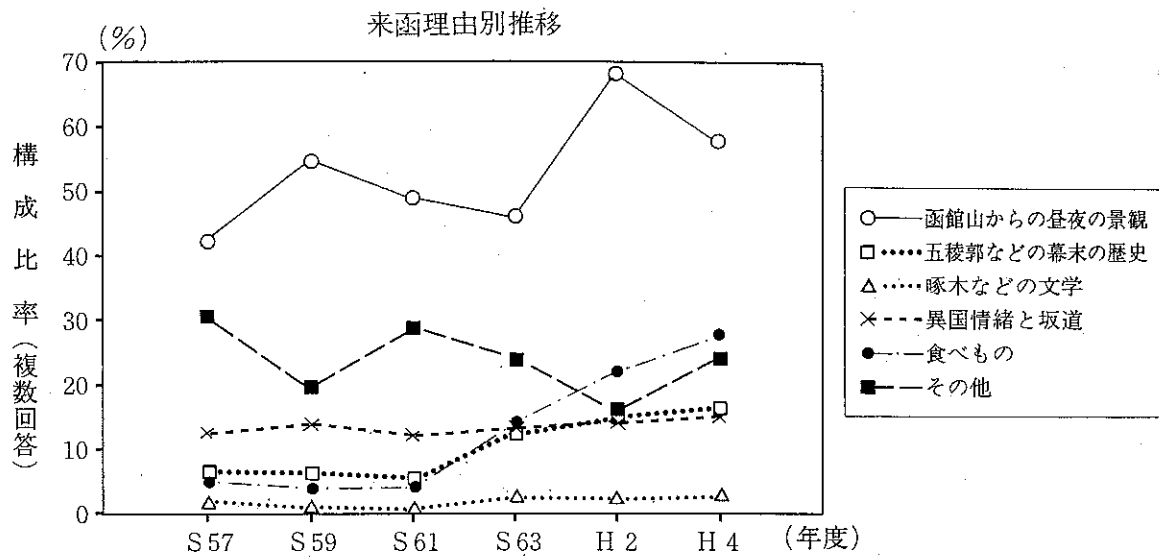


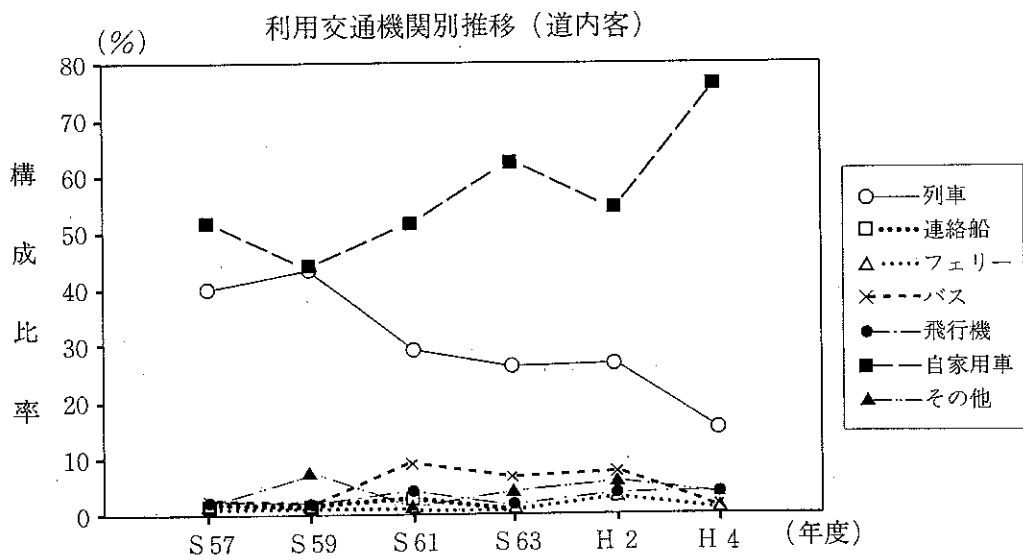
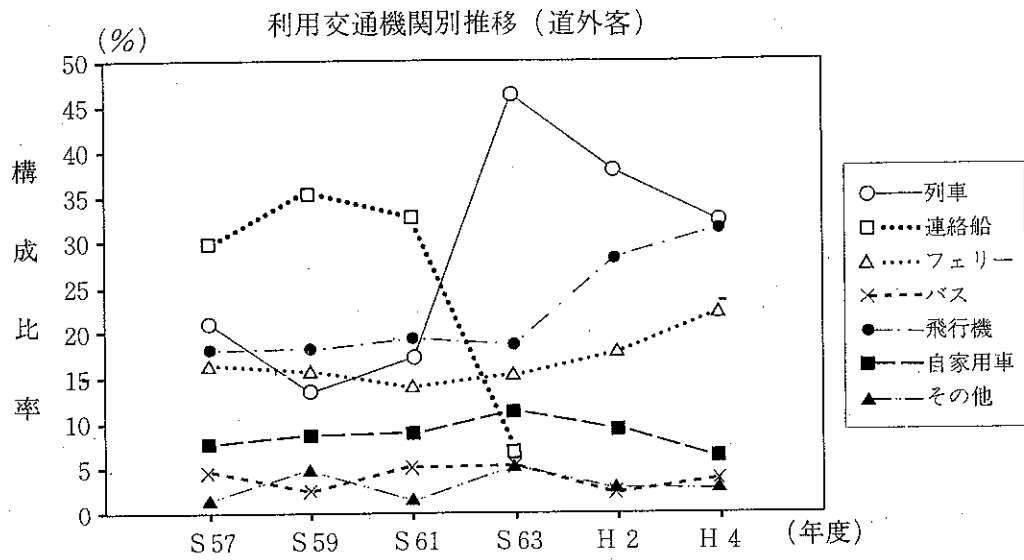
旅行形態別推移



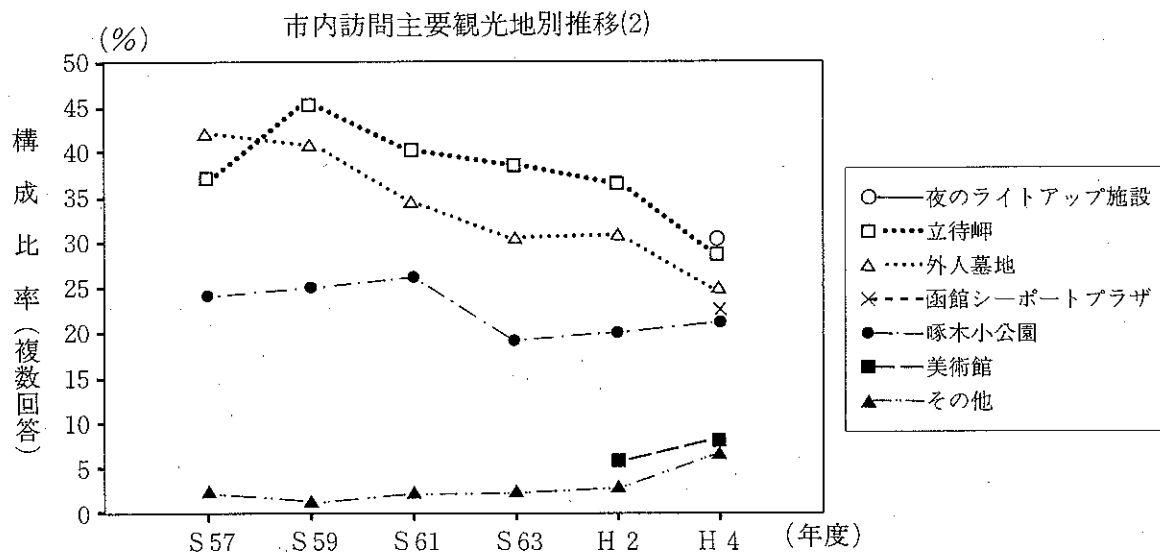
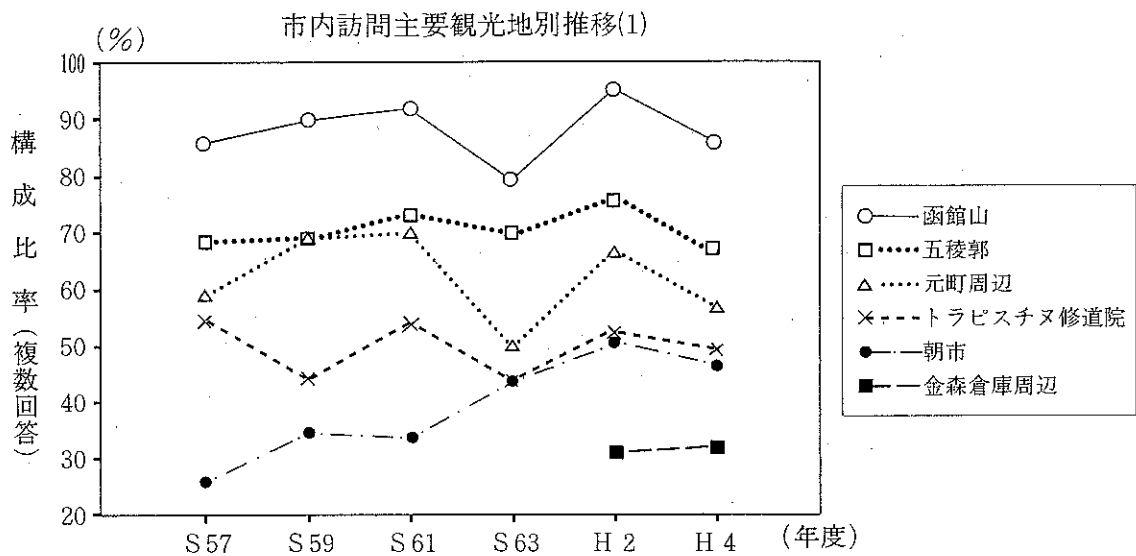
来函動機別推移

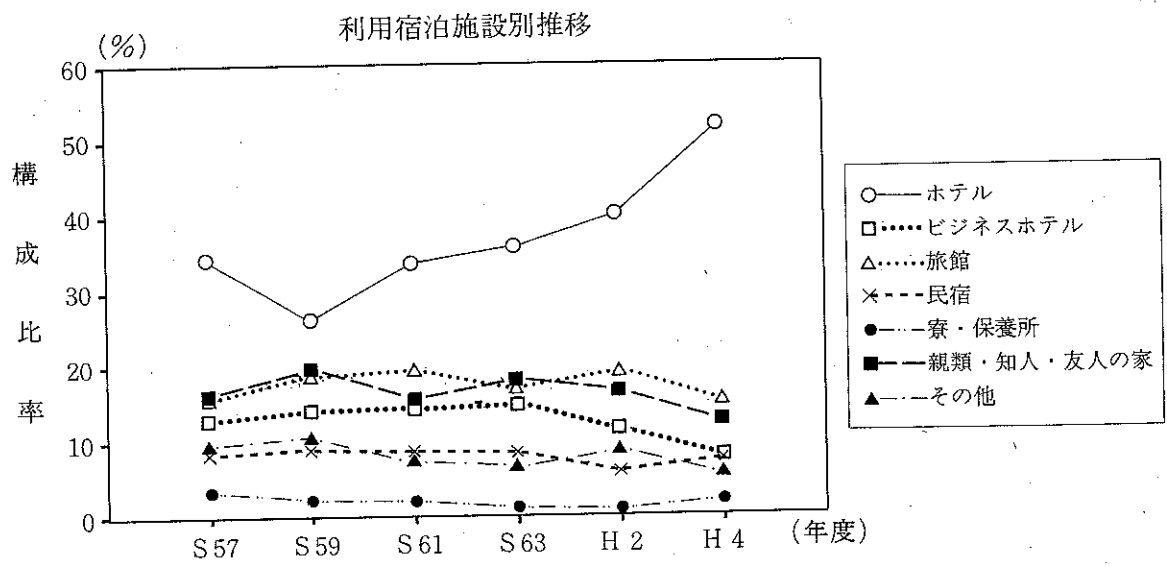
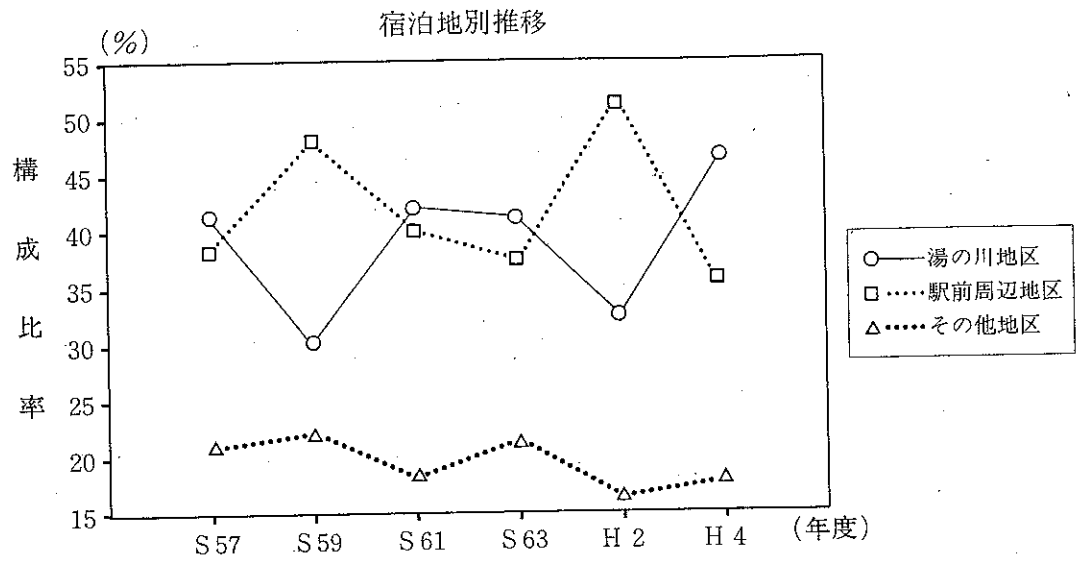


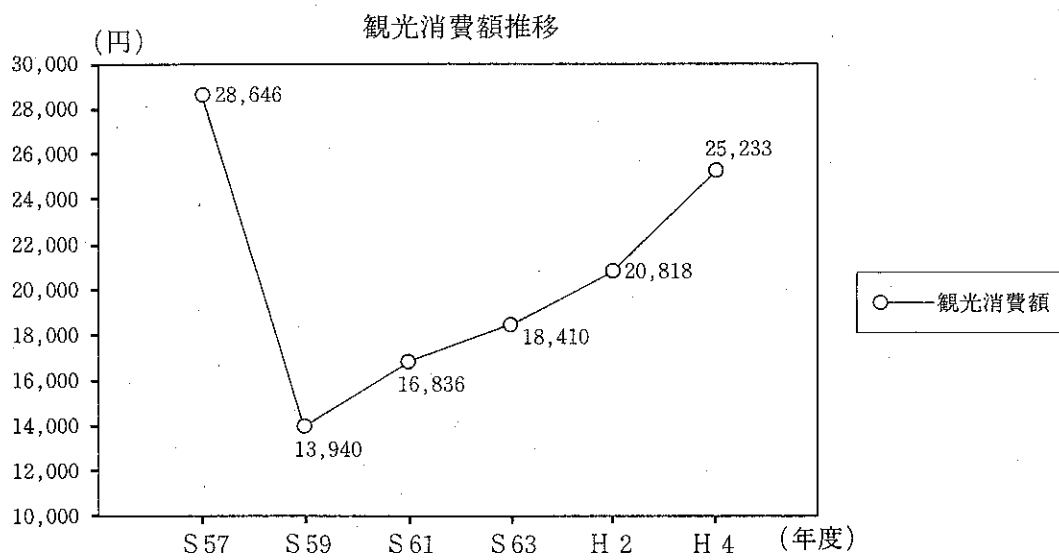
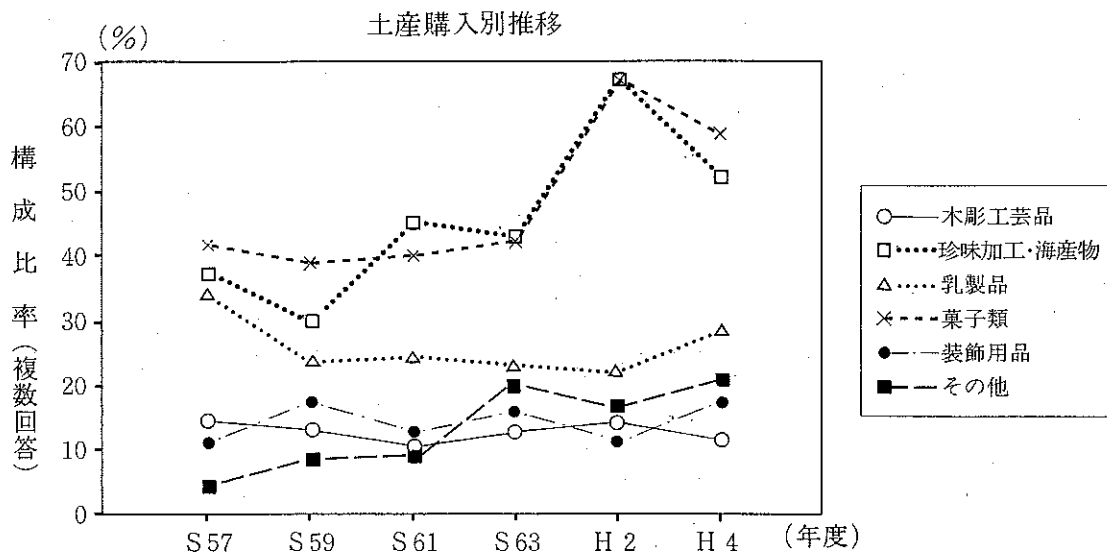












# 観光についての市民アンケート調査結果

(平成3年度)

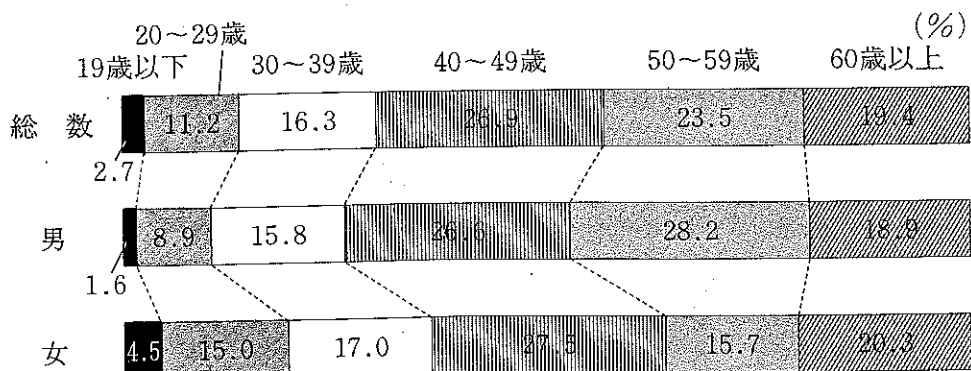
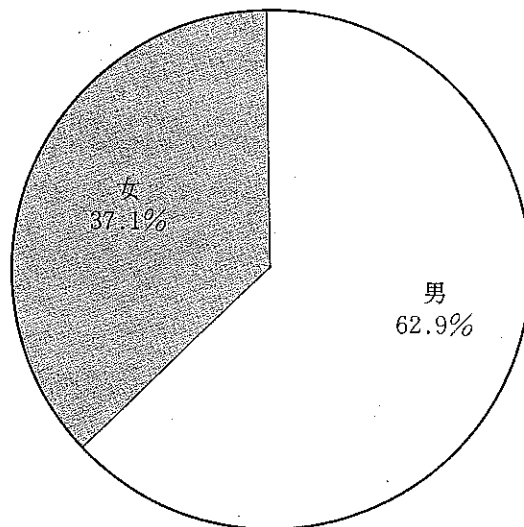
回答者の構成

(性別・年齢別表)

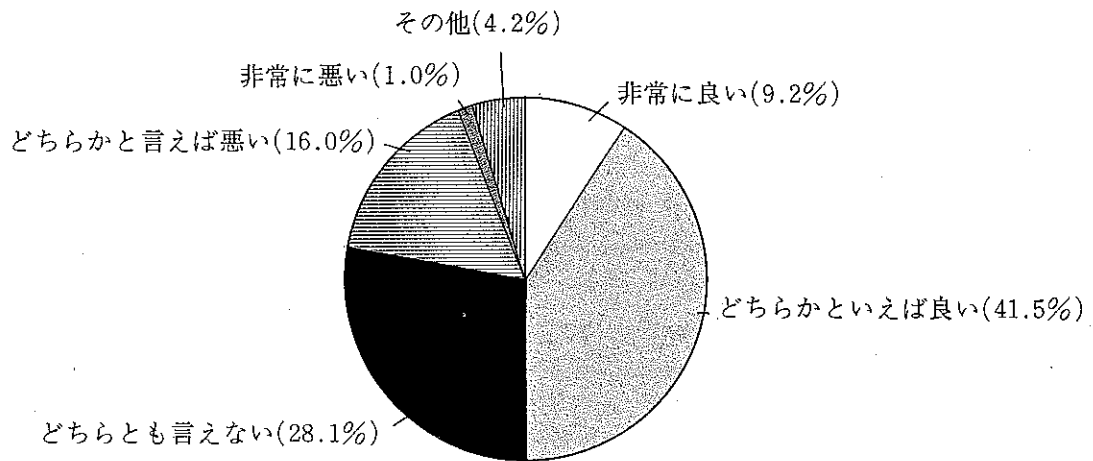
(単位：人)

区 分	総 数	構成比(%)	男	女
総 数	412	100	259	153
構成比(%)	100		62.9	37.1
19歳以下	11	2.7	4	7
20～29歳	46	11.2	23	23
30～39歳	67	16.3	41	26
40～49歳	111	26.9	69	42
50～59歳	97	23.5	73	24
60歳以上	80	19.4	49	31

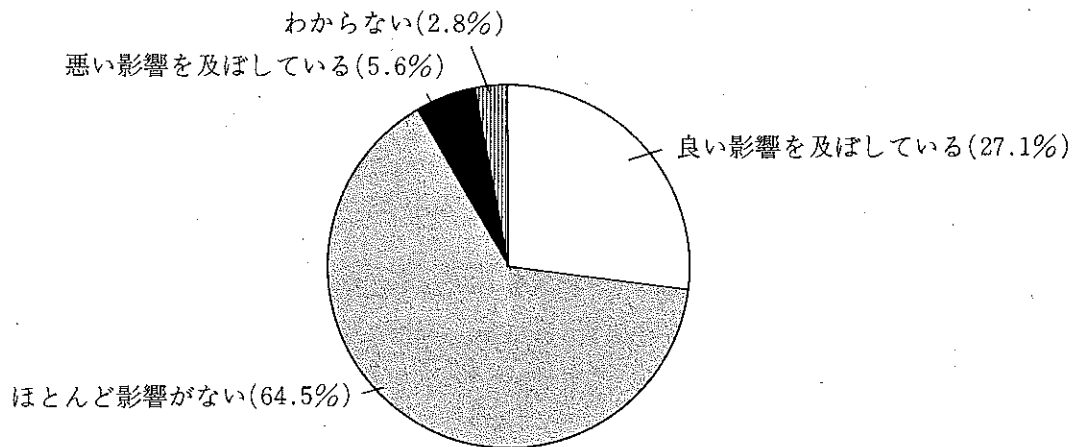
男 女 別



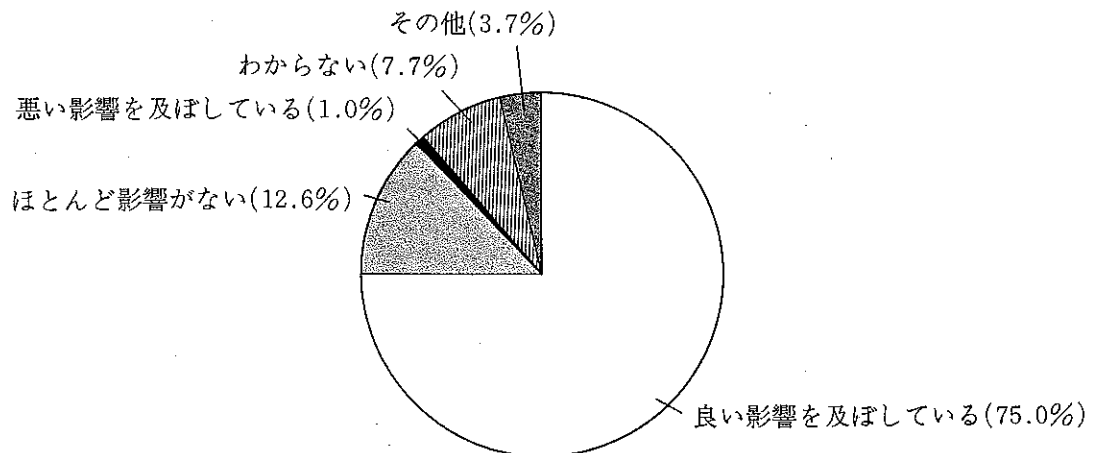
函館の観光地としての評価



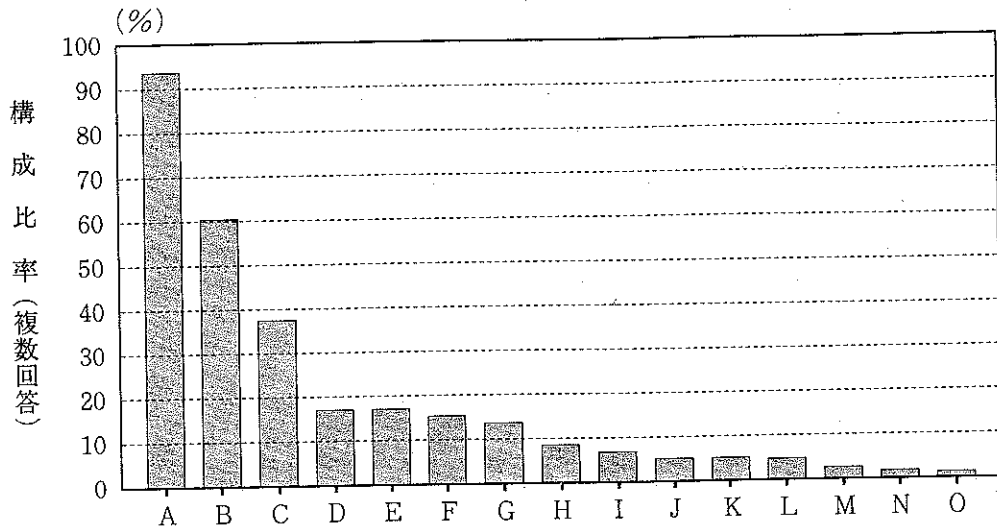
観光の与える影響  
(生活環境)



観光の与える影響  
(地域経済)

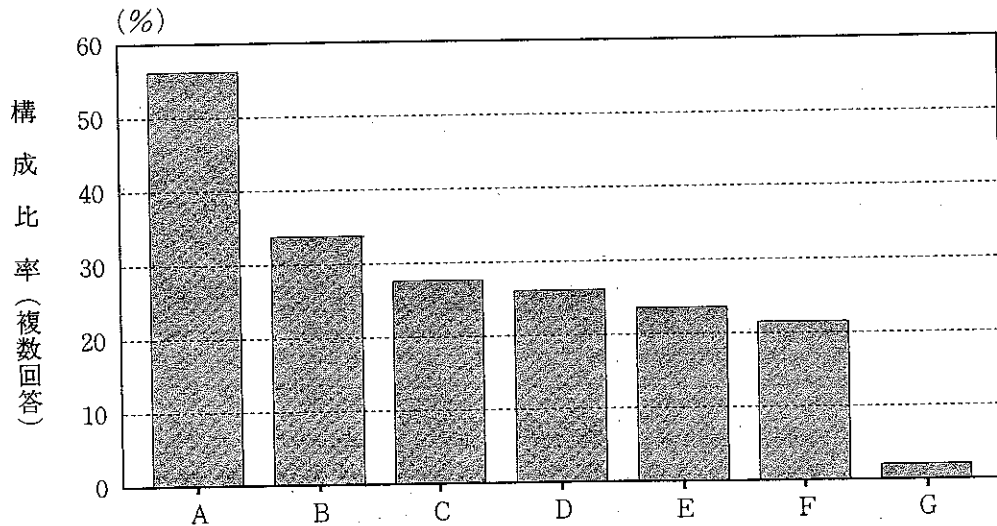


### 函館観光の魅力



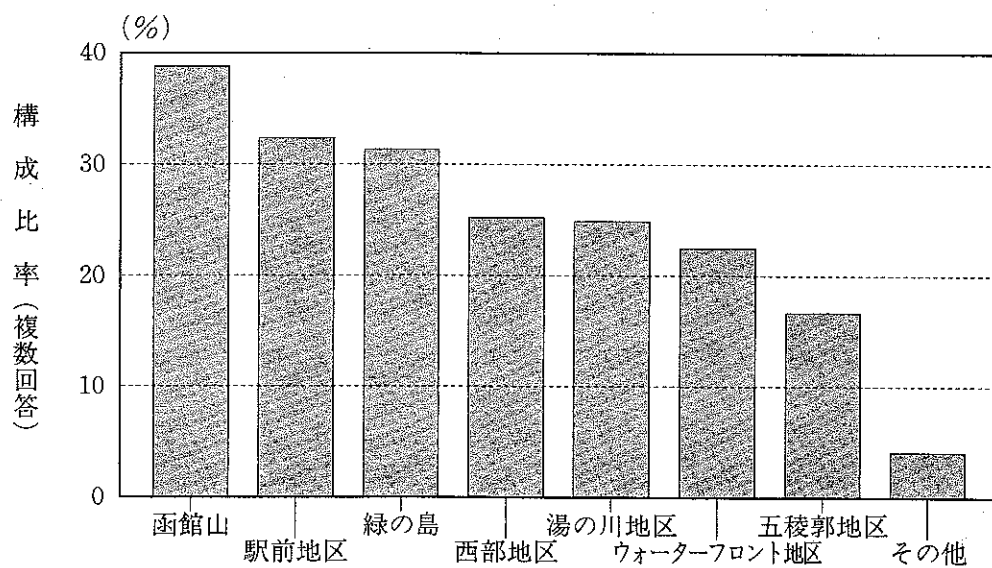
- A 函館山からの昼夜の景観
- B 異国情緒豊かな西部地区の街並みと坂道
- C 新鮮な海産物を主とした食べ物
- D ウォーターフロント地区と赤レンガ倉庫
- E トラピスチヌ修道院
- F 朝市
- G 特別史跡五稜郭跡
- H 湯の川温泉
- I 歴史的建造物等へのライトアップ
- J 市電
- K 四季の自然
- L 人情味の豊かさ
- M 立待岬
- N シーポートプラザ(摩周丸)
- O その他

### 函館観光の将来像

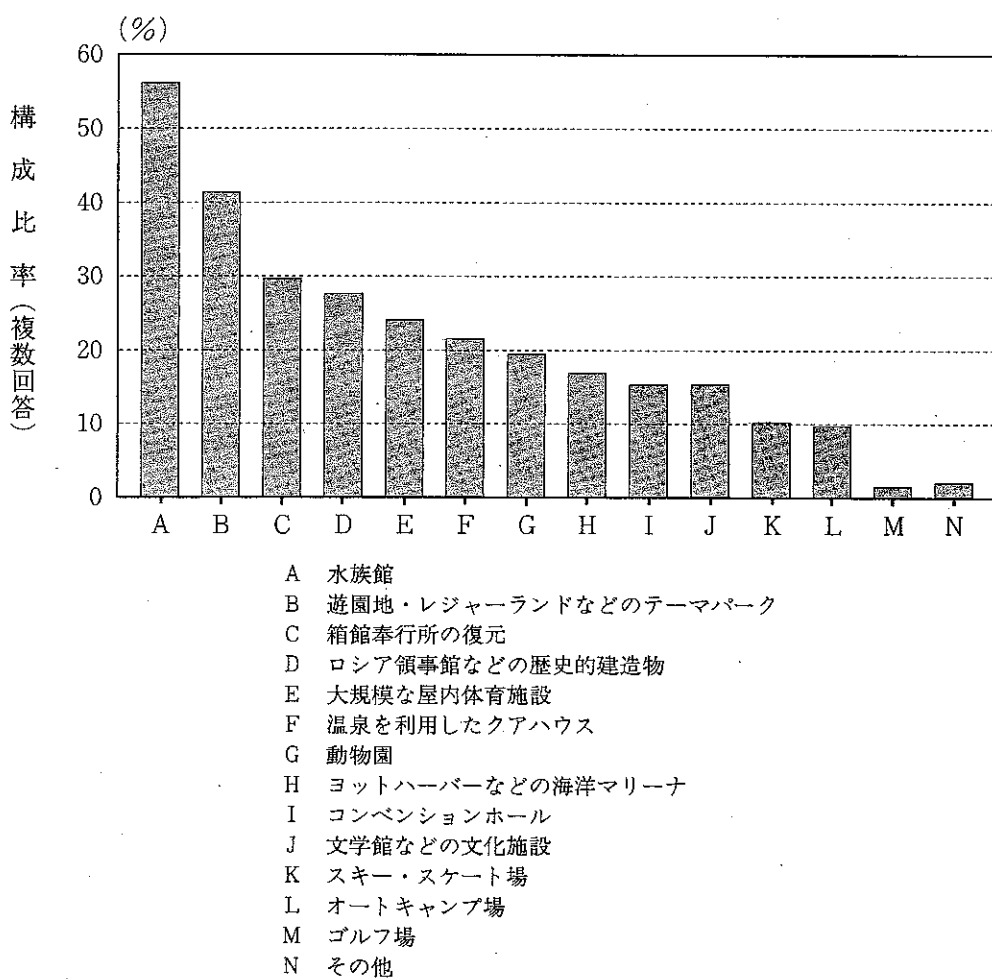


- A 歴史・文化を中心とする観光地
- B 海洋レクリエーションを中心とする観光地
- C 国際性にあふれる観光地
- D 滞在性の高いリゾート観光地
- E 温泉を活用した観光地
- F イベント・コンベンション施設を備えた観光地
- G その他

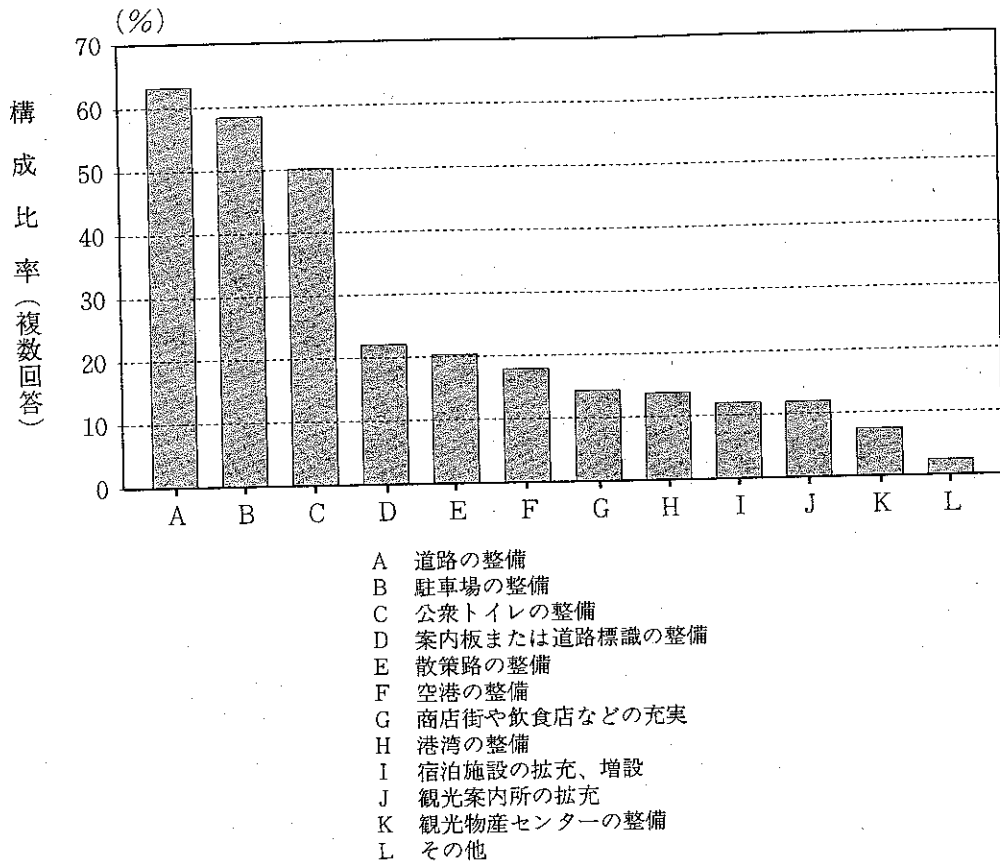
### 重要整備地区



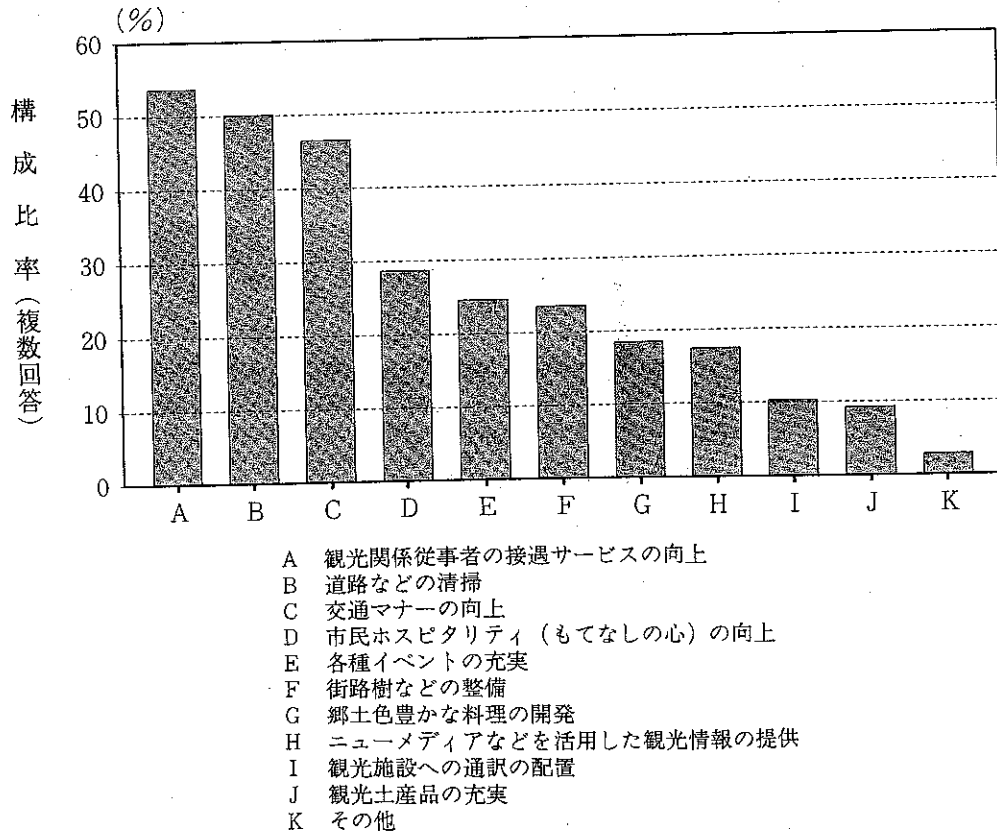
### 観光施設の整備



### 受入れ施設の整備

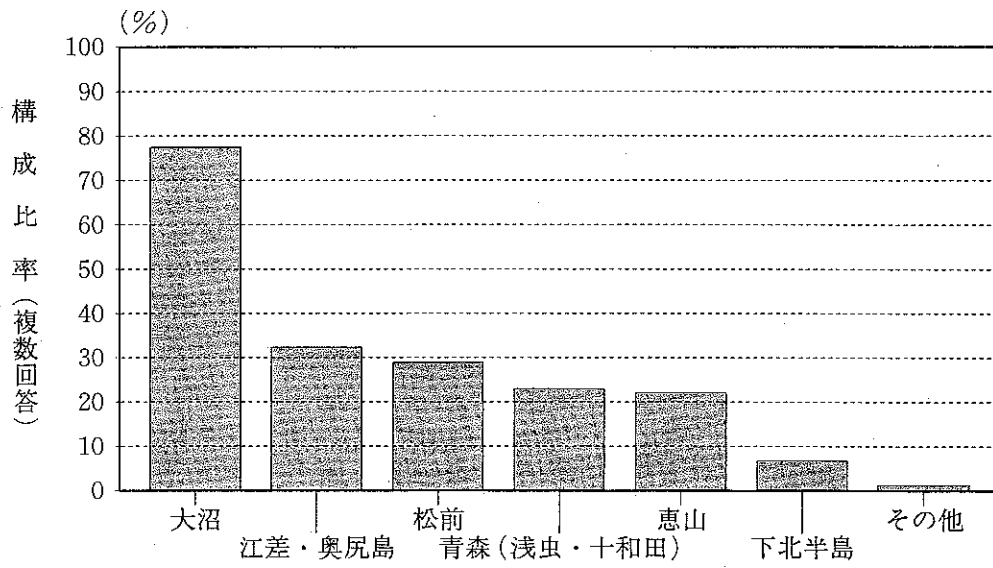


### 受入れ体制の整備

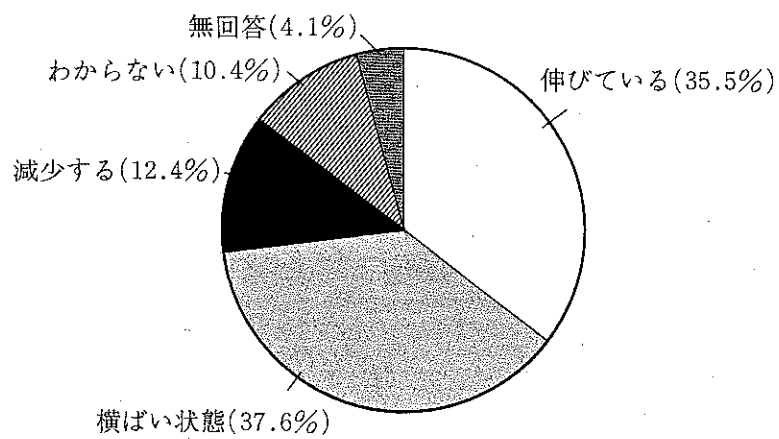




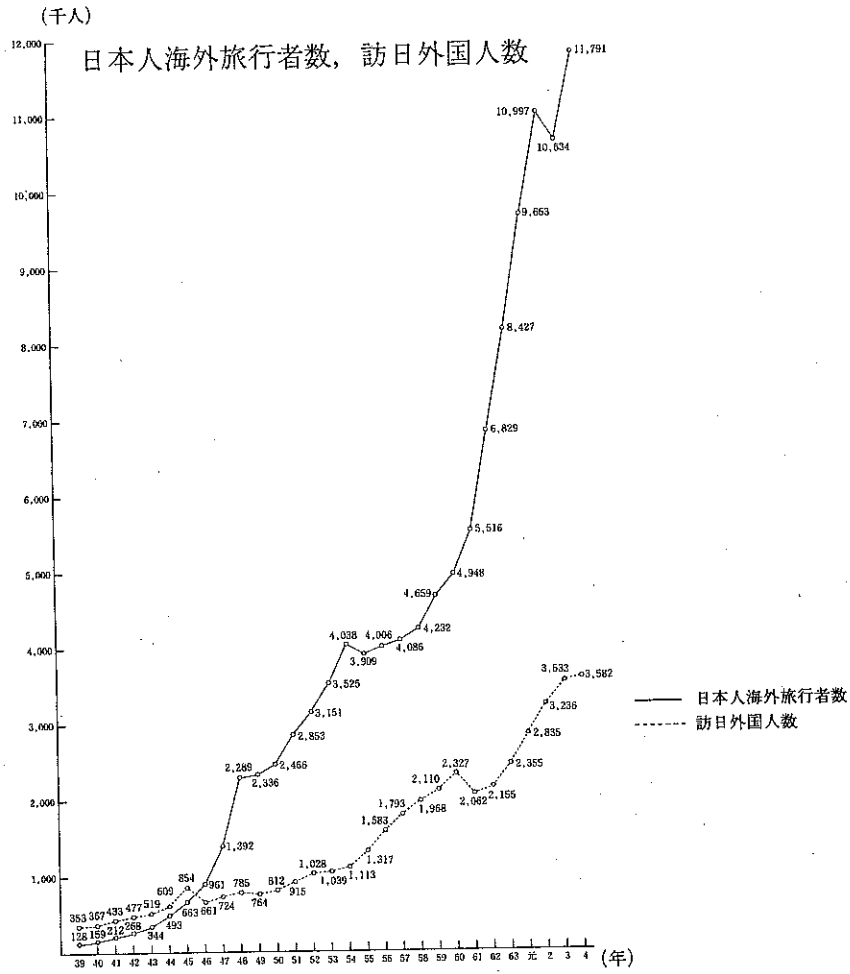
### 広域観光の方向性



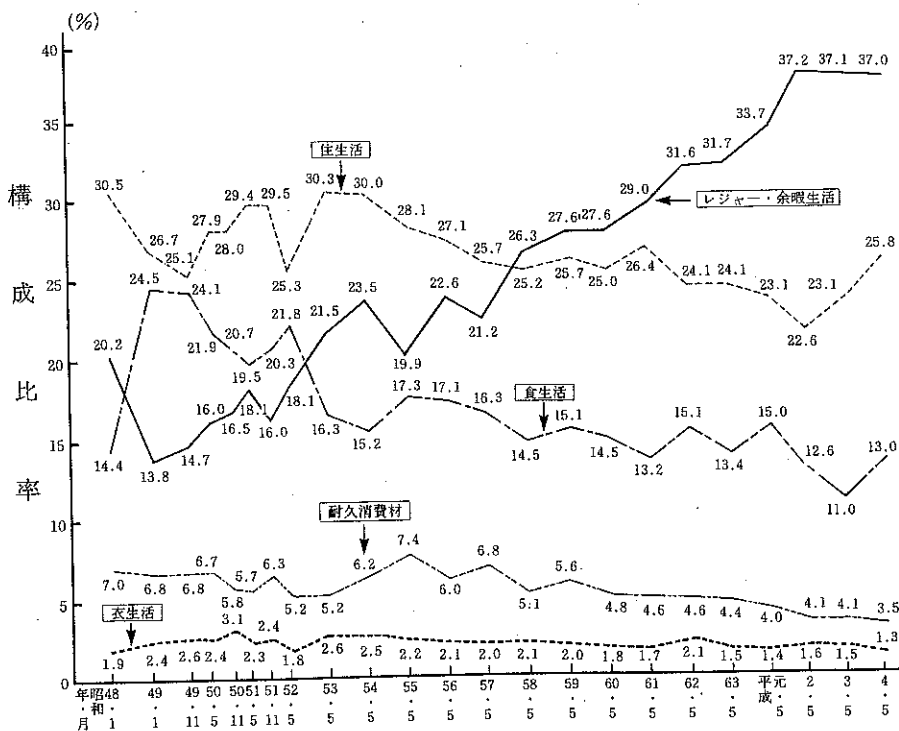
### 観光入込みの動向予測(10年後)



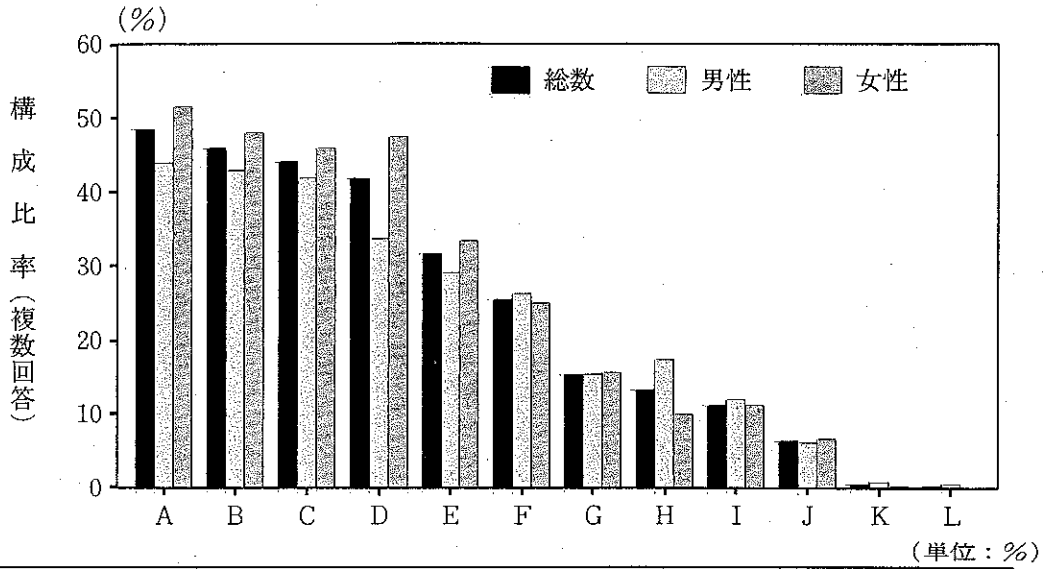
# 全国の観光動向



## 今後の生活の力点の推移

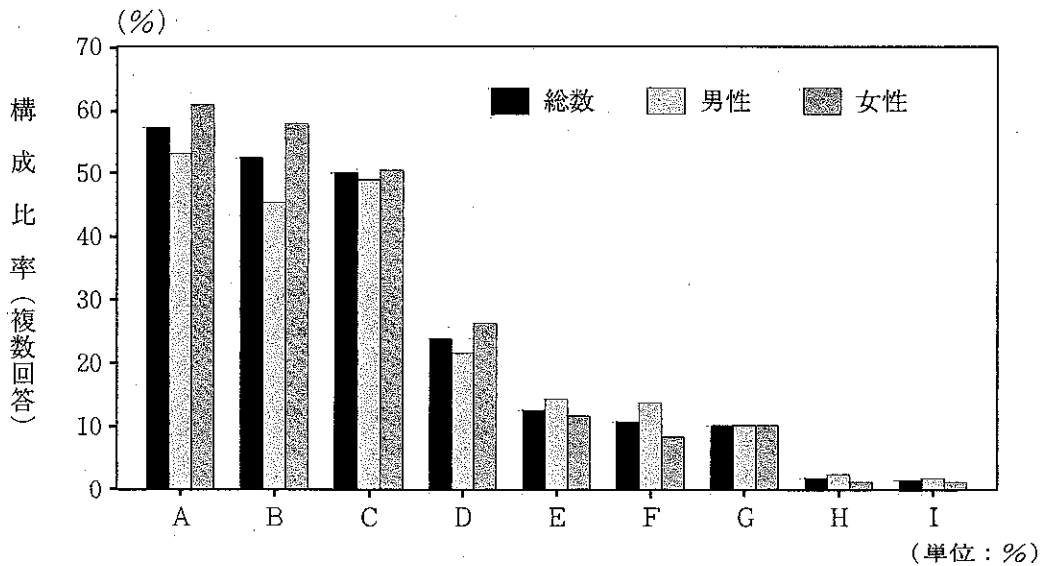


### 国内旅行先での行動意向



区分	総数	男性	女性	
A	美しい自然景観をみる	48.6	44.3	52.0
B	温泉に入る	45.8	42.9	48.2
C	のんびりとくつろぐ	44.4	42.2	46.3
D	珍しい料理を食べたり、ショッピングをする	41.8	34.2	47.9
E	史跡・文化財・博物館・美術館などを観賞する	31.8	29.3	33.8
F	家族と一緒に遊ぶ	25.6	26.3	25.1
G	大勢でにぎやかに過ごす	15.7	15.6	15.7
H	スポーツ、レクリエーション活動をする	13.2	17.4	9.9
I	旅行先の土地の郷土色豊かな伝統行事に参加する	11.6	12.0	11.4
J	祭りなどの催しをみる	6.2	5.9	6.4
K	その他	0.4	0.6	0.2
L	わからない	0.2	0.4	0.1

### 海外旅行先での行動意向



区分	総数	男性	女性	
A	美しい自然景観をみる	57.9	53.8	61.6
B	珍しい料理を食べたり、ショッピングをする	52.9	46.2	58.7
C	史跡・文化財・博物館・美術館などを観賞する	50.5	49.9	51.1
D	のんびりとくつろぐ	24.2	21.6	26.6
E	旅行先での特色ある行事などに参加する	13.0	14.8	11.5
F	スポーツ、レクリエーション活動をする	10.8	13.7	8.2
G	イベントなどの催しをみる	10.2	10.2	10.1
H	その他	1.7	2.4	1.1
I	わからない	1.3	1.5	1.1

総理府広報室「余暇と旅行に関する世論調査 (H 3. 10)」

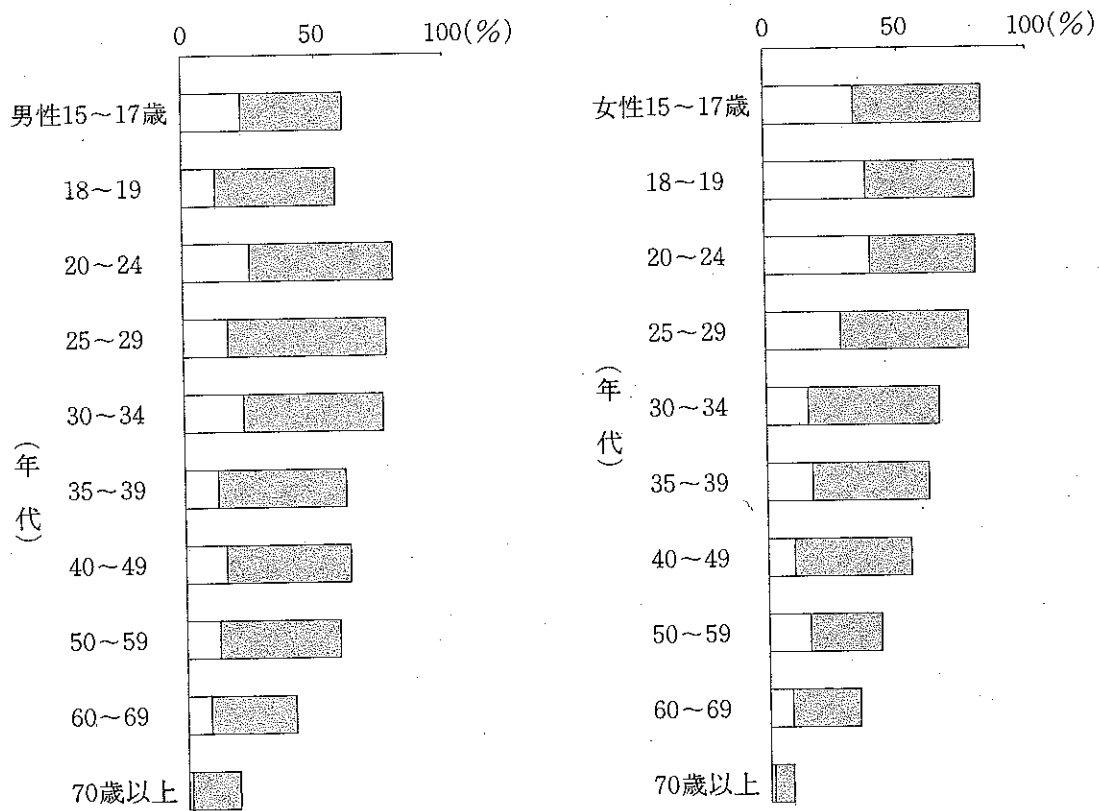
海外観光旅行の希望地域

(単位：%)

区分	1位	2位	3位
昭和61年	太平洋諸島* 22.6	ヨーロッパ 22.0	オーストラリア・ ニュージーランド 12.4
昭和63年	オーストラリア・ ニュージーランド 20.4	ヨーロッパ 18.1	太平洋諸島* 17.6
平成2年	オーストラリア・ ニュージーランド 21.5	ヨーロッパ 19.9	太平洋諸島* 15.6

\*ハワイとグアム、サイパンを加えたもの。

海外観光旅行の参加希望率



ぜひ機会があれば  
行きたい 行きたい

(注)日本観光協会「平成2年度 観光の実態と志向」

平成6年3月

新函館市観光基本計画

発行 函館市

〒040 北海道函館市東雲町4番13号

T E L 0138-21-3340